李太王實録中

外交関係抜萃

浅見倫太郎撰

カ5
4144

宮内省保管書籍

昭和五年七月十五日抄

李太王實録 四

No.

朝鮮通信使

豊臣秀吉薨後、德川家康海内を統一するや、文祿・慶長の役後、朝鮮との國交斷絶は雙方に不利なるを慨き、其の回復を圖らんとした。併し當時國事多端、自ら力を盡す能わざる爲め、一切の交渉を對馬の島主宗義智に委任した。是に於て宗氏は、慶長四年より屢々使を朝鮮に遣し、家康の意を通じたるに、漸く翌年、正使孫文彧と僧惟政の來れるあり、爾後修交の爲め、所謂通信使なる者を遣はすこと、なつた。

其の來聘の時代及び通信三使（正使、副使、從事官を三使と稱す）の姓名は次の如くである。

一慶長十三年（宣祖四十年丁未）五月、正使呂祐吉、副使慶暹、從事官丁世寛、修交の爲め、江戸城に於て德川幕府代將軍秀忠に謁し、歸途駿府に於て家康に謁す（一行五百人）

一元和三年（光海君九年己巳）八月、正使吳允謙、副使朴榏、從事官李景稷、海内統一を賀する爲め、伏見城に秀忠に謁す（一行四百三十八人）

一寛永元年（仁祖二年甲子）十月、正使鄭岦、副使姜弘重、從事官辛啓榮、將軍襲職を賀する爲め、江戸城に於て德川三代將軍家光に謁す（一行三百余人）

一寛永十三年（仁祖十年壬戌）十月、正使任絖、副使金世濂、從事官黄床、海内泰平を

010190318554

宮内省保管書（一部為、現之偏大字摺）

昭和五年七月十五日抄

李太王實録　四

No.

賀する為め、江戸城に於て、家光に謁し、又日光山に至りて東照宮を拜す（一行三百六十余人）

一、寛永二年（仁祖二十年癸未）七月、正使尹順之、副使趙絅、從事官申濡、世子生誕を賀する為め、江戸城に於て家光に謁し、又日光山に至り東照廟を拜す（一行四百余人）

一、明暦元年（孝宗六年乙未）十月、正使趙珩、副使兪瑒、從事官南龍翼、將軍襲職を賀する為め、江戸城に於て徳川四代將軍家綱に謁し、又日光山に至り東照廟を拜す（一行四百八十五人）

一、天和三年（肅宗八年己巳）八月、正使尹紐、完、副使李彦綱、從事官朴慶後、將軍襲職を賀する為め、江戸城に於て徳川五代將軍綱吉に謁す（一行四百七十三人）

一、正徳元年（肅宗三十七年）十月、正使趙泰億、副使任守幹、從事官李邦彦、將軍襲職を賀する為め、江戸城に於て徳川六代將軍家綱に謁す（一行四百九十四人）

一、享保四年（肅宗四十五年己亥）十月、正使洪致中、副使黄璿、從事官李明彦、將軍襲職を賀する為め、江戸城に於て徳川八代將軍吉宗に謁す（一行四百七十五人）

一、寛延元年（英祖三十四年戊辰）六月、正使洪啓禧、副使南泰耆、從事官曹命采、將軍襲職を賀する為め、江戸城に於て徳川九代將軍家重に謁す（一行四百七十八人）

010190318554

宮内省保管書籍

昭和五年七月十五日抄

李太王實録　四

No.

（明和元年（英祖四年甲申）三月、正使趙曮、副使李仁培、從事官金相翊、將軍襲職を賀するため、江戸城に於て徳川十代家治に謁す（一行四百七十人）

（文化八年（純祖二年辛未）三月、正使金履喬、副使李勉求、從事官李明五、徳川將軍家斉の襲職を賀する爲め、對馬に於て幕府の使小笠原圖書頭、脇阪安董と應接す

以上約三百五年間通信使の來聘十二回に及び、時に爭議も起ったが、徳川幕府は祖先家康の希望に基き、平和政策を以て圓滿に通交すべく繼續した。然るに當時の朝鮮は支那威力を假りて虚勢を張り、何事も尊大に構へ、堂々として日本に入り來るを以て、幕府も勢い之を送迎するに儀禮を傾き失費多く、一方貧弱なる朝鮮も亦送使毎に物資の徵發苛酷を極め、國内に非難の聲起るに至り、遂に文化八年より對馬に於て雙方の使者相會見することゝなったが、其の後亦國事多端となり、それぞれも停止するに至った。

010190318554

宮内省保管書籍

昭和五年七月十五日抄

李太王實録　四

宮内省図書寮

日本航路

No.

徳川時代、朝鮮より日本への航路は、大約次の如くであった。

釜山永嘉臺（二百里）発船、至左須奈浦（對馬　四百八十里）、鰐浦（對馬　三百里）、鴨瀬（對馬　百九十里）、府中（對馬　七十里）、勝本（壱岐　四百八十里）、藍島（筑前　三百五十里）、赤間関（長門　三百四十里）、向浦（長門　百八十里）、室隅（周防　百三十里）、上関（周防　百三十里）、津和（安芸　百三十里）、鎌刈（安芸　八十里）、忠海（備後　百三十里）、下津（備前　三百里）、牛窓（備前　百三十里）、室津（播磨　百三十里）、兵庫（摂津　百三十里）、大阪城（摂津　百三十里）、淀浦（山城）

此の航路計三千二百九十里とされて居た。而して、風を頼みに帆力に依って進行したる為め、風待ちに時日を費し、四五十日はかかった。

淀より陸路、京都、彦根、大垣を経て、名古屋に出で、それより東海道を江戸に向った。里程一千三百里、宿泊約十四五日を算してゐる。

往時朝鮮の人が、日本を遠と思ったのも無理は無い。交通機関の進歩せざる時代は、斯く時日を費さねば、往来は出来なかったのである。

010190318554

門 カ5
號 4144
卷

第八章　外國交際

第一節　事大交隣

資料

第十二類第一種總ノ一第一號乃至八六號第二種日省録ノ一第一號乃至一八七號參照

(按)清朝ニ對スル國交ハ之ヲ事大ト稱シ又其ノ往復文書ヲ輯録シタル通文館志卷三ニハ之ヲ以テ其ノ書ノ編目トスル所ナリ其ノ儀例ニハ仁祖王十五年丁丑正月ノ南漢降服條目ニ本ツク清朝詔諭ノ略ニ曰ク

明朝ノ誥命冊印ヲ納獻スルコト

其ノ使往ヲ絶ツコト

其ノ年號ヲ去ツルコト

長子再一子ヲ以テ質ト為シ諸大臣ハ子ヲ以テン子ナキトキハ弟ヲ以テスルコト

早稲田大學圖書館
昭27.2.11 買
藏書

若シ明朝ヲ征スルトキハ歩騎舟師ヲ調シ悞アルヲ得サル
コト今回櫻島ヲ兵攻スルニツキ船五十ヲ發スヘシ兵糧ハ
自備スルコト
聖節正朝冬至及ヒ慶弔アルトキハ俱ニ禮物ヲ獻スルコト

大臣及ヒ内臣ヲシテ表ヲ奉シテ以テ來ラシムルコト
表箋ノ程式及ヒ詔勅ヲ降スコト或ハ遣使傳諭ト使臣ノ相
見ト或ハ陪臣ノ謁見及ヒ送迎饋遺ノ禮ハ明朝ノ舊例ニ違
フナキコト云々
日本貿易ハ其ノ舊ノ如キニ聽スコト但シ當ニ其ノ使ヲ導
ニ京ニ赴カシムヘキコト
仍ホ年貢ヲ定ムルコト
是ナリ當時朝鮮ハ此ノ條目ニ遵テ其ノ長子次子ハ北行シ

諸臣質子ハ陪從シ瀋陽館ニ質タリ爾後年々ニ冬至使ヲ發
シ年貢ヲ納シ慶弔アルコトニ遣使往來シタルハ事大ノ外
交ニシテ通文館志同文考略ノ書ニ詳ナリ
支那カ朝鮮ヲ稱シテ屬國トイヘルハ舊例ヲ遵守シテ封冊
貢獻ノ典ヲ存スルヲイフノミ内政教令ニ至テハ一モ之ニ
關與セルモノニ非ス明治六年七月清國總理衙門カ我カ外
務卿副島種臣ノ問ニ對シテ答ヲ致シタル所モ亦タ同シ
事大ノ外交ニ關シ太王ノ即祚以後ノ封冊貢獻儀例ニ係ル
モノヲ鈔撮シ之ヲ本章第一節ト為ス
同文考略續ノ記載ハ明治十四年辛巳（即祚十八年光緒七年）ニ止マリ
又通文館志紀年續篇ノ記載ハ明治二十一年戊子（即祚二十五年）
光緒十四年ニ止マレリ爾後ニ關シテハ日省録ヲ抄録シテ之ヲ
補ヒ明治二十七年韓清國交ノ斷絶ニ至リテ止ム

日本ニ對スル交際ヲ交鄰ト名ツクルコト亦通文館志ノ編目トスル所ナリ當時ノ國交ハ大略慶長十四年己酉ノ約條ニ本ツクト雖モ文化八年ノ來聘以後六十餘年間ハ對馬藩ヲ介シテ往來交通セルニ過キス又人民各自ノ通商ヲ准スモノニハアラス明治維新以來我カ天皇ノ即位告ケ征夷府ノ廢止告ケ對州藩ノ停止告ケ太政官ノ設置告ケ外務卿ノ委任告ケ外務書記ヨリ諭書シ外務ヨリ告ケ太政大臣ヨリ告ケ釜山浦在留書記ヨリ諭書數通シ宗對州ヨリ諭書シ對州前委吏ヨリ諭書シ同通事ヨリノ諭書シ釜山浦在留館吏撤去ヲ告ケタルモ皆漢トシテ之ヲ省セサリシハ外交中絶ト以テ異ルコトナシ通文館志ハ太王ノ元年甲子條ニ對馬島主カ哲宗王ノ薨逝陳慰ノ舉アリシコトヲ録シ又四年丁卯條ニ源家定ノ立儲五年戊辰條ニ身死ヲ録セルモ月日明確ヲ缺クシ以テ本書ニ之ヲ採録セス而シテ明治九年二月修文以後ハ列國交際ト合シテ之ヲ第三節以下ニ掲ケタリ而シテ第二節ノ斥邪洋擾ハ特殊事項ニシテ太王ノ初政ニ屬シ列國交際ニ至リトト止メ記事ハ明治十四年ニ止ム

元治元年甲子 即祐元年 同治三年

正月二十一日 正使右議政李景在副使吏曹判書林肯洙書狀官
司僕寺正洪必謨ヲシテ哲宗王昇遐ノ訃ヲ告ケシメ謚ヲ請
ハシメ承襲ヲ請ハシム五月二十三日復命ス

(按)使行ノ日附ト回還ノ日附トハ皆召見ノ日ニ同シ以下招見
ノコトヲ一々セス

○禮部ヨリ咨アリ故ノ朝鮮國王ノ謚ハ忠敬トスルコトヲ
知照ス云々ト

(按)使行ノ時謚號三望ヲ議定奉往シ禮部ヨリ首望ヲ以テ謚ト
セルコトヲ通知スルノ例ナリ

○其ノ承襲ヲ請フノ奏ニ云フ伏シテ以ミルニ先臣昇不幸
ニシテ疾ニ遘ヒ醫藥効ナク迺チ同治二年十二月初八日卯
時ニ於テ薨逝セリ而シテ先臣王ニハ未タ嗣續アラス宗社

ニ托ナク朝野惶懼シ維繫アルコトナシ恭宣王宣恪王康穆
王莊肅王ニハ俱ニ傍支ナレ只莊順王五世孫翼成君熙アリ
冲年ニ在リト雖モ仁孝聰明夙ニ長人ノ德ヲ著ス茲ニ國事
ヲ權署セシム妾ハ此ノ時ニ於テ婦人タルヲ以テ避嫌スヘ
キニアラス謹テ此ニ具奏シ欽ミテ翼成君熙ヲ冊シ國王ヲ
承襲セシメンコトヲ請フ伏シテ惟ミルニ皇上ハ天地父母
ナリ特ニ繼絶ノ曠典ヲ推シ承統ノ至懇ニ循ハシメ該部ヲ
シテ誥命ヲ誕降セシメヨト大王大妃趙氏ヨリノ奏ナリ

(按)此ノ使行ハ正月二日奎章閣○略シテ内閣ト云ヘリ江華島ニ在ル奎章外閣ニ對シテ内タルナリ提學李景在ヲ拜シ右議政ト為スニ始マリ五月二十三日
復命ス召見ノ例アリ施賞後其ノ職ヲ逐ス其ノ使行ヲ重大
ナリトシテ右議政ノ官ヲ假シタルモノニシテ年々ノ冬至
使行ニハ判中樞府事ヲ正使トスル例ナリ

九月初二日上使戶部侍郎卑保副使副都統文謙通官二員入京シ
國王ヲ冊封スル勅一道誥命ノ勅一道國王ニ賜フ詔一道哲
宗大王ヲ賜祭スル文一道祭幣一道ヲ捧到ス
○慕華館ニ詣リテ勅使ヲ迎フ
布裏ノ翼善冠布ノ袍布裏ノ烏犀帶白皮ノ靴ヲ具シ輿ニ乘
シテ協陽門ヲ出テ延英門外ニ至リ步過シテ仁政門外ニ出
テ輿ヲ降リテ轎ニ乘シ敦化門ニ由リ崇禮門ヲ出テ慕華館
ニ至リ轎ヲ降リテ幄次ニ入ル遠接使洪在喆ヲ幄次ニ召見
シテ曰ク儐館ニテ憂ヲ經シ無恙ナリシヤ勅使ノ時沿路ハ
頓○過失ノ義ナカリシヤト在喆仍テ列邑ノ凋殘シテ樣ヲ成サ
ヽルモノアリ變通事宜ハ廟堂ヲシテ稟處セシメンコトヲ
奏ス曰ク依リテ之ヲ為セト少頃ニシテ改メテ翼善冠無楊
黑團領袍青鞋素玉帶ヲ具シ幄次ヲ出ツ勅書祭文至ル祗迎

禮ヲ行フコト訖ル仍テ轎ニ乗レ敦義門ニ由リ敦化門ヲ入リ仁政門外ニ至リテ轎ヲ降リ輿ニ乗レテ仁政門ヲ入リ輿ヲ降リテ小次ニ入ル

○仁政殿ニ詣リテ宣敕儀ヲ行フ

敕書至ル小次ヲ出テ祗迎スルコト訖リ還テ小次ニ入ル敕使ハ勅書誥命ヲ捧レ入テ案ニ置ク小次ヲ出テ四拜ヲ行ヒテ跪ク司香二人ハ三ヒ香ヲ上ツル西堦ニ由リテ入リ受敕位ニ詣リ北向シテ立ツ敕使ハ有制ト稱ス太王ハ跪ツク敕使ハ敕書誥命ヲ奉シ西向シテ太王ニ授ク之ヲ受ケ覧訖リテ近侍ニ授ケ案ニ還置ス太王ハ殿ヲ出テ階上ニテ東向シテ立ツ捧敕官宣敕官展敕官ハ敕案ノ前ニ詣ル敕使ハ敕書ヲ奉レテ捧敕官ニ授ケ正門ニ由リテ出テ宣讀位ニ就ク捧敕官ハ敕書ヲ以テ宣讀官ニ授ク宣讀官ハ以テ展敕官ニ授ケテ對展シ宣敕官ハ敕ヲ讀ム其ノ略ニ曰ク云々故ノ朝鮮國王李昇前猷ヲ克紹シ臣職愈恭シキコト十四年東邦ヲ保障シ思海甸ヲ流ル、コト三千里北極ニ朝宗シ天家ニ朔奉ス云々嗣續惟レ艱ニ宗兆奚ニカ賴ラン権署國事李某幼ニシテ仁孝ニ敦ク夙ニ聰明ヲ兼ル既ニ莊順ノ親タリ應ニ宗彝ノ器ヲ守ルヘシ特ニ奏請ヲ俞トシ襲封シテ朝鮮國王ト為ス云々特ニ茲ニ詔示シ咸ナ聞知セシムト宣讀スルコト訖ル太王ハ降リテ拜位ニ復シ四拜ノ禮畢リ幕次ニ還入ス

○孝文殿ニ詣リテ受弔儀ヲ行フ

改メテ衰服ヲ具シ入テ西堦下ノ拜位ニ就キ四拜シテ跪ク司香二人ハ香ヲ進メテ三上ス受敕位ニ詣ル敕位ハ有制ト稱ス太王跪ク敕使ハ敕ヲ宣シテ曰ク弔賻スト宣シ訖ル降リテ位ニ復シ還テ齋殿ニ入ル賜祭ノ時至リテ幄次ヲ出テ

入リテ東階ニ就キ西向シテ跪ク敕使ハ魂殿ニ詣リ正門ニ
由リテ入リ祭文案前ニ詣リ執事ハ祭文及ヒ幣ヲ奉レテ敕
使ニ進ム敕使ハ案ニ奉置レ三タヒ上香シ奠幣シテ還テ位
ニ就ク讀祭文官ハ祭文ヲ奉レ西向シテ立チ祭文ヲ讀ム曰
ク云々爾チ朝鮮國王李昞粹ヲ海邦ニ育シ封ヲ天室ニ受ケ
朝宗ヲ效シテ辰拱シ正朔ヲ禀ケテ寅承シ欵ハ一誠ヲ納レ
丹衷ニ矢ヒテ以效順シ猷ハ八道ニ宣ヘ青社ヲ撫シテ以テ
延庥ス云々靈其レ知ルアラハ茲ニ嘉薦ヲ歆ケヨト禮畢リ
テ齋殿ニ入ル
○上副敕ニ接見ス
改メテ布裹ノ翼善冠布ノ袍布裹ノ烏犀帶白皮靴ヲ具シ殿
内ニ詣リ東向シテ立ツ敕使ハ東門ヨリ入リテ殿内ニ就キ
西向シテ立ツ再拜ノ禮ヲ行ハント請フ敕使ハ辭シテ只タ
揖禮ヲ行フ仍テ茶禮ヲ行フコト訖リ敕使ハ座ヲ起ツ揖シ
テ仁政門外ニ送リ輿ニ乘シテ協陽門ヲ入リ還内ス
九月初十日館所ニ詣リテ接見シ茶禮ヲ行フ
布裹ノ翼善冠布ノ袍布裹ノ烏犀帶白皮靴ヲ具シ輿ニ乘シ
テ協陽門ヲ出テ延英門外ニ至リ歩過シテ仁政門外ニ至リ
テ輿ヲ降リ轎ニ乘シテ敦化門ヲ出テ南別宮ニ至リテ轎ヲ
降リ輿ニ乘シテ幄次ニ至ル
少頃シテ次ヲ出テ西階下ニ入ル両敕ハ東階下ニ向フ太
王ハ西階ニ由リテ廳ニ陞ル敕使ハ東階ニ由リテ廳ニ陞ル
揖禮シ行ヒ仍テ茶禮ヲ行フコト訖ル轎ニ乘シテ敦化門ニ
由リ延英門外ニ至リ歩過シテ協陽門ヲ入リ還内ス
九月十二日慕華館ニ詣リテ送敕ス
布裹ノ翼善冠布ノ袍布裹ノ烏犀帶白皮靴ヲ具シ輿ニ乘シ

テ協陽門ヲ出テ延英門外ニ至リ歩過シテ仁政門外ニ出テ
輿ヲ降リ轎ニ乗シテ敦化門崇禮門ヲ出テ慕華館降轎所ニ
至リテ轎ヲ降リ輿ニ乗シ幄次前ニ至リテ輿ヲ降リ幄次ニ
入ル敕使至ル同シク陛リ揖禮ヲ行ヒ仍テ茶禮ヲ行フコト
訖ル各轎上ニ於テ揖ヲ作シ崇禮門敦化門ニ由リ延英門外
ニ至リ歩過シテ協陽門ヲ入リ還内ス
○伴送使趙然昌ヲ慕華館ノ幄次ニ召見シテ曰ク善為往還
セヨヤト
九月二十七日正使判中枢徐衡淳副使禮曹判書趙熙哲書状官司
僕寺正鄭顯德ヲシテ賜祭ヲ謝セシメ賜謚ヲ謝セシメ冊封
ヲ謝セシメ前ニ進賀謝恩兼冬至使臣ニ加賞セルヲ謝セシ
メ陳奏准請謝恩ノ方物移准ヲ謝セシメ謚ヲ請ヒ承襲ヲ請
ヒシトキノ方物移准ヲ謝セシメ漂民出送ヲ謝セシム翌年

乙丑二月初六日復命ス
十月二十日正使判中枢副使吏曹判書尹正求書状官兼掌令張錫
駿ヲシテ慶源賞給ノ材木ヲ謝セシメ漂民出送ヲ謝セシメ
兼テ冬至使行ヲ為サシム翌年乙丑四月初八日復命ス

慶應元年 即祢二年 同治四年

十月二十日 正使判中樞李興敏副使禮曹判書李鍾淳書狀官兼執
義金昌熙シテ賜筆ヲ謝セシメ三起ノ方物移准ヲ謝セシ
メ冬至使臣ノ材木謝恩ノトキノ方物移准ヲ謝セシメ冬至
使臣ノ加賞ヲ謝セシメ漂民ノ出送ヲ謝セシム冬至使行ヲ
兼又翌年丙寅四月初一日復命ス

慶應二年丙寅 即祐三年 同治五年

四月初九日正使右議政柳厚祐副使禮曹判書徐堂輔書狀官兼執義洪淳學ヲシテ咸豊帝ノ祔廟ヲ賀セシメ王妃ヲ封冊セントコトヲ請ハシメ又詔書ノ順付ヲ謝セシメ賜筆賜恩ノ謝トキノ方物移准ヲ謝セシメ冬至使臣ノ加賞ヲ謝セシメ漂民ノ出送ヲ謝セシム八月二十三日復命ス

○王妃ヲ封冊センコトヲ請フ奏ノ略ニ云フ臣仰テ皇庇ニ藉リ藩緒ヲ嗣守ス惟負荷スル克ハサルヲ是レ懼ル而シテ今コヽニ中月ノ制甫メテ闋ル臣ノ父王妃趙氏臣カ壺職未タ備ハサルヲ以テ日夜憂ト為ス臣上ハ宗祀ノ重ヲ惟ニ下ハ臣僚ノ懇ニ循ヒ已ニ驪城府院君閔致禄ノ女ヲ納レテ正室ト為シタリ陳奏請封ハ自カラ是レ候度アリ照例錫命ハ厥レ彝典アリ伏シテ乞フ皇上特ニ儀部ヲシテ恩誥ヲ頒降

セシメヨト

五月二十九日咨官前正李用俊ヲシテ漂人ヲ押解スルタメノ咨文ヲ賫ラシテ行カシム

八月十二日咨官前正吳慶錫ヲシテ洋船ノ情形ヲ報スルタメ咨文ヲ賫ラシテ行カシム

九月二十四日上使侍郎魁齡副使散秩大臣希元通官二員入京シ王妃ヲ封冊スル誥一道誥命彩幣敕一道ヲ捧到ス

○慕華館ニ詣リテ敕使ヲ迎フ是ノ日翼善冠袞龍袍ヲ具シ輿ニ乘シ仁政門外ニ至リテ轎ニ乘シ出テ、慕華館ニ至リ降リテ幕次ニ入リ詔書ノ將ニ至ラントスルトキ幄次ヲ出テ、祗迎位ニ就ク敕使ハ詔書ヲ奉シテ龍亭中ニ置ク祗迎スルコト訖リ敦義門ニ由リ敦化門ヲ入リテ仁政門外ニ至リ轎ヲ降リ輿ニ乘シテ仁政門ヲ入リ輿ヲ降リテ小次ニ入ル

○次ニ仁政殿ニ詣テ宣詔ノ儀ヲ行フ

詔書ノ龍亭ニ至リシトキ小次ヲ出テ、祗迎シ小次ニ還入ス引禮ハ敕使ヲ引テ位ニ就カシメ詔敕及ビ誥命ヲ奉シ入テ案ニ置ク太王ハ次テ出テ、拜位ニ就キ行禮スルコト訖リテ司香二人ハ三タビ香ヲ上ツル左右贊禮ハ前導シテ西階ニ由リ仁政殿ノ戶外ニ至ル承旨ハ前導シテ入リ受敕位ニ詣ル北向シテ立ツ敕使ハ有制ト稱ス太王ハ跪ツク敕使ハ詔書ヲ奉シ西向シテ授ケ太王ハ受ク覽訖リテ近侍ニ授ケ案ニ還置シ行禮スルコト儀ノ如クス承旨ハ前導シテ殿ノ戶外ニ出ツ贊禮ハ前導シテ殿階ノ上ニ至リ東向シテ立ツ

引禮ハ兩敕使ヲ引テ殿外ヲ出テ西向シテ立ツ捧詔官宣詔官展敕官ハ詔案ノ前ニ詣ル敕使ハ詔書ヲ捧ケテ捧詔官ニ

授ク正門ニ由リテ出テヽ宣讀位ニ就キ捧詔官ハ詔書ヲ以
テ宣讀官ニ授ク宣讀官ハ以テ展詔官ニ授ケテ對展ス
宣詔官ハ詔ヲ讀ム曰ク皇帝ハ朝鮮國王ニ敕諭ス王ノ奏ヲ
覽ルニ云々陳奏シテ封ヲ請フト朕典禮ノ関スル所ナルヲ
以テ特ニ所請ヲ允シ云々誥命ヲ齎捧セシメ関氏ヲ封シテ
國王妃ト為ス云々朕カ命ヲ替ルコトナカレ
誥命奉天承運皇帝制シテ曰ク云々斯ノ綸綍ハ遥カニ典ヲ
頒チ正内ニ特降スト○甫ナ朝鮮王妻閔氏云々宜シク寵命
ニ膺ルヘシ茲ニ特ニ甫ヲ封シテ朝鮮國王妃ト為ス云々朕
カ命ヲ替ルコト勿レ云々ト
宣讀スルコト訖リ引禮ハ敕使ヲ引テ還入シ賛禮ハ太王ヲ
導キ降リテ位ニ復セシメ行禮ス宗親文武百官同シ禮畢リ
西階ヲ陞リテ幄次ニ就ク詔書ハ龍亭ニ盛リ綵物ハ綵輿ニ
盛リテ内ニ入ル
○次ニ上副敕ヲ接見シテ宴禮ヲ行フ
敕使ハ殿内ニ入就シ西向シテ立ツ太王ハ殿内ニ入就シ東
向シテ立チ再拜ノ禮ヲ行ハントス請フ敕使辞シテ只揖ノ禮
ヲ行フ皇帝ノ候ヲ問フコト訖リテ各座ニ就キ仍テ宴禮ヲ
行ヒ膳ヲ進ム樂作リ工舞フコト訖リテ敕使座ヲ起ツ太王
ハ座ヲ起テ両使ト揖シ仁政門外ニ送ル輿ニ乘シテ協陽門
ヲ入リテ還内ス
○翌二十五日館所ニ詣リテ敕使ニ接見シ茶禮ヲ行フ是ノ
日太王ハ翼善冠衮龍袍ヲ具シ輿ニ乘シテ協陽門ヲ出テ輿
ヲ降リ轎ニ乘シテ敦化門ヲ出テ南小館ニ至リテ轎ヲ降リ
幕次ニ入ル太王ハ次ヲ出テヽ正廳前ノ西階下ニ至リテ立
チ敕使ト揖讓シ階ヲ陞リテ正廳ニ入リ各々位ニ就キ揖禮

ヲ行ヒ椅ニ就キ茶禮ヲ行フコト儀ノ如クス座ヲ起テ敕使ト相揖スルコト訖リテ幕次ニ入ル少頃ニシテ轎ニ乘レテ幕次ヲ出テ敦化門ヲ入リ協陽門ニ由リテ還内ス

○翌二十六日幕華館ニ詣リテ敕使ヲ送ル

是ノ日太王ハ翼善冠袞龍袍ヲ具シ轎ニ乘レテ協陽門ヲ出テ敦化門ニ由リ幕華館ニ至リ轎ヲ降リ輿ニ乘レテ幄次ニ入ル少頃ニシテ敕使至ル太王ハ次ヲ出テ西堦ヲ降リヲ立ツ敕使ハ東堦ヨリ陞リテ立ツ揖讓シテ次ニ入リ位ニ就キ揖禮ヲ行フコト訖リ各々椅ニ就キ仍テ茶禮ヲ行フコト儀ノ如クス敕使座ヲ起ツ太王ハ座ヲ立チ西堦ヨリ降リテ立ツ敕使ハ東堦ヨリ降リテ立チ相向テ揖禮ヲ行ヒ而シテ送ル伴送使李承輔ヲ召見ス少頃ニシテ輿ニ乘レ幄次ヲ出テ輿ヲ降リ轎ニ乘レ崇禮門ニ由リテ敦化門ヲ入リテ還内ス

是ノ歳禮部ヨリノ咨ニ法國公使ノ照會内ニ稱スラク高麗國王ハ該處ノ主教二人及ビ傳教士九人並ニ本地ノ習教男婦老幼ヲ將テ盡ク殺害ヲ行ヘリ是ヲ以テ本國ハ將ニ命シ師ヲ興シ不日ニ朝鮮ニ齊集スルコトノ因ナリ臣等查スルニ朝鮮ノ中國ニ於ケルヤ朔ヲ奉シ臣ト稱シ至テ恭恪ナリト為ス茲ニ法國ト將ニ構兵ノ釁アラントスルヤ總理衙門ノ排解ヲ經ルト雖モ應行スルニ似タリ該國ニ知ラシメテ之ヲシテ熟思審處シ萬全ヲ計出セシメ以テ朝廷カ藩服ヲ眷顧スルノ意ヲ示サン云々ト

(按)是ノ歳正月二十二日○陽曆三月八日佛國天主教僧「ベルヌー」ヲ捕テ之ヲ磔殺シ並ニ國中ニ在ル教徒ヲ搜索シテ之ヲ死刑ニ處シタルコトハ朝鮮ニ於テ作邪ノ事蹟ナリ佛國カ其ノ支那艦隊ヲシテ江華島ヲ砲擊セシメタルモ志ヲ得スシテ退

却シ並ニ辛未ノ米國軍艦ノ德津砲擊ハ朝鮮ニ於テ洋擾ノ事蹟ナリ近代列國トノ交渉開始ノ先頭タル事實ナルヲ以テ第二節ノ記載ニ詳ナリ

十月二十四日正使判中樞李豐翼副使禮曹判書李世器書狀官兼掌令嚴世永ヲシテ王妃ヲ封冊セルヲ謝シ法國ノ搆兵ヲ排解セルヲ謝セシメ又奏請使臣ノ加賞ヲ謝セシメ冬至使行ヲ兼ネ年貢ヲ進メシム○翌年丁卯四月初二日復命ス

慶應二年丁卯 即同治六年

十月二十四日正使判中樞金益文副使禮曹判書趙性敎書狀官司僕寺正洪大鍾ヲシテ冬至使行ニ兼テ謝恩使行ヲ為サシム冊封謝恩ノ方物移准ヲ謝シ謝恩兼冬至使臣ノ加賞ヲ謝シ漂民ノ出送ヲ謝シ又漂民ノ出送ヲ謝スルナリ

明治元年戊辰 即祢五年 同治七年

閏四月十六日賈奏行アリ洋夷ノ情形ヲ奏スルタメナリ奏官ハ

刑曹佐郎李建昇

閏四月十六日賈咨行アリ洋夷ノ情形ヲ報スルタメナリ咨官ハ

前正吳慶錫

十一月初五日正使判中樞金有淵副使禮曹判書南延順書狀官兼

掌令趙秉鎬ヲシテ冬至兼謝恩使行ヲ為サシム冬至使臣ノ

加賞ヲ謝シ漂民ノ出送ヲ謝スルナリ翌年己巳三月十六日

復命ス

明治二年己巳 即祝六年 同治八年

十月二十二日 正使判宗正卿李承輔副使禮曹判書趙寧夏書狀官

兼掌命趙定熙ヲシテ冬至兼謝恩行ヲ為サシム冬至使臣ノ

加賞ヲ謝シ漂民ノ出送ヲ謝シ又漂民ノ出送ヲ謝スルナリ

翌年庚午四月初二日 復命ス

明治三年庚午 即祢七年 同治九年

閏十月二十五日正使判中樞姜洸副使禮曹判書徐相鼎書狀官兼

執義権膺善ヲシテ冬至兼謝恩行ヲ為サシム翌年辛未

三月二十二日復命ス

明治四年辛未 即祐八年 同治十年

五月三十日賫咨行アリ美國搆兵ノ情形ヲ報スルタメナリ咨官

八前僉正李應浚

十月二十二日 正使判中樞閔致庠副使宗正卿李建弼書狀官

兼執義朴鳳彬ヲシテ冬至兼謝恩行ヲ為サシム翌年壬

申四月初四日復命ス

明治五年壬申 即祚九年 同治十一年

七月初二日正使判中樞府事朴珪壽副使禮曹判書成奭鎬書狀官司僕寺正姜文馨ヲシテ向年九月十四日翰林院侍講崇綺ノ女阿魯特氏ヲ冊立シテ皇后ト為スヲ賀セシメ兩宮ノ皇太后ニ尊號セルヲ賀セシメ兼テ冬至使臣ニ加賞セルヲ謝セシム十二月二十四日復命シ九月十八日附ノ皇后ヲ冊立スル詔一道賜綴ノ敕一道ヲ賫シ來ル又十月日附ノ兩宮皇太后ニ尊號スル詔一道賜綴ノ敕一道ヲモ賫シ來ル

十月初十日正使判中樞金壽鉉副使禮曹判書南廷益書狀官兼掌令閔泳穆ヲシテ冬至使兼漂民出送ノ謝恩行ヲ為サシム翌年癸酉四月初九日復命シ正月二十六日附ノ清皇親政ノ詔一道二月初九日附ノ兩宮皇太后ニ尊號スルノ詔一道ヲ賫シ來ル

明治六年癸酉 即祝十年 同治十二年

三月十一日正使判中樞李根弼副使禮曹判書韓敬源書狀官奉常寺判官趙宇熙ヲシテ清皇ノ親政ヲ賀セシメ両宮ノ皇太后ノ尊號ヲ賀セシメ皇后冊立ノ詔書順付ヲ謝セシメ且ツ両宮ノ皇太后ノ尊號詔書立ノトキノ賜緞ヲ謝セシメ両宮皇太后ノ尊號ノトキノ賜緞ヲ謝セシメ太婚ノトキノ賜物加賞ヲ謝セシム八月十三日復命ス賜緞ノ敕ハ同使賫シ來ル

十月二十四日正使判中樞鄭健朝副使禮曹判書洪遠植書狀官兼掌令李鎬翼ヲシテ清皇親政詔書ノ順付ヲ謝セシメ且ツ両宮皇太后ノ尊號詔書ノ順付ヲ謝セシメ両宮皇太后ノ尊號ノトキノ賜緞ヲ謝セシメ皇太后冊立ノ詔書順付ト謝恩ノ方物移准トヲ謝セシメ冬至使臣ノ加賞ヲ謝セシメ進賀使

臣ノ賜食ヲ謝セシメ漂民ノ出送ヲ謝セシメ兼テ冬至使行ヲ為サシム翌年甲戌三月三十日復命ス

明治七年甲戌即祐十一年 同治十三年

十月二十八日正使判中樞李會正副使禮曹判書沈履澤書狀官兼掌令李建昌ヲシテ清皇親政詔書ノ頒付ノトキノ謝恩方物移准ヲ謝セシメ冬至使臣ノ加賞ヲ謝セシメ漂民出送ヲ謝セシメ又漂民出送ヲ謝セシメ兼テ冬至使行ヲ為サシム翌年乙亥四月初三日復命ス

十二月初五日同治帝ノ遺書一通

(按)同文考略續使行錄條ニ傳達ノ記載闕ク後條同治帝ノ崩逝ニツキ乙亥四月三日拜表ノ語アリ蓋シ敕使ノ口宣前ニ賫来セルモノナラン

明治八年乙亥 即祐十二年 光緒元年

四月十二日正使刑部侍郎銘安副使散秩大臣立瑞通官入京シ前年甲戌十二月初六日同治帝。穆宗ト廟號ス崩ストノ訃敕及ヒ遺詔ヲ来宣シ兼テ正月二十日附光緒帝。德宗ト廟號ス登極改元ノ詔一道賜緞ノ敕一道ヲ捧到シ仍テ頒赦ス十四日回程ス

四月十三日正使判中樞姜蘭馨副使禮曹判書洪兢周書狀官兼執義姜贊ヲシテ穆宗。同治帝ノ廟號崩逝ヲ陳慰シ兼テ進香セシム十月初三日復命ス先ニ四月三日拜表シ而シテ書ハ奉敕ノ翌日附ヲ以テセリ

五月二十五日正使完平君李昇應副使吏曹判書李淳翼書狀官兼掌令沈東獻ヲシテ光緒ノ登極ヲ賀シ登極詔書ノ頒付ヲ謝シ登極ノ賜緞ヲ謝セシメ且ツ冬至使臣ノ加賞ヲ謝シ三節ノ方物ノ移准ヲ謝セシム十一月十九日復命ス

六月二十七日賫咨行アリ咨官ハ副司直李容肅ナリ法美両國カ
日本ノ兵船ヲ助ケント欲スル事ニツキ飛咨先通セルヲ謝
シ兼テ各國ヲ曉諭センコトヲ請フモノナリ
七月三十日正使領中樞李裕元副使禮曹判書金始淵書狀官兼掌
令朴周陽ヲシテ世子ヲ冊封センコトヲ請ヒ封ヲ請フノ事
情ヲ奏スルタメナリ十二月十六日復命ス禮部ヨリ咨スラ
ク王世子ヲ封スルヲ請フコトハ奉旨シテ議ニ依ル云々ト
十月初七日正使判宗正卿李秉文副使吏曹判書趙寅熙書狀官兼
掌令鄭元和ヲシテ皇后ノ崩逝ヲ陳慰セシメ敕諭ノ詔書三
度順付ヲ謝セシム翌年丙子三月初二日復命ス
十月二十九日正使判中樞南廷順副使宗正卿李寅命書狀官司僕
寺正尹致聃ヲシテ進賀謝恩兼歳幣行ヲ為サシム同治帝ノ
尊謚ヲ賀シ同治帝皇后ノ尊謚ヲ賀シ同治帝進香ノトキノ
賜綬ヲ謝シ舟ヲ撥シ軍ヲ濟タシ綬ヲ賜フヲ謝シ正朝令節
ヲ賀シ兼テ年貢ヲ進ムルナリ翌年丙子三月二十一日復命
ス

明治九年丙子 即祢十三年 光緒二年

五月十六日正使判中樞韓敦源副使禮曹判書林翰洙書状官兼執義閔種默ヲシテ両宮皇太后ノ尊號ヲ賀セシメ世子ノ冊封ヲ謝セシメ賜物ヲ謝セシメ世子ニ賜物アリタリヲ謝セシメ又奏請方物ノ移准ヲ謝セシメ賀謝ノトキノ方物移准ヲ謝セシメ進賀使臣ノ加賞ヲ謝セシメ日本使臣ト問答節略ヲ両次ニ飛遞セラレタルヲ謝セシメ歳幣使臣ニ加賞セルヲ謝セシム九月二十四日復命ス此ノ進賀使ハ七月初四日両宮皇太后ニ尊號スルノ詔一道賜綬ノ敕一道ヲ賫來セリ

(按)是ノ歳散秩大臣吉和等ヲシテ世子ヲ冊封スル誥命彩幣ヲ捧到セシム月日ノ録ヲ闕ク

七月十四日咨官副司直李容肅ヲシテ日本ト開港等ノ條約ヲ商辦セルコトヲ報スル咨文ヲ賫シテ行カセシム

十月二十七日正使判中樞沈承澤副使禮曹判書李容學書狀官兼
掌令尹弁求シテ謝恩兼歳幣行ヲ為サシム同治皇后ノ進
香賜綏ヲ謝シ両宮皇太后ノ尊號賜綏ヲ謝シ又敕諭詔書三
度ノ頒付謝恩ノトキノ方物移准ヲ謝シ進香使臣ニ詣陵ヲ
免セルヲ謝シ進香使臣ニ賜食セルヲ謝シ両宮皇太后ノ尊
號詔書頒付セルヲ謝シ賀謝ノトキノ方物移准セルヲ謝ス
ルナリ翌年丁丑四月初四日復命ス

明治十年丁丑 即祢古年 光緒三年
十月二十七日正使判中樞曹錫輿副使宗正卿李珪永書狀官兼執
義李教榮ヲシテ冬至兼謝恩行ヲ為サシム謝恩ノトキノ方
物移准ヲ謝シ年貢使臣ニ加賞セルヲ謝シ漂民出送ヲ謝シ
且ツ年貢ヲ進ムルナリ翌年戊寅四月初五日復命ス

明治十一年戊寅 即祐十五年 光緒四年

六月二十三日 參判趙翼永等ヲ使ト シテ哲仁王后昇遐ノ訃ヲ告ケ シム

十月二十七日 正使判中樞沈舜澤副使禮曹判書趙秉世書狀官兼 掌令鄭元夏ヲシテ冬至兼謝恩行ヲ為サシム三部方物ノ移 准ヲ謝シ冬至使臣ノ加賞ヲ謝シ漂民ノ出送ヲ謝スルナリ

翌年己卯三月二十五日 復命ス

十二月二十二日 上使刑部左侍郎繼格副使滿州副都統恩麟八九 月初四日附ノ哲宗王妃ヲ賜祭スル文一道祭幣一道ヲ捧到ス

明治十二年己卯 即祐十六年 光緒五年

十一月初七日正使判中樞韓敬源副使禮曹判書南一祐書狀官兼執義李萬敎ヲシテ謝恩兼冬至行ヲ為サシム賜祭ヲ謝シ且ツ冬至使臣ノ加賞ヲ謝シ漂民出送ヲ謝スルナリ翌年庚辰四月初二日復命ス

十二月二十五日賫咨官八閔三月初三日附ノ同治皇帝皇后祔太廟ノ詔一道ヲ賫來セリ

明治十三年庚辰 即祚十七年 光緒六年

十一月初七日正使判中樞任應準副使禮曹判書鄭稷朝書狀官兼
掌令洪鍾永ヲシテ進賀兼冬至謝恩行ヲ為サシム同治ノ
祔太廟ヲ賀シ講究武備ノ准請ヲ謝シ且ツ祔太廟ノ詔
書頒付ヲ謝シ賜祭謝恩ノ方物移准ヲ謝シ冬至使臣ノ加
賞ヲ謝シ漂人ヲ押解スルナリ翌年辛巳四月初八日復
命ス

明治十四年辛巳 即祐十八年 光緒七年

四月十一日咨官副司直李應浚ヲシテ賫咨行ヲ為サシム天津海道ヲ探察セシコトヲ請フノ咨ナリ

六月二十七日上使戶部侍郎額勒和布副使刑部侍郎錫珍入京シ三月初十日附皇太后遺詔一道ヲ捧到ス

是ノ日正使判中樞洪祐昌副使禮曹判書趙昌永書狀官兼掌令柳宗植ヲシテ陳慰兼進香行ヲ為サシム皇太后ノ崩逝ヲ慰セシム十一月十二日復命ス○九月二十二日皇太后祔太廟ノ詔一道ハ十月二十七日進香使賫來ス

(按)賫來ノ日ト復命ノ日ト日子合セス未攷

十月二十九日正使判中樞洪鍾軒副使吏曹判書金益容書狀官兼掌令曹寅承ヲシテ進賀謝恩兼歲幣行ヲ為サシム皇太后ノ祔太廟ヲ賀シ賜綏ヲ謝シ且ツ祔太廟詔書ノ頒付ヲ謝シ

謝恩方物ノ移准ヲ准請セルヲ謝シ唐三城○所ハ供應安東縣
辦理ヲ欽差セルヲ謝シ進賀使臣ノ加賞ヲ謝シ漂民ノ出送
ヲ謝シ通官下春植加賞ヲ謝シ兼テ年貢ヲ進ムルナリ翌
年壬午三月二十三日復命ス
十二月二十五日時憲書ノ賫来官吳慶然八五月十四日附皇太
后○孝貞顯皇后尊謚ノ詔一道ヲ賫来ス

明治十五年壬午 即祚十九年 光緒八年
○判中樞府事趙寧夏等ヲシテ派兵東援セルヲ謝シ興宣大
院君ノ歸國ヲ冀フコトヲ奏セシム
○判中樞府事沈履澤等ヲシテ孝貞顯皇后ノ尊謚ヲ賀シ尊
謚詔書ノ順付ヲ謝シ特ニ弁勇ヲ派シテ衛護セルヲ謝シ孝
貞顯皇后祔廟進賀ノトキノ方物賜綬謝恩ノトキノ方物ノ
移准ヲ謝シ年貢使臣ノ加賞ヲ謝シ通商修交ノ准予ヲ襄助
スルヲ謝シ通商ノ准許ヲ謝シ吉林流民ノ刷還ヲ謝シ漂
民ノ出送ヲ謝シ大院君ノ歸國ヲ冀フコトヲ奏セシメ兼テ
年貢ヲ進メシム○副使禮曹判書閔種默カ恭ク使事ヲ竣リ
タル後ニ即チ保定府ニ轉往セシメ起居ヲ省視シ以テ私分
ヲ伸フルコトノ縁由ヲ禮部及ヒ北洋大臣衙門署理直隸總
督部堂ニ咨報セシム○判宗正卿李載冕○後ノ李夏公ヲシテ保定

府ニ馳往シテ省勤スルコトヲ北洋大臣衙門及ヒ署理直隷
總督部堂ニ具咨陳懇セシム
(按)六月九日訓局ノ軍卒亂ヲ作シテ宮ニ入リ閔謙鎬等ハ
害セラレ日本公使館ヲ毀チ兵卒ヲ殺傷ス太王ノ父大院
君實ニ其ノ事ヲ知ルヲ以テ清國ハ兵艦ヲ發シ大院君ヲ
脅制シテ北行シ之ヲ保定府ニ抑留ス清國カ朝鮮ノ内治ニ
干渉シタル發端ニシテ保定省覲ノ使行ハ王ノ私分ヲ伸
フルニ在リシナリ後條亦同シ

明治十六年癸未 即祿二十年 光緒九年

○判宗正卿李載冕ヲシテ保定府ニ馳往シテ省覲シ仍テ
機ヲ相テ默賛シ亟カニ回還セシムルコトノ縁由ヲ以テ北洋
大臣衙門及ヒ署理直隷總督部堂ニ咨會セシム○判中
樞府事閔種默等ヲシテ年貢ヲ進メシメ孝貞顯皇后ノ
尊謚進賀ノ方物尊謚詔書順付謝恩ノ方物特派弁勇
衛護謝恩ノ方物大院君ノ歸國ヲ冀フトキノ陳奏ノ方
物ノ移准ト年貢使臣ノ加賞トヲ謝セシム

明治十七年甲申 即祐二十一年 光緒十年

○判中樞府事金晩植等ヲシテ年貢ヲ進メシメ年貢使臣ノ加賞漂民ノ出送ヲ謝セシム○副使禮曹判書南廷哲使事ヲ竣リタル後保定府ニ轉往シ省視セシムルコトノ縁由ヲモテ禮部及ヒ北洋大臣衙門ニ咨報ス

明治十八年乙酉 即旅二十二年 光緒十一年

○判中樞府事閔種默ヲシテ籲懇ノ恩准ヲ奏セシメ兼テ留防ノ奬賞ヲ請ハシム

○判中樞府事鄭海崙等ヲシテ大院君ノ回國ト年貢使臣ノ加賞ト籲懇恩准ト陳券方物ノ移准トヲ謝セシメ兼テ年貢ヲ進メシム

明治十九年丙戌 即祐二十三年 光緒十二年

○判中樞府事徐相雨等ヲシテ上諭ヲ奉シ年貢使臣ニ加賞シ大院君回國ノ謝恩方物ノ移准使臣ノ貨包ニ量予免稅セルヲ謝セシメ兼テ年貢ヲ進メシム

明治二十年丁亥 即祝二十四年 光緒十三年

○判中樞府事李承五等ヲシテ皇上ノ親政ヲ賀シ親政詔書ノ頒付年貢使臣ノ加賞上諭ヲ奉シタルトキノ謝恩方物ノ移准ニ謝セシム○判中樞府事趙秉世ヲシテ巨文島ノ復完親政詔書頒付ノ謝恩方物ノ移准使ヲ西國ニ派スルコトヲ允准セルヲ謝セシメ兼テ年貢ヲ進メシム

明治二十一年戊子 即光緒十四年

○禮部ヨリ咨スラク皇太后ノ懿旨ヲ奉シ明年二月初三日政ヲ歸スコトニ着ス此ヲ欽セヨトノコトヲ相應知照ス云々ト

○判中樞府事李淳翼等ヲシテ皇后ノ冊立皇太后ノ加上徽號皇太后ノ歸政皇太后ノ加上徽號ヲ賀セシメ巨文島ノ復完ノトキノ謝恩ノ方物ノ移准年貢使臣ノ加賞ヲ謝セシメ兼テ年貢ヲ進メシム

(按)明治十五年以後ニ至ルマテノ記事ハ通文館志卷十二紀年續編ノ記載ニ依ル故ニ月日ノ記載ニ闕クルアリ今改メス

四月初三日回還ノ冬至使ヲ萬慶殿ニ召見ス○正使趙秉世

副使金完秀書狀官閔哲勳復命セルナリ○太王曰ク皇太后近頃撤簾スト雖モ聞或ハ政ニ參スト云フヤト秉世曰ク然リト云々

明治二十二年己丑 即祝二十六年光緒十五年

六月初四日回還ノ冬至使ヲ萬慶殿ニ召見ス○正使李淳翼副使金綺秀書狀官宋榮夫復命セルナリ○太王曰ク遠路無事往還セルヤ今ヤ屢朝タラントヤ淳翼曰ク聖念ノ及フ所無事往還セリ留館ハ一百十餘日タルナリト太王曰ク今番ノ行ニ大婚ノ儀節ヲ見ル則チ何如ナリシヤト淳翼曰ク皇帝ハ親迎セス而シテ皇后ト嬪宮トハ夜間ニ同為入闕セリ臣等ハ禮部ノ指揮ナシ故ニ未タ入參スルヲ得サリシナリト太王曰ク皇帝親抱シテ而シテ皇太后ハ不聽政ナルヤト綺秀曰ク文蹟ヲ取見スルニ則チ皇太后ハ政ニ參スル所ナキヲ知ルヘキナリト太王曰ク皇帝ハ朝ヲ視ルコト早クシテ朝ヲ罷ムルコトモ亦タ早

キカト綺秀曰ク然リト太王曰ク後苑ニテ逐日射ヲ
習フカト榮夫曰ク筵講畢ルノ後ハ射ヲ習フ日
ニ以テ常ト為スナリト太王曰ク兵丁練習ノ法ハ
何如ナルヤト榮夫曰ク逐年錬操ス此ハ已例タ
ルナリト淳翼曰ク云々ト太王曰ク皇帝ニハ幾
次見謁セルヤト榮夫曰ク動駕ノ時毎ニ祗迎セリ
故ニ十餘次仰瞻セリト太王曰ク皇帝ノ體長ハ前
時ヨリ勝レルヤト淳翼曰ク實ニ仔細ニ仰瞻シ難
シ而シテ大體ヨリ之ヲ言ヘハ短小清瘦ナリ太王曰
ク醇親ハ或ハ路上之ヲ見ンヤ所乘ハ何ナリヤ服色
ハ何如所率ハハ幾何ナリヤト綺秀曰ク醇親ハ既ニ
天賜ノ杏黄轎子ニ乘セス則チ徒御ノ簡卒ナルコト
亦タ推シテ知ルヘキナリト太王曰ク今番ノ使臣ハ
皇太后ヲ見サリシヤ在前ノ王使臣ハ皆之ヲ見タリト
云フナリト淳翼曰ク正月紫光閣筵宴ノ時ニハ皇太
后ト皇帝ト臨御セリト云フ而シテ今番ハ則チ設
宴ナシ故ニ臨御ヲ為サヽルナリト云々
是ノ日興福殿ニ御シテ宣詔ノ儀ヲ行フ仍テ頒赦ス
八月二十四日駐津督理金明圭從事官金商悳ヲ萬慶
殿ニ召見ス○辭朝ナリ
九月二十八日駐津從事官成岐運ヲ萬慶殿ニ召見ス○復命セルナリ

明治二十三年庚寅 即祝二十七年 光緒十九年

閏二月初九日駐津督理金明圭ヲ萬慶殿ニ召見ス

○復命セルナリ ○太王曰ク李鴻章ハ幾度往見セルヤト明圭曰ク四五次往テ款セリト太王曰ク李鴻章ハ今尚ホ我國ノ為メニ留心セルヤト明圭曰ク外ハ體制ヲ持シ等威ヲ示スト雖モ内ハ實ニ和衷ニシテ到底身事之國ノ如シト太王曰ク李鴻章ハ果シテ衰老ニ至ラサルヤト明圭曰ク髭須髮白シト雖モ顔貌筋力ハ尚ホ前ノ如クナリト云々太王曰ク李鴻章ハ北京ニ往ケリト云フヤ明圭曰ク今閏二月十五日陵幸アリ二十五日還宮ヲ定ト為ス李鴻章ハ差使進京セント太王曰ク何陵ナリヤト明圭曰ク東陵ナリ皇太后モ亦タ往カント太王曰ク皇太后ノ年歳

ハ今五旬ヲ過クト云フヤト明圭曰ク年前ニ五旬稱慶ノ事アリタレハ當ニ五旬ヲ過クルナルヘシト太王曰ク皇帝ノ年歳ハ今既ニ二旬ナリ而シテ讀書ヲ好ムト云フヤト明圭曰ク方ニ經書ヲ讀ムト云フナリト太王曰ク皇帝或ハ馬ヲ馳セ劒ヲ試ムト云フヤト明圭曰ク此レ真清ノ舊規ナリ讀書ノ暇ニモ猶ホ廢セサルナリト

狀官尹始榮

三月十六日回還ノ冬至使ヲ萬慶殿ニ召見ス正使李敦夏副使李儒魯書

○太王曰ク聞見録ノ失火ノ處アリト果シテ大殷ナリヤト敦夏曰ク天壇失火シ太和殿正門忽チ又回禄シ今方ニ改建立柱上樑セリト太王曰ク皇太后ハ南海ニ出往セリト云フ今ハ則チ還宮セリヤト敦夏曰ク南海子北海子ハ即チ太液池ナリ而シテ皇太后ノ時御ハ其ノ近處ナリ上元ノ夜ニ財ヲ費シ火具ヲ設ケ將ニ盛遊セントス而シテ皇帝ハ南邊ノ歉荒ヲ以テ力諫シ之ヲ止ムト云フナリト太王曰ク彼中ノ事ハ事勢甚々遑々ナリト云フナリト敦夏曰ク近ニ口邊ニ戍セルヲ以テ尤モ窘絀多キナリ秦皇ノ萬里長城ハ其ノ財ヲ費シ力ヲ費ス所固ヨリ已ニ言ヒ難キモ一等ノ後ハ只タ是レ不食ノ軍ナリ而シテ近日戍邊ノ軍ニ至テハ延袤長城ノ如クニシテ撤還ハ期ナク應餉繁續ス此レハ能食ノ長城ト謂フヘキナリ財力ハ抵應シ難キニ似タリト太王曰ク中州ノ物價ハ果シテ甚シク高翔セルカト始榮曰ク前ニ比スレハ啻ニ倍蓰セルノミニアラサリト云フ敦夏又奏シテ曰ク年来ノ歳幣方物ハ已ニ麁薄ヲ極メタリ今

番ニ至テハ尤モ様ヲ成サス呈納ノ際多ク説話アリ
目下周旋ニ因リ無事善納シタリト雖モ而シテ其ノ事
體道理ニ在テハ猖披甚シキハ莫キナリ今ヨリ始ト為シ
別般ニ豫飭アリテ然ル後以テ期ニ及テ様ヲ成スヘキ
ナリ僖魯曰ク云々太王曰ク當ニ期ニ前テ區劃スヘ
レ而シテ政府ヨリ別般申飭スルヲ好ト為スト云々
太王曰ク咸豊陵ノ幸行ハ何レノ時ニ還宮セルヤト
敦夏曰ク閏二月十五日出宮二十三日還宮セリ
ト云フナリ太王曰ク中國ハ昨年大歉ナリシヤ
ト始榮曰ク山東ハ黄河圮潰シ水災ヲ被ルヲ以
テ發賑周恤ニ至レリ他省ハ則チ大同ノ歉タルニ至ラ
スト云フナリ云々太王曰ク回還ハ幾日タリシヤト
敦夏ハ曰ク皇城ノ離發ヨリ五十餘日ト為スナリト

太王曰ク我カ國ノ農形何如ト敦夏曰ク彼ノ地ハ二
千里ノ間旱乾太甚シ我カ境ニ入リテハ雨澤周洽年
麥ハ大登ノ望アルナリト
九月二十六日敦義門外ノ幕次ニ詣リテ迎敕ス
是ノ日敕使ハ魂殿○是ノ歳四月薨ノ大王大妃趙氏ノ魂殿ナリニ行祭ス
是ノ日勤政殿ニ御シテ敕使ニ接見ス
是ノ月二十九日戴營ニ詣リテ送敕ス
十一月初六日回還ノ告訃使ヲ乾清宮ニ召見ス○正使洪鍾永書狀官趙秉聖
復命セルナリ○太王曰ク云々敕期ハ多日進退セリ
其ノ来ルニ及テヤ猝然之ヲ迎ヘタリト鍾永等曰
ク敕行ノ發程日子ハ臣等聞知セリ而シテ船路出
来ハ此レ是ノ刱例ナリ窃ニ料ルニ外國ノ事勢猝地ニ
迎接センコト必ス窘迫多カラン故ニ臣等未タ嘗テ憂

問セスンハアラス太王曰ク敕使ハ我カ國ノ事勢賜物ノ例給モ一切受ケス必ス是レ皇上ノ嚴飭ナラント鍾永等曰ク敕行辭出ノ翌日皇上ヨリ更ニ召入ヲ為シ之ニ諭シテ曰ク朝鮮ノ國計極メテ艱窘ナリキ聞ク例給ノ物ト雖モ切ニ之ヲ受クルコト勿レ果シテ能ク飭意ニ欽遵シ廉潔ヲ以テ還レハ則チ當ニ增秩示意ノ舉アルヘシト云フ上國ノ是ノ如キ顧念ハ實ニ感頌ニ勝エサルナリト太王曰ク在館ノ時洋倭人ヲ見シヤト云々皇太后ハ尚ホ今モ政令ニ參助スルヤ否ヤ皇帝親ラ之ヲ主トルヤト鍾永等曰ク皇帝ハ春秋ニ富ムモ事務ハ皆親拠ス而シテ或ハ大論アルトキハ皇太后ニ決スルニ似タリト云々

是ノ月十三日 三使臣ヲ乾清宮ニ召見ス。正使李珪永副使曹寅承書狀官鄭雲景

辭陛ナリ○太王曰ク赴然後ハ各國ノ事情ヲ詳探シテ以テ來レト珪永曰ク各國人ト設トヒ相從ノコトアルモ其ノ情ヲ得難カラント太王曰ク各國使臣ニハ相從ノ例アリヤト珪永曰ク果シテ未タ詳知セスト太王曰ク勢ヲ觀テ之ヲ為シテ可ナリト太王曰ク書狀官ノ聞見録ニハ如シ聞クヘキモノアラハ亦タ探來ヲ為シテ可ナリト雲景曰ク謹テ當ニ奉教スヘシト

明治二十四年辛卯 即祝二十八年光緒十七年

四月初六日回還ノ三使臣ヲ乾清宮ニ召見ス。正使李珪永副使曹寅承書状官鄭寗景

復命セルナリ

五月十五日駐津從事官金商悳ヲ孝慕殿齋室ニ召

見ス復命セルナリ

明治二十五年壬辰 光緒十八年 邦交二十九年

二月初六日書狀官李範賛首譯李應浚ヨリ聞見

別單ヲ進ム○書狀官ノ別單中昨年四月二十九日湖北武穴地方ニ失兒ノ事ヲ以テ民人衆集シテ洋樓ヲ燒キ洋男女ヲ毆傷ス五月初七日洋銀六萬餘元ヲ補給シ和好スト ノ記事アリ又昨年十月錦州朝陽縣ノ賊匪大亂李鴻章ヨリ天津ノ兵一萬ヲ熱河ニ派送シ熱河提督葉志超ハ屢戰大捷ストノ記事アリ首譯ノ別單略同シ

四月初九日回還三使ヲ召見ス○正使李鎬翼副使沈琦澤書狀官鄭翰謨

十月初六日三使臣ヲ咸和堂ニ召見ス○正使李乾夏副使李暐書狀官沈遠翼 辭陛ナリ

明治二十六年癸巳 即祐三十年 光緒十九年

二月二十二日駐津督理李晃相從事官徐相喬ヲ緝敬堂ニ召見ス辭陛ナリ○太王ヨリ善探轉達セヨトノ命アリ

四月初六日駐津從事官邉錫運ヲ含元殿ニ召見ス復命セルナリ○太王ニ本國ニ駐劄セル德國領事ハ將ニ總領事ニ陞ラントスト云フ是レ該國カ本邦ヲ優待スルノ意ニ似タルカノ問アリ

是ノ月十一日回還ノ冬至使ヲ召見ス○正使李乾夏副使李暐書狀官沈遠翼復命セルナリ

明治二十七年甲午 即光緒二十年 三十一年

四月十三日回還ノ冬至使ヲ集福軒ニ召見ス○正使李正曾副使李榮書狀官黃章淵復命セルナリ○太王ニ皇太后ノ稱慶ハ十月ニ在リ上徽號ハ八月ニ在リ賀使ハ當ニ何時入送スヘキノ問アリ

六月初十日○陽七月十二日三使臣ヲ乾清宮ニ召見ス○正使李承純副使閔泳詰書狀官李裕宰辭陛ナリ○太王曰ク云々承純曰ク從前ノ別使發行ハ春秋ノ間毎ニ多ク之ヲ為スト太王曰ク復命ハ當ニ何ノ時ニ在ルヘキヤト承純曰ク臘月初旬ノ間ニハ還抵スヘキニ似タリト太王曰ク留館稍久シ然ルヘキニ似タリト仍テ教シテ曰ク今ヤ日本ノ來リテ京城ニ留ルヲ見ルナリ若シ中州ノ朝士ニ逢ハヽ釋然其ノ情形ヲ言ヘヨヤト承純曰ク三使臣相議シテ傳布セントス云々

是ノ月二十一日。陽暦七月二十三日日本ト暫定合同條款ヲ約定
シ韓清ノ國交斷絶ス

(按)李朝ノ事大ノ外交ハ李承純冬至使行ヲ以テ最後トス當時朝鮮問題ニ關シ日清違言アリ兵兩國ノ間ニ交リ事大ノ典禮ト年貢トハ遂ニ廢ス李朝ノ事大外交ハ仁祖王十五年丁丑ヨリ此ニ至ルマテ二百五十八年ナリ

第二節　仆邪洋擾

資料　第一種日省録ノ一第一號乃至第三八號日省録ノ二第一號乃至第五六號日省録ノ三第一號乃至第四一號增第三類參照

(按)近代朝鮮耶蘇教ハ安政三年丙辰洪鳳周ガ佛蘭西宣教張敬一。朝鮮名ヲ江南ヨリ率來シテ其ノ家ニ隱匿シ天主教ヲ宣布シタルニ始ル其ノ後十年ニシテ慶應二年丙寅正月南鍾三等ト共ニ拿鞠集警セラレ教獄相踵キ以テ九月初七日佛國艦隊ハ來リテ江華島ヲ砲擊シ十月初三日漢江山城ヲ襲テ敗退セルハ洋擾ノ著シキモノナリ但此ノ事タルヤ朝鮮ニ在テハ國禁ヲ犯シテ潛入セルモノヲ誅鋤スルニ在リテ當時ノ朝鮮人ハ視テ以テ洋夷ハ禽獸

儻来測リ難キモノト為シタリ中間米國船ノ平壌掠奪ヲ為シテ戦滅セラルヽモノアリ其ノ後明治元年戊辰米國船ノ来リテ德山ノ南延君墓所ヲ發掘シ報復ヲ逞フシ四年辛未四月江華ヲ砲撃シテ敗退セリ朝鮮人ハ一併シテ洋夷侵犯ノ事實ト為シ國内教徒ノ通謀タルヲ疑ヘリ耶蘇教宣布ノ禁ハ正祖ノ作邪綸音ニ始マリ太王ノ即祚十四年辛巳ノ作邪綸音ニ畢ル作邪洋擾ヲ一併シテ本節ニ記載スル所以ナリ十五年壬午米國ト交好セル以後ノ事實ハ後節修交締盟ノ條下ニ詳ナリ

慶應二年丙寅

正月十一日領府事鄭元容領敦寧金左根領議政趙斗淳判敦寧李景在左議政金炳學ヨリ聯劄シテ南鍾三ヲ拿捕シテ情ヲ得ハ典刑ヲ快正セント請フ批シ賜フ批ニ曰ク云々鍾三ハ在囚諸漢ト與ニ王府○義禁ノ別稱ナリヲ得セシメン御等之ヲ諒セヨ仍テ史官ヲ遣ハシ傳諭セシム

(按)南鍾三ハ前承旨ナリ是ノ日副護軍南復綸護軍南性教右承旨南鍾順ヨリ聯劄シテ請フコト上ノ如シ批ヲ賜フ已ニ相劄ノ批ニ諭セリトノコトヲ以テス

(按)族人中ヨリ鍾三ヲ出セルヲ以テ是ノ聯劄アリ

是ノ日異國人ヲ率来セル源委ヲ到底査得シ南鍾三ヲ
拿来シテ同為鞫問セヨト命ス○左右捕廳ヨリノ啟言本月初九日酉時殊常ノ漢長八七
37 八尺ハカリ歳ハ五十餘ハカリ目深準高ニシテ言語ヲ能クセルモノヲ捉得シタルニ佛浪國人ニシテ去丙辰年ヨリ朝鮮國ニ出來シ洪鳳周ノ家
ニ作主シ傳フルニ聖教ヲ以テス洋人張敬一ト称セルモノナリ
是ノ日南鍾三ヲ具格拿来シ鞫○鞫獄ヲ設ケ得
情セヨト命ス○義禁府ノ啟言ニ南鍾三ハ忠清道堤川ノ地ニ下去セリト云フヲ以テ是ノ命アリ
是ノ月十二日右議政柳厚祚ニ三論ス
是ノ月十五日右議政柳厚祚ニ四論ス教中ニ第々目下
ノ事ヲ以テ之ヲ云フニ名ハ朝籍ニ係リテ而シテ妖
言ヲ唱出セル者之レアリ身ハ異域ヨリシテ而シテ
禍機ヲ隠伏スル者之レアリ今方ニ次第ニ鞫覆
シテ以テ彝倫ヲ明ニシ人紀ヲ立ツルコトアラム卿
此ノ時ニ於テ安ソ予ノ為ニ一起ヲ為サヽルヲ得
ンヤノ語アリ
是ノ日承旨南鍾順ヨリ右議政柳厚祚ノ附奏ヲ以
テ啓ス教シテ曰ク右相今方ニ朝ニ造ラント云フ
國事ノ萬幸ト為ス僧来ノ承旨還入シ以テ大
臣ノ心ヲ安セヨト○蕭令ヲ以テナリ
是ノ月十六日推鞫ハ之ヲ為セト命ス
是ノ日委員ハ領議政趙斗淳之ヲ為セト命ス
是ノ日問事郎廳李承皐呂圭益李鍾濬鄭
顯裕ヲ差下ス
是ノ日左右捕廳ヨリ在囚ノ罪人張敬一洪鳳周李
先伊丁義培崔烱白エレトマリア全長雲徐没
禮金ペッウルー等九名ハ並ニ義禁府ニ出付
シタリト啟ス

是ノ日推鞫ヲ本府ニ設ク○罪人南鍾三洪鳳周等ハ原情ス○教シテ曰ク推鞫ハ姑ク罷メヨト

是ノ日問事郎廳趙定燮金聲根丁觀燮李昌鎬趙康夏ヲ加差下ス

是ノ月十七日推鞫ヲ本府ニ設ク○教シテ曰ク推鞫ハ之ヲ為セリ○罪人李先伊崔烟丁義培金長雲等ト原情シタル罪人南鍾三洪鳳周等トハ更推セル後施威嚴問セヨト○教シテ曰ク推鞫ハ姑ク罷メヨト

是ノ日問事郎廳洪兢周ヲ差下ス○鞫廳ヨリ啟請セルナリ

是ノ月十八日推鞫ヲ本府ニ設ク○教シテ曰ク推鞫ハ之ヲ為セト○罪人張敬一ユシトマリア徐没禮金ペトロ等ト原情シタル罪人南鍾三洪鳳周等トハ更推シタル後各刑問スルコト一次訊杖スルコト第十二度ニシテ停刑シ金長雲ハ更推シタル後刑問スルコト一次訊杖スルコト第十三度ニシテ停刑シ罪人崔烟丁義培等ハ更推シタル後施威嚴問ス○教シテ曰ク推鞫ハ姑ク罷メヨト

是ノ日罪人李先伊ハ姑ク保放セヨト命ス○鞫廳ヨリ啟言スラク罪人李先伊ハ捕廳ノ招辭中ニモ此ノ囚ノ招告セル所ノ者多シ況ヤ渠既ニ背教ヲ以テ矢言シタレハ則チ別ニ更覈ノ端ナシ請フ姑ク放保セシメテ以テ對招ニ備ヘント之ヲ允セルナリ

是ノ日邪書ノ板本ハ鞫庭ニテ燒火シ分布ノ卷帙ハ

措辭行関シテ營庭ニ收納シ一體燒火セヨト命ス
○義禁府ノ啟言ヲ允セルナリ
是ノ月十九日推鞫ヲ本府ニ設ク○教シテ曰ク推鞫ハ
之ヲ為セト○罪人張敬一全長雲等ハ更推ノ後
各刑問スルコト一次訊杖スルコト第十一度ニシテ停
刑シ白ユシトマリア徐没禮金ペトロ洪鳳周丁義
培等ハ更推ノ後各刑問スルコト一次訊杖スルコト第
九度ニシテ停刑シ南鍾三ハ更推ノ後各刑問スル
コト一次訊杖スルコト第十度ニシテ停刑シ崔烱
ハ更推ノ後刑問スルコト一次訊杖スルコト第十二度シ
テ停刑ス○教シテ曰ク推鞫ハ姑ク罷メヨト
是ノ月二十日推鞫ヲ本府ニ設ク○教シテ曰ク推鞫ハ之
ヲ為セト○罪人張敬一白ユシトマリア徐没禮金
ペトロ等ハ更推ノ後並ニ刑問スルコト一次訊杖スル
コト第九度ニシテ停刑シ崔烱ハ更推ノ後刑問ス
ルコト一次訊杖スルコト第十度ニシテ停刑シ全長
雲ハ更推ノ後刑問スルコト一次訊杖スルコト第九度
ニシテ停刑シ丁義培ハ更推ノ後刑問スルコト一次
訊杖スルコト第七度ニシテ停刑シ南鍾三洪鳳周ハ
更推シタル後遲晩ヲ捧セリ○罪人鍾三年五十鳳
周年五十三ノ結案○判決書ナリ罪人鍾三ハ云々而シテ洋
人張敬一ノ締結往来スルヤ邪徒鳳周ノ網繆謀議中
朴異類ノ潛匿近接ハ即チ渠ノ陰謀秘計素ヨリ
醞釀セシ所俄羅斯ノ有患ノ說佛浪國ノ定約ノ
計ハ初ヨリ真的據ル〻ヘキノ端ナシ而カモ妖言ヲ
倡出シテ衆聽ヲ眩惑シ此ノ說ヲ張洪ニ聞クト謂

ヒ禍機ハ迫リテ数月ニ在リト指シ敢テ賣國ノ計ヲ懷キ暗ニ招冠ノ圖ヲ售ル云々烏クンソ謀背潛從ノ律ヲ免カルヘケンヤ謀叛不道的實遲晩セリ鳳周ハ云々渠ハ本辛酉邪徒ノ餘孽ヲ以テ世々其ノ惡ヲ濟シ邪教ニ沈惑シ異類ニ締結シ潛ニ洋人李神父ノ札ヲ懷キ遠ク海濤ヲ渉リ躬江南ニ入リテ洋人張敬一ヲ率来シ同舍居住逸ニ主人ト作リ日夜ノ講習スル所ノモノハ邪書ナリ東西ノ嘯聚スル所ノモノハ邪徒ナリ即是邪學ノ嚆矢ニシテ醜類ノ窩主ナリ俄羅斯ノ將ニ隠憂アラントシ佛浪國ノ先ツ約條ヲ結ハントノ若キニ至テハ敬一ニ酬酢セルモノハ渠ナリ鍾三ニ慫恿セルモノハ渠ナリ無根ノ妖言ヲ倡出シ衆聽ヲ眩惑シ賣國ノ凶計ヲ潛售シ一世ヲ煽動ス云々何ソ謀背潛從ノ律ヲ免カルヘケンヤ謀叛不道的實遲晩セリ鍾三鳳周ハ各不待時斬ノ事ト

是ノ日崔烱全長雲ハ秋曹ニ送リテ詳覈セヨ洋人皿漢ハ軍門ニ付シテ梟警セヨ丁義培ハ捕廳ニ還囚シ到底盤覈セヨ李先伊ハ放送セヨト命ス（義禁府ヨリ啟言スラク鍾三鳳周等ハ既ニ遲晩セリ崔烱全長雲ハ已亥年ノ例ニ依リテ刑曹ニ移送シ詳覈ヲ舉行セン云々ト并ニ之ヲ允セルナリ）

（按）已亥年例ハ憲宗五年己亥ノ天主教排斥ノ例ヲ指スモノナリ

是ノ日推鞫ハ撤罷セヨト命ス

是ノ日明日罪人梟首ノ時ニハ總戎使李顯稷代行セヨト命ス

（按）西紀千八百七十四年印行ターレット著朝鮮教

門史ノ記スル所ニ依レハ天主教僧ペルスー○朝鮮名張敬一ノ拿捕ハ千八百六十六年二月二十三日○陽暦正月九日夕刻四時トアリテ本書記載ノ正月十一日左右捕廳ノ啟言中ニハ初九日酉時ト時刻微シク差ヘルノミペルヌーカ他ノ三人ノ教僧ト共ニ斬首セラレタルコトハ同年三月八日ニシテ陰暦正月二十二日ナリ而シテ太王日省録ハ斬首ノ日ヲ録セスシテ正月二十日ノ條下ニ洋人四漢ハ軍門ニ付シテ梟警セヨ李先伊ハ放送セヨト命シ又明日罪人梟首ノ時ニハ摠戎使李顯稷代行セヨト命シタルコトヲ録セリ王命ノ出納スルハ夜ニ入ルヲ例トシ往々曉旦ニ達スルハ常ニ例トスル所ナレハ梟警放送ノ命ハ二十一日ニ行ハレ其ノ行刑ハ明日タル正月二十二日タリシモノナルヘク教門史ノ記載ハ信スヘシ李先伊ノ放還ヲ得タルハ其ノペルヌーニ僕使セラレテペルヌーノ隠棲ヲ發告シタルニ因ルモノニシテ宗教史ハ之ヲ日シテ反逆人ト稱セリ當時鞫獄ノ酷虐惨烈ナリシコトハ之ヲ讀ムモノヲシテ酸鼻ニ堪ヘサラシムルモ刑獄ノ良否ハ俗ノ文野ニ從フ獨リ義禁府カ洋夷ヲ悪ムカ為メノミニアラス同書ノ記載ニ王府拿鞫カ大院君ノ邸中ニ行ハレタルコトハ當時ノ實情ナルモ大院君ヲ稱スルニ攝政ヲ以テセルハ朝鮮ノ法制ニ暗昧ナルモノナリ

是ノ月二十一日鞫廳ニテ未タ糾摘ニ及ハサル者ハ各其ノ營邑ヨリ鉤覈懲治シ五家モテ統ト作シ舊式ヲ申明セヨト命スト○議政府ヨリ啟言スラク邪書邪板既ニ鞫廳ニ燒火セリ而シテ潛自

流布其ノ来ルヤ已ニ久シト云フ都城内外ハ二十日ノ限リ刑漢両司五部左右捕廳ヲシテ各別ニ捜聚セシメ外道ハ一朔ヲ限リ捜聚セシメ一併焼火セヨ萬一隠匿ノモノアラハ現發ヲ待テ施スニ傳習邪學ノ律ヲ以テシ鞫廳ノ未タ斜摘ニ及ハサルモノハ云々○上文ノ如シ請フ漢城府ヲシテ舊式ヲ申明セシメント之ヲ允セルナリ

是ノ日罪人鍾三鳳周ノ應坐諸人ヲ査出セヨト命ス○義禁府ヨリ啓言スラク謀叛不道ノ罪人鍾三鳳周ハ既ニ承服正刑ス當ニ律文ニ依リテ孥籍スベキナリ五部及ヒ各該道ニ分付シ應坐ノ諸人ヲ一々査出センヲ財産ハ官ニ入ル等ノ節ハ請フ亦各該司ヲシテ舉行セシメント之ヲ允セルナリ

是ノ月二十三日秋曹ヨリ罪人全長雲崔烱ハ不待時斬ノコトヲ以テ啓ス教スルニ律ニ依レトノコトヲ以テス

是ノ月二十四日大司憲林肯洙ヨリ疏請スラク尚教○南鍾三ノ父ニシテ既ニ過產ノモノヲ拿鞫得情シ両賊○南鍾三洪鳳周ノ子ノ年又未タ滿タサルモノヲ追律セント批シ賜フ○批スルニ鞫事ハ屬コロノミ廟堂ヲシテ稟處セシメントノコトヲ以テス

是ノ日大王大妃ヨリ命スラク洋漢ノ黨援ハ譏捕掃蕩セヨト○教文ハ略ス

是ノ日命スラク尚教公州鎮營ニ嚴囚セヨ兩罪人ノ子ハ並ニ全州鎮營ニ囚セヨト○廟堂稟處ノ命アリ議政府ヨリ啓言シタルナリ

是ノ日命スラク邪徒ノ往来ノ水路唐船ノ旗號○十字旗ヲ認號ト為スハ嚴ニ瞭察ヲ加ヘ本國人ノ聯絡スル者ハ摘發取招シ先斬後啓セヨト○議政府ヨリ啓言セルヲ允セルナリ

是ノ月二十五日命スラク洋人申妖案等二人邪學人丁義

培禹世黄ハ並ニ梟警セヨト○議政府ノ啟言ヲ允セルナリ

是ノ日命スラク罪人梟首ノ時ニハ禁衛大將李景夏ヲ以テ代行セヨト

二月初三日南尚教ハ永ク仕籍ヲ刊シ鍾三鳳周ノ子ハ押送嚴囚セヨト命ス○議政府ノ啟言ヲ允セルナリ

是ノ月初六日謀叛不道ノ罪人鍾三ノ妻子○二女ト一子ハ並ニ昌寧縣ニ送リテ奴婢ト為セト命ス

是ノ月初七日洋人安敦伊等三人邪學人黄錫斗ハ忠清水營ニ押送シテ梟警セヨト命ス

是ノ月十八日忠清監司申櫶ヨリ異様船ノ問情ヲ以テ馳啟ス○是ノ月十二日平薪僉使ノ牒呈ニ依ル英國商船ナリ

是ノ月二十一日忠清水使李教昌ヨリ異様船ノ問情ヲ以テ馳啟ス○是ノ月十六日海美縣監ノ牒呈ニ依ル英國ノ商船ナリ

是ノ月二十二日忠清水使李教昌ヨリ異様船離發セルコトヲ以テ啟ス○是ノ月十五日平薪僉使ノ牒呈ニ依ル

是ノ月二十五日慶尚左水使具胄元ヨリ異様船ノ問情ヲ以テ馳啟ス○是ノ月十五日釜山僉使ノ牒呈ニ依ル米國船ナリ

五月二十二日平安監司朴珪壽ヨリ鐵山漂到ノ異國人問情ヲ以テ馳啟ス○是ノ月十六日鐵山府使ノ馳報ニ依ル米國船ナリ

是ノ月二十三日鐵山宣沙浦ノ漂人ニハ別ニ咨官ヲ定メテ之ヲシテ領往セシメヨト命ス○議政府ノ啟言ヲ允セルナリ

七月初八日北京禮部ニ回咨シテ洋人置辟等ノ情ヲ備陳セヨト命ス○議政府ノ啟言ニ依ル回咨文ハ略ス文中ニ若シ公憑ナクシテ潛越スル者ハ一切辟ニ置ケコト及ト金石ノ成憲ニ係ル又ハ藩臣ニ外交ナシ關市シテ異言ヲ機スルコトハ尤モ守邦ノ彝典ニ係ル又ハ今此ノ法國ノ執言即釁ハ圖慮ノ及ハサル所ナリ嘗シ而シテ幸ニ諸大人ノ排亂解紛ヲ蒙リ之ニ敎フルニ熟思萬全ノ計ヲ以テセルハ此誠ニ格外者佐ノ盛德主意ナリ等ノ語アリ

(按)八月十三日佛國艦隊ノ江華来侵ノ發端トス

是ノ月十五日黄海監司朴承輝ヨリ黄州ノ異様船ノ問情ヲ以テ馳啟ス○是ノ月初七日黄州牧使ノ馳報ニ依ル英國商船ナリ

是ノ月二十五日平安監司朴珪壽ヨリ異様船カ商船ヲ掠奪シ及ヒ我人ヲ殺傷セルコトヲ以テ馳啟ス○略ニ曰ク平壤防水城前磯ニ移泊スル異様大船一隻停留ノ由ハ已ニ馳啟ヲ為シタリ而シテ兼中軍鐵山府使白樂淵平壤府尹尹恭鼎ノ本月二十二日午時ノ馳報ニハ則チ異船少シクモ退去ノ意ナク或ハ商船ノ粮米饌物ヲ掠奪シ銃放ノ及フ所我人ノ被殺ハ七人タリ被傷モ亦タ五人タルノ多キニ至ルト云フ云々終日相戦ノ際彼ノ藥丸今幾ト盡クルニ向ントシ況ヤ又船ハ淺灘ニ擱シ進退スルヲ得ス數十名ニ過キスト雖モ黠謀利器亦自ラ保存ス容易ニ擒獲シ難キニ似タリ云々嗣後ノ形止ハ陸續登聞セント

(按)米國船ノ掠奪ナリ

是ノ月二十七日平安監司朴珪壽ヨリ異様船剿滅ヲ以テ馳啟ス○略ニ曰ク其ノ勝ヲ制スル所ノ策ハ火攻ヨリ先ナルハ莫ク一齊ニ火ヲ放チ彼船ヲ延燒シタルニ彼人崔蘭軒趙凌奉ハ跳テ船頭ニ出テ始テ救生ヲ請フ即チ擒捉ヲ為シ岸上ニ縛致セリ軍民憤忿シテ齊會打殺ス其ノ餘ハ殲滅シテ遺スコト無シ全省ノ騷擾ハ始テ鎮定スヘシ云々ト教シテ施賞ノ事ヲ回諭ス

八月初二日作邪綸音ハ斯ニ速ニ撰進シ真諺飜謄シテ坊曲ニ掲付セヨト命ス

是ノ月初三日作邪綸音ヲ中外大小民人ニ下ス○教ニ
曰ク云々不幸ニシテ七八十年ノ間所謂西洋學ナル
モノ辛亥○安政三年正祖十五年辛亥ニ濫觴シ辛酉○享和元年純祖元年辛酉
滋蔓シ云々己亥○天保十年憲宗五年己亥ノ獄ハ多ク辛酉ノ餘黨
ニ由レリ今春ノ變ハ尤モ己亥ニ憯セリ云々ト文長
キヲ以テ略ス○藝文提學申錫禧製
是ノ月十三日京畿監司俞致善ヨリ異船ノ形止ヲ以テ
馳啟ス○今月十二日巳時異樣船一隻富平ノ境タル勿雉島ニ留碇スト永宗僉使ノ謄報ニ接セルヲ狀セルナリ
(按)佛國艦隊ノ来侵ナリ
是ノ月十七日又馳啟ス○異樣船二隻陽川縣鹽倉頃ノ前洋ニ碇留セリトノ陽川縣令ノ所報ノ狀啟セルナリ
是ノ月十八日大臣將臣兵判捕將ヲ重熙堂ニ招見ス○判府事趙斗淳以下入參
九月初七日江華ノ留守李寅夔ヨリ被人ノ下陸セル
コトヲ以テ啓ス○本月六日巳時量洋船七隻本府甲串津ノ前洋ニ留碇シ彼人等ノ從船九隻ニテ一齊ニ下陸スルモノ五六百名多ク銃劒ヲ持シテ山ニ上リテ伺望シ將ニ犯城ノ虞アラントスルカ如シ云々トノ芝々僉使ノ所報ヲ狀啓セルナリ
是ノ日訓鍊大將李景夏總戎使申觀浩ヲシテ江頭
ニ出往シ防嚴ノ策ヲ商量準備セヨト命ス○議政府ノ啓言ヲ允セルナリ
是ノ月初八日京畿監司俞致善ヨリ異船ハ問情スルヲ
得サリシコトヲ以テ啓ス○狀啓スラク云々劒ヲ揮シ銃ヲ注シ彼船一隻ハ初七日酉時ニ還為下來シ鷹島ノ前洋ニ留碇セリトシ間情ヲ得ス通ノ境上ニ去ル
是ノ日江華留守李寅夔ヨリ長寧殿ノ兩聖御真
ハ白蓮寺ニ權奉セルコトヲ以テ馳啓ス○狀啓スラ
ク本月初七日未時彼人等東城ニ突入シ銃放ノ
及ブ所我人ノ被傷被死二人ト為ス云々城堞ヲ毀破
シテ踰入シ城内ヲ周覽シ後還為出去ス云々惶

恐待罪ストヌ状啓スラク云々彼船仍為停泊スル
ハ経夜ノ意アルニ似タリ故ニ本府経歴金在獻ヲシ
テ問情次ニテ出送セシム回報内ニ云々彼問ヲ誰カ
甬ヲ送レルヤト答我ハ地方官ノ問情次ニテ来到ス
ト云甬ヲ以テス則チ彼問ヲ今春間汝カ國ハ何ノ故ヲ
以テ洋人九名ヲ殺セルヤト答果レテ春間ニ於テ此ノ
事アリ而レテ俑カ國人都城ニ隠伏シ婦女ヲ姦昵シ
人ノ財貨ヲ奪ヒ暗ニ不軌ヲ售ル則チ國法ニテ一
律タルヲ逭レ難シ故ニ果レテ行刑ヲ為シタリ大低
我國人若シ俑カ國ニ入リ此ノ非法ヲ行ハヽ則チ俑
カ國モ亦タ當ニ之ヲ鋤誅シテ遺スコト無カルベシ此何
ソ執言センヤト彼云フ今方ニ汝ヲ殺サント答死ハ
則チ懼レサルナリ但シ通使問情人ノ殺害ハ古ヨリ
未タ有ラサルナリ俑們斯ニ速ニ返棹セヨト云甬則チ
彼答言フ發セヨト劒モテ促去スヽ已ヲ得ス還為下
陸シ鎮ニ到ル云々ト連接セル廣城堡別将金濬模ノ
所報ハ云々ト

是ノ月九日京外ノ大小民人ニ諭ス○教ニ曰ク云々外冦ノ警ハ近ク沁都保障ノ地ニ薄リ備禦疎虞ニシテ全城守ヲ失ヒ士民駭竄戮輔繹騷ノ語アリ哀痛ノ諭ナリ

是ノ日江華ノ留守李寅蔓中軍李龍會ハ並ニ削職セヨ留守李章濂中軍朴熙景ヲ差下シ給馬赴任セシメヨト命ス○議政府ヨリ啓言スラク江都既ニ守ヲ失ヘリ守臣ノ坐ナカラニシテ全城ヲ失フハ云々溺職タルヤ大ナリ姑ク先ツ削職シ留守ノ代ハ宗正卿李章濂ヲ差下シ登壇ノ例ヲ以テ施行シ中軍ノ代ハ云々當日辭朝給馬セシメ罔夜赴任之ヲシテ行クヱク且ツ兵ヲ收メシメ請フ全城ヲ克復スルニ期セシトヲ允セルナリ

是ノ月初十日原任大臣奉朝賀ニ同為シテ廟堂ニ来會シ沁都○江華府ノ別號克復ノ策ヲ爛加措劃セヨト命ス

是ノ月十一日巡撫營ヨリ洋賊ハ通津府ニ入リ民財及ビ公私錢ヲ掠奪シ先鋒中軍李容熙ハ該府ニ到リテ留陣ストノコトヲ馳報ストノコトヲ以テ啟ス

○該營ヨリ啟言スラク先鋒中軍李容熙ノ今月初十日戌時ノ馳啟ニハ云々昨日洋賊ハ邑村ヨリ轉シテ文珠山城ニ上リ或ハ上シ或ハ下シ據險ノ意アルカ如シト云フ云々ト

是ノ月十四日巡撫營ヨリ異船人カ甲串津ヨリ江華城ニ即入ストノコトヲ以テ内啓ス

○十二日酉時異様船人五名城内ニ即入シ一周四シテ去ル酉時火氣天ニ冲ス云々○又今十三日午潮水アリ異様小船二隻甲串津前洋ヨリ下来シ德浦津ニ到リ越テ江華廣城津ニ去リ軍物火藥庫ヲ奪去シ衝火後ニ還為上去ス云々

是ノ月十六日出征將士ニ諭ス○教ノ略ニ曰ク爾出征將士等克ク厥ノ武ヲ奮ヒ尚ク果毅ヲ迪キ用テ厥ノ勲ヲ成シ以テ我カ國家ヲ壯ニセハ則チ勞ヲ酬ヒ賞ヲ懋ニスルノ節自ラ彝典アラン咸須ク知悉スヘシト

○教文ハ略ス

是ノ日大小臣庶ニ諭ス○教文ハ略ス

是ノ月二十一日巡撫營ヨリ賊徒ハ龍津ノ界ニ衝火セルコトヲ以テ啟ス

是ノ日巡撫營ヨリ文珠鎮ノ破燒形止及ヒ我軍死傷ノ虛實ヲ以テ啓ス○教文略ス

是ノ月二十二日巡撫營ヨリ賊徒衝火ノ形止ヲ以テ啓ス

○二十一日廣城鎮ノ門樓ニ火シ又昨日玉浦江邊ノ人家及ヒ龍津ノ火藥庫ニ火シ又今日祖江ニテ大碗口ノ二九ヲ放チ丸ハ執待ノ我船ニ落チタルモ幸ニ全傷ヲ免レタリ云々ト啟セルナリ

是ノ月二十三日朝野ノ士民ニ諭ス○諭文ハ畧ス敵愾ノ人ノ陳策赴陣ヲ勸ルナリ

是ノ月二十六日京畿水使鄭雲翼ヨリ洋賊カ我船五隻ニ衝火セルコトヲ以テ啓ス○二十九日洋賊ノ從船二隻江華ヨリ下来シ大碗口ヲ連放シ前洋ニ延留セル船五隻ニ衝火シ還為上去セルヲ啓セルナリ

十月初四日巡撫營ヨリ江華西城近處ノ賊カ衝火セルコトヲ以テ啓ス○九月二十九日德浦僉使通津府使文珠別將等ヨリノ所報ヲ啟セルナリ

十月初四日巡撫營ヨリ鼎足山城ノ千摠梁憲洙カ捷ヲ報シ援ヲ請ヘルコトヲ以テ啓ス○該營ヨリ啓言スラク即チ先鋒中軍李容熙ノ今初日戌時ノ馳報ヲ見ルニ則チ鼎足山守城千摠梁憲洙ノ手本内ニ當日午時量賊將馬ニ騎シ數百ノ兵ヲ率テ東南門ニ分入ス我カ軍發銃一放ス或ハ中リ或ハ未タ中ラス彼亦タ發砲ス遠キハ城内ニ及フ船頭堡ノ別將及ヒ邑民車再俊丸ニ中リテ仆ル哨官一名ハ丸ニ中リテ死ス賊漢ハ則チ死ヲ致スモノ六名タリ而シテ皆屍ヲ收メテ去ル彼ハ餘氣アリ我ハ齊進ノ銃ナク且ツ藥ト丸トハ俱ニ盡ク豈ニ許ノ如キ圖措ノモノアランヤ云々以テ救援ノ地ヲ為セト云フナリト○又啓言スラク即チ先鋒中軍李容熙ノ今初三日亥時ノ馳報ヲ見ルニ則チ鼎足山ノ守城千摠梁憲洙ノ馳告内ニ俄者捷報ス大戰方ニ收リ百擾交叢シ未タ詳陳スル能ハス蓋シ此ノ城ハ即チ必守ノ地ナリ而シテ今月初一日彼ノ漢六十餘名此ノ城ニ入リテ四勢ヲ詳察シ僧徒ノ器皿ヲ破テ去レリ其ノ夜我カ軍潛渡シテ入ル彼實ニ今日アルヲ知ラス則チ彼ハ別占守城ノ計ヲ以テ頭領馬ニ騎シ驢ヲ牽キ輜重酒食ヲ携ヘ疑フコトナクシテ來タ東南門ニ分入セントスルノ際我カ軍ハ左右ニ埋伏シ齊發ス彼ノ死者六我ノ死者一ナリ

而シテ船頭堡ノ別将ハ丸ニ中テ卧ス賊未タ敢テ城ニ入ラス輜重器械多ク棄去セルアリ我カ軍拾取テ来ル故ニ並僧徒ヲシテ留置シテ以テ後日詳閲録報スルヲ待タレム我カ軍既ニ一場ノ驚惕ヲ経テ藥丸俱ニ盡キロアルモノハ皆援兵ヲ請フ而シテ明日彼若シ兵ヲ加テ復来セハ則チ将ニ何ノ境ニ至ルヤヲ知ラス砲手ハ三百名ヲ限リ明日未明前越送シ助勢ノ地ヲナサント云フナリ

是ノ月初六日巡撫營ヨリ洋船ノ去路ニ別軍官李基祖軍ヲ督シテ交戰シ凶酋逃走セルコトヲ以テ啓ス

○今初四日砲手五十名ヲ率テ德浦ニ往キ該鎮ノ浦邊ニ埋伏シ今日辰時量異大船四隻カ埋伏ノ處ニ齊到セルトキ我兵發砲ス一場交戰ノ際凶酋被傷幾許ナルヤ未タ詳知スル能ハサルモ逃去シ我カ軍ハ別ニ傷損ナシ

是ノ日巡撫營ヨリ沁都○江華府ノ内外城ノ被焼形止及ビ向日ノ奪ハレタル漕穀遺在ノ數爻ヲ以テ馳啓ス

○該營ヨリ啓スラク云々鼎足山守城千摠梁憲洙ノ手本内ニ沁都ノ摘奸別軍官朴鼎和申錫範ノ回告内ニ経劫敗局滿目慘痛ナリ而シテ内城ハ則チ長寧殿萬寧殿客舍及ビ各公廨ハ並ニ灰燼ニ入ル而シテ貳衙政堂ハ只三間ヲ餘セリ作廳ハ則チ完シ校宮忠烈祠闕武堂中營及捕廳ハ完シ民戸ハ則チ一々計数スヘカラス而シテ灰燼過半ナリ東西門ハ完シ南門ノ門隻及ビ懸板女城ハ盡ク敗破セラル城上ノ左右ニ我カ國鎗十二柄ヲ分列ス外城ハ則チ鎮海樓内ハ民家一戸被焼ス鎮海寺前ノ禁營庫訓局御營兩庫ハ焼燼ス人定鐘ハ運シテ外城内ノ路上ニ到ル我カ國ノ大砲口二座ハ甲串浦

邊ニ落在シ銃筒四座ハ外城内ニ散在ス向日ノ
奪ハレタル漕運米ハ甲串浦ノ民家ニ遺在ス假
量四百餘石ト為ス而シテ漕船一隻ハ岸中ニ掛
ル又二百石アリ而シテ人民空虛日勢旦暮未タ
照数スルニ及ハス故ニ領軍ノ哨官秋正旭ヲシテ
即為收拾守直セシムト云フナリ六百餘石ノ米
ハ是レ税穀ニ係レリ請フ廟堂ヲシテ稟處セ
レメント之ヲ允ス
是ノ月初七日楊花ノ陣ハ姑ク仍留セヨト命ス
是ノ月十三日巡撫營ヨリ異船ハ没數八尾島外ニ
出去セリトノコトヲ以テ啓ス○徳浦僉使ヨリ異船五隻今日巳時一齊纜碇下去セルコトヲ馳報シ又冨平府使ヨリ異様船七隻今日辰時没數八尾島外ニ出去セルコトヲ馳報セルナリ
是ノ月十五日楊花ノ陣ハ先ツ解嚴セヨト命ス○教

レテ曰ク日氣漸寒ナリ各處出征ノ將卒ハ風
餐露宿實ニ矜憐スル所ナリ且ツ賊船既ニ外
洋ニ出テタリ楊花ノ陣ハ先為解嚴セヨト
(按)八月十二日佛國艦隊ノ来侵セルヨリ此ニ至ルマテ
殆ト五十餘日ナリ
是ノ日我カ國經スル所ノ洋舶顛末ニツキ書契ヲ修
レテ萊館ニ送リ東武ニ轉致セヨト命ス○議政府ヨリ啓言スラク向ニ洋舶ノ情形ヲ以テ已ニ北京ニ咨報セルアリ而シテ第々念フニ日本ハ講和ヨリ以後凡ソ事ノ邊政ニ係ルモノハ互相通報セリ曾テハ庚申ニ於テ繫防洋教ノ事ヲ以テ島主ヨリ東武ノ意ニ因テ我邦ニ書通セリ今此ノ洋夷ハ姦往儻来測リカタシ且ツ統營外洋出没ノ船ハ日本ニ於テ必無ヲ保シ難ニ交好ノ道タルヤ事ニ先タテ通知スヘキニ似タリ云々以テ邊防ヲ警シ隣交ヲ敦フスルノ意ヲ示サント之ヲ允セルナリ
十一月初一日洋船事實ニツキ回答ヲ撰出シ使行ノ
到ル所ノ處ニ下送セヨト命ス○承文院ヨリノ啓言ヲ允セルナリ回答文ハ畧ス

慶應三年丁卯

九月十二日丙丁ノ戰亡人ヲ考出シ以テ入シ士卒
ニハ致酹セヨト命ス

明治元年戊辰

三月二十三日平安監司朴珪壽ヨリ異船ノ形止ヲ以テ馳啟ス○本月二十日巳時異様ノ三桅大船一隻ノ西海外洋吾々里島前ニ向フ云々トヲ以テ馳啓セルナリヨリ新南坊避島近境ニ来泊シ避島ヨリ新南ノコトヲ以テ馳啓セルナリ

(按)米國漁獵船ナリ

是ノ月二十四日黄海兵使李敏庠ヨリ異船カ椒島ヲ過クルノ形止ヲ以テ馳啓ス○今月十九日ノ形止ヲ馳啓セルナリ

是ノ月二十五日黄海兵使李敏庠ヨリ異船漢カ下陸シテ侵索セリトノコトヲ以テ馳啓ス

是ノ月二十六日平安監司朴珪壽ヨリ異船ノ形止ヲ以テ馳啓ス○三桅大船一隻ノ三和新南防避島ノ近境ニ来泊ノ啓ナリ

是ノ日黄海兵使李敏庠ヨリ異様船ノ問情ヲ以テ馳啓ス○問情書ハ畧ス

是ノ月二十八日平安監司朴珪壽ヨリ異船ノ形止ヲ以テ馳啓ス

是ノ月二十九日黄海監司曹錫輿ヨリ異船ノ形止ヲ以テ馳啓ス

(按)此ノ異船ノ形止ハ此ニ止ル

三月三十日平安監司朴珪壽ヨリ異船ノ形止ト問情トヲ以テ並ニ馳啓ス○問情記八畧ス

(按)米國欽命督理選安多ノ来リテ通商ヲ求ムルナリ

四月初三日三和防禦使李基祖ヨリ異様船ノ問情ヲ以テ馳啓ス○状啓中ニ本月二十七日大船ノ傍ニ至リタルトキ我國津船ノ迄来セルアリ故ラニ其ノ来由ヲ問フニ則チ長連邑ヨリシテ大院君ノ封書ヲ奉シテ彼船ニ傳フル次ニテ来到スト云フ俄ニシテ大船上ヨリ答ヲ受テ去ル云々ノ文アリ問情スヘキナカリシナリ

(按)米國船ナリ大院君ノ封書ハ未攷

是ノ月十九日趙喆增ハ再捕廳ヲシテ罔夜捉来セシメヨト命ス○議政府ヨリ啓言スラク云々日前邪學ノ罪人張致善ヲ捉得シタルニ其ノ口招内ニ丹陽居ノ前正言趙喆增ハ邪類ニ符同セルコト惟久シ云々具格拿来シ鞫廳ヲ設ケテ得情セント之ヲ允セルナリ

是ノ月二十一日忠清監司閔致庠ヨリ洋醜下陸シテ德山ニ攔入シテ伽洞ノ墓所○南延君ノ墓所ヲ犯スニ至レルコトヲ以テ馳啓ス○状啓ニ本月十八日午時三帆ノ異船一隻西ヨリシテ来リ洪州行擔島ニ来泊シ而シテ其ノ從船一隻帆ナクシテ能ク行キ烟ハ船中ヨリ出テ疾キコト飛電ノ如シ少頃ニシテ德山郡九萬浦ニ到リ下陸シ稱スルニ我羅斯國ノ軍兵タルヲ以テシ百餘名軍服ヲ着ケ鎗劒砲ヲ特シ直ニ官門ニ入リ軍器ヲ奪取シ公廨ヲ破碎ス其ノ委折ヲ問フモ答ヘス發砲行劒シテ接足スルヲ得サラシム直チ南延君ノ墓所ニ走キ墓村ノ鋤子

光耳等ノ物ヲ奪取ス云々其ノ強鋒ハ火砲モ抵
敵スル能ハス洋賊果シテ墓所ヲ犯シ莢ヲ發
スルコト三張ナルノ境ニ至ル十九日卯時洋賊ハ旋
テ九萬浦ニ向テ行船シ而シテ大船ニ會合シ西ニ
向テ去レリ云々ト○教スラク云々其ノ餘勦滅ノ
策ハ廟堂ヲシテ三懸鈴シテ道帥臣ニ行會セシム
ト

按是レ前年平安監司ノ勦滅シタル米國船ノ報復
行為ナルカ如シ

是ノ日邪類ノ漏網セルモノハ両捕廳各鎮營ニテ一々
捉得シ殄滅セヨト命ス○教ニ曰ク今此ノ德山ノ
墓所ノ作變ハ萬々驚悚ナリ海外洋醜豈ニ能ク
程途ヲ知テ肆然闖入スルナランヤ必ス我國ノ
邪類カ慫慂嚮導スルモノアルナリ之ヲ思フテ此
ニ及ヘハ尤モ痛惋ヲ極ム今ヨリ以後邪類ノ漏網
者ハ云々○前文ト同シ

是ノ月二十二日京畿ノ監司李宜翼ヨリ異船ノ形止
ヲ以テ馳啓ス

是ノ月二十三日忠清ノ監司閔致庠ヨリ異様船ノ形
止ヲ以テ馳啓ス○狀啓ニ德山郡作變ノ匪類カ十九日朝水シテ九萬浦ヨリ行船ス而シテ船中ニ我國ノ衣冠セル者二名アリ必ス是レ邪類ナラン云々ノ語アリ

是ノ日永宗ノ僉使ヨリ異船ノ問情ヲ以テ馳啓ス○狀啓中ニ問フニ何國人ニシテ何ノ事ニ緣テ此ニ到ルヤヲ以テシタルニ答ヘサルノ語アリ

是ノ月二十六日永宗僉使申孝哲ヨリ洋賊二ノ首ハ
斬テ東門ニ懸セルコトヲ以テ馳啓ス○狀啓ニ二十五日巳時賊船ノ中小二隻カ城底ニ下來シ成隊環立シ舉措殊常ナリカヲ併セ銃ヲ持シ門ヲ叩テ喝鬨ス云々一場交戰ス賊傷ツクモノ甚タ多

ク水ニ溺テ死スルモノ的数ヲ知ラス云々二賊ノ首ヲ以テ斬テ東門ニ懸ケ以テ賊衆ヲ威ス云々ノ語アリ

是ノ日永宗僉使申孝哲ニ水使履歴ヲ許用シ兵使ニハ窠ヲ待テ先擬セヨト命ス

是ノ日洋醜ノ首ハ京師ニ函上シ各營ノ將臣ハ教場ニ出往シ回示シタル後八方ニ輪示セヨト命ス

是ノ月二十八日賚奏官ヲ開政差出シ奏咨文ハ文任ヲシテ撰出セシメヨト命ス

是ノ日永宗喬桐ニ烽臺ヲ設置セヨト命ス

是ノ日京畿ノ監司李宜翼ヨリ異船ノ形止ヲ以テ馳啓ス○狀啓ニ二十六日未時八尾島ヨリ下来シ南陽等ヲ過キ直ニ西南大洋ニ向フ杳トシテ形跡ナク其ノ向フ所ヲ知ラス云々ノ語アリ

是ノ日黄海監司曹錫輿ヨリ異船ノ形止ヲ以テ馳啓ス○二十四日巳時ノ異船形止ナリ

閏四月初二日永宗出戰ノ將卒ニ論賞セヨト命ス

是ノ日寧豊君崔遇亨ヨリ疏請スラク邪徒李身逵等ヲ嚴鞫得情セント賜批シテ王府ヲシテ設鞫得情セシメン云々ト

是ノ月初十日犯邪罪人ノ姻親戚黨ハ無碍供職セヨト命ス

是ノ月二十三日東萊府ノ邪學罪人朴根基ノ餘黨ニツキ嶺湖兩道ヲシテ跟捕セシメヨト命ス

五月二十二日邪學ノ罪人張致善等ハ鎮撫營ニ押送シテ鳥警セヨト命ス

六月十三日曹演承準承ハ王府ヲシテ一體ニ拿鞫セシメヨト命ス

是ノ月十八日水原ノ在囚罪人李永中ハ忠清水營ニ

押送シ大ニ軍民ヲ會シテ梟首シ衆ヲ警メヨト命ス

是ノ月二十六日罪人演承洛承ニツキ結案ヲ捧ス○義禁府ヨリ啓言ノ結案ハ畧ス妖言ヲ造シ傳用衆ヲ惑スコト的實ナルニ遲晩スト云フ不待時斬

八月初二日時原任ノ大臣金吾堂上左右捕將ヲ修政殿ニ召見ス○鄭德基等ノコトニツキ王府ヲシテ設鞫得情セシメントノ請對ナリ

是ノ月初三日罪人德基○鄭姓乃亨○尹姓允垂○朴姓ニツキ結案ヲ捧ス○義禁府ヨリ啓言ス德基ハ謀反大逆トシテ不待時斬ナリ乃亨ハ謀逆同參トシテ不待時斬ナリ允垂ハ謀反大逆ノ知情不告トシテ不待時斬ナリ

九月初四日慶尚監司吳取善ヨリ邪學ノ罪人朴守連等ヲ去月二十七日梟警セルコトヲ以テ啓ス

明治二年己巳

六月十四日江界ノ沿邊ヲ譏詗嚴密ニセヨト命ス

九月二十二日北兵使ノ異樣船問情ノ啓ハ廟堂ヲシテ稟處セシメヨト命ス

是ノ月二十四日進講ヲ紫微堂ニ行フ○孟子ヲ講ス

○領議政金炳學曰ヶ即チ北兵營ノ狀啓ヲ伏見スルニ則チ漂來ノ俄夷ハ船ヲ棄テヽ發ストヽ而レテ又聞ク投書ノ舉アリシト云フ遠外ノ事ハ料度スヘカラス而シテ匪類ハ近境ニ隔在ス種々此ノ如キノ事アリ遺置ノ什物ハ方ニ之ヲシテ留待還給セシメタリ而シテ彼ハ既ニ數來ス故ニ下民ハ則チ視テ以テ常ト為シ警撓ニ至ラサルナリト太王曰ク彼人數々來ル故ニ百姓騷擾ヲ為サ

サルナルカト

明治三年庚午

七月二十五日二品以上ヲ康寧殿ニ召見スヽ領議政金炳學奏シテ曰ク北關ノ犯越人ハ押来ノ後禮部ニ回咨シ従當稟復セシ而シテ即聞スルニ慶源農圃社ノ李東吉ハ厚春ニ越去スルコト已ニ三十餘年タリ沿民ノ招引ト匪類ノ嘯聚トハ往々近村ヲ侵掠スルノ患アリ厚春人モ亦タ顔私ニ拘シテ互ニ相掩護スト云フ此レ若シ終始任置セハ則チ来後ノ憂慮量ルヘカラス撰咨ノ時此ノ意ヲ以テ一體ニ措辭シ押還ノ地タラシメント太王曰ク依テ之セト

明治四年辛未

四月初六日作變セル德山ノ罪人金昌實等ハ具格シテ南閤ニ拿囚セヨト命ス○親問ノ為ナリ

是ノ月初九日金吾○義禁府ヨリ罪人昌實○金姓汝江○金姓敦浩○李姓等ヲ結案ヲ以テ啓ス○結案畧ス謀反大逆トシテ不待時斬ナリ

是ノ月初十日異様船問情ニハ解事ノ譯官ハ該院ヲシテ擇定下送セシメヨト命ス○議政府ノ啓言ヲ允セルナリ

(按)米國船ノ来侵ナリ後日草芝德津ノ失守中軍魚在淵ノ戦亡アリ

是ノ月十四日洋船来リテ泗都ニ泊ス防守ハ意ヲ加ヘテ措處セヨト命ス○三軍府ノ啓言ヲ允セルナリ

是ノ日鎮撫中軍魚在淵判官李昌會ヲ差下ス

是ノ月進講ヲ延生殿ニ行フ○中庸講ス○太王曰ク洋船

ノ動静何如ト右議政洪淳穆曰ク孫石項ヨリ還
為退泊ノ後日來姑ク未タ動静ヲ聞カス而シテ此
ハ深慮スルニ足ラス都下ノ民情未タ安靖ナル能ハス
シテ穀價日ニ踴ル窮夏食ニ艱ムノ嘆ハ深ク問
スヘシト太王曰ク云々ト講官姜浩曰ク云々今相
戰ノ後ニ於テ其ノ心ノ在ル所ハ何ソ測度スヘケン
ヤ云々ト
是ノ月二十日進講ヲ延生殿ニ行フ○領議政金炳學以下入參ス中庸ヲ講ス
○領議政金炳學ヨリ彌利堅云々ノ語アリ太王
曰ク交易ト云フト雖モ相通スヘカラス而シテ若シ
一タヒ相通セハ則チ邪學必ス熾ニ夫子ノ道將ニ
淪セントスルナリト又曰ク宣傳官往見シタル則
チ船板傷破スト果シテ然ルヤ炳學曰ク彼船ノ敢
テ跳踉ヲ肆ニスルハ必ス我カ國人ノ慫慂スル者アラン
而シテ轟砲ノ船板ヲ撞破シ彼ノ醜ノ喪膽逃走
セルハ此レ狀事ヲリ云々ト
是ノ月二十五日進講ヲ延生殿ニ行フ○監事洪淳穆以下入參中庸ヲ講ス
○太王ニ美夷ノ我カ境ヲ侵犯スル極テ痛惋ト
為スノ語アリ洪淳穆ニ今番草芝ノ闖入ニハ必ス
是レ凶徒カ内應スル所アリシナランノ語アリ
是ノ月二十七日凶醜ハ今稍退タリト雖モ現前ノ防
守ハ尤モ疎忽ナルヘカラス干城ノ責アルモノ益自
勉ヲ加ヘヨト命ス○鎮撫使鄭岐源ヨリノ狀啓ニ草芝德津ノ守ヲ失ヒ燒ヲ被ル云々トアリ此ノ教アリシナリ
是ノ月二十八日鎮撫中軍○魚在淵以下ノ戰亡將卒ニハ並ニ
贈職褒賞セヨト命ス
是ノ月十五日進講ヲ延生殿ニ行フ○領議政金炳學以下入參詩傳ヲ講ス

○太王曰ク日前ニ石面刻字スル所アリ大街上ニ
竪ツ此ノ後何ノ騒説アリヤト領議政金炳學
曰ク此ニ因テ大小民人皆此ノ個ノ義理ヲ知ル則チ
騒訛ハ亦タ當ニ寢熄スヘシト太王曰ク云々而シテ
彼ノ向キノ書ニ富平府使久往多時另ニ別路ヲ
求メテ之ヲ貴朝廷ニ達セン云々トアリ乃チ中
國ノ謂タルコトナキヤ中國ヨリ此ノ事ヲ以テ咨文
出送ノ理ナキニ似タリ而カモ設シ出送アラハ凡
ソ中國ノ往復ニ於テ何ソ少忽ニスヘケンヤ而シテ
此ノ事ニ於テハ果シテ承順シ難クンハ則チ今日ヨリ
君臣上下固ク大義ヲ守ランノミト炳學曰ク聖教
至當ナリ彼ヨリ往テ禮部ニ乞フコト雖モ禮部ハ聽
施スルノ理ナキニ似タリ又或ハ咨文ノ出來スルモノ

アラハ當ニ回咨ノ説アルヘシ若シ彼ノ醜ニシテ咨文
ヲ持來ストモ此ハ通咨ノ道ニ非サレハ則チ何ソ
之ヲ受クヘケンヤ正道ヲ以テ之ヲ斥ケハ將ニ天
下萬世ニ辭アラントスト太王曰ク此ノ筵説ハ朝
紙ニ頒布セヨト云々
五月十八日戒嚴ト馬軍船隻ノ先為解送ヲ命ス○洋船遠
遁スト雖モ沿海ノ戒嚴ハ疎虞ナルヘカラ
ス云々トノ三軍府ノ啓言ヲ允セルナリ

明治十年丁丑

正月三十日安撫使金有淵ヲ萬慶殿ニ召見ス○復命ナリ有淵ヨリ犯越ノ民ハ曠蕩ノ典ヲ聞クヲ得テ其ノ帰ルコト市ノ如シ聖化ノ及フ所ニ非サルハナシノ語アリ太王曰ク茂山ノ地ハ把守ヲ置クヘキノ處アリト云フ是何ノ處カト有淵曰ク虚項嶺ニ通スルノ要隘ナリ山頭洞犯越ノ類ハ多ク此ノ路ヨリセリト太王又曰ク俄羅斯ノ前ニハ何ヲカ聞クナラスヤト有淵曰ク一タヒ渾春沿海ノ地ヲ画給セルノ後ハ我カ界ト接壤シテ匪類ヲ容接ス故ニ犯越ノ弊多シトノ語アリ

六月十一日金羅水使金箕赫ヨリ異様船情ヲ以テ馳啓ス○初九日酉時南海ヨリ來リテ黒山前洋ニ下碇セルナリ

(按)英國船ナリ

明治十一年戊寅

五月初四日法國人ハ灣府ニ領付シ鳳城ニ入送セヨト命ス○議政府ヨリ啓言スラク都京禮部咨ノ出來セルモノヲ即見スルニ云々朝鮮ハ法國教士理若望ヲ拏禁シタルニツキ該國使臣白羅呪ヨリノ籲懇ニ據リ中國海口ニ釋送センコトヲ即行セントノ諭旨ナリ下咨シテ酌核辦理セントノコトヲ辞ト為セリ云々上國ノ指揮ニ遵テ云々セントヲ允セルナリ

六月初六日日本外務省ノ書契ノ回答ハ槐院ヲシテ萊館ニ撰送セシメヨト命ス○日本外務省ヨリ佛國宣教僧ノ放還ニツキ專報アリ云々議政府ノ啓言ヲ允セルナリ

明治十二年乙卯

四月十一日洋國人ノ譏獲○公州地方ニテヲ解送スル譏獲セルモノ

ニツキ措辭撰咨トシテ灣府ニ領付シ鳳城ニ

入送セヨト命ス○議政府ヨリ啓言スラク云々昨年就捕ノ法國人一個ハ特ニ上國ノ指揮ニ因リ已ニ其ノ解送ヲ許セリ今ニ到リ我カ國ノ事勢亦タ遽ニ誅戮ヲ施シ難シ云々ト之ヲ允セルナリ

八月十六日都京ノ禮部ヨリノ法國教士釋送ノ回

咨ハ措辭撰送シテ北京ニ轉致セヨト命ス○承文院ヨリノ啓言ヲ允セルナリ

是ノ月二十九日義州府尹林翰洙ヨリ佛朗人ヲ徑先

入送ノ顛末ヲ以テ馳啓ス○初六日陪來ノ啓文ヲ査對シタルニ法國人入送ノ咨ニ非スシテ日本公使來去ノ啓タルヲ以テ馳啓シタルナリ

明治十三年庚辰

二月二十七日北兵使任商準ヨリ騎馬異國人ノ防守ヲ以テ馳啓ス○前月二十七日慶興府使ヨリ騎馬異國人十九名ノ乘氷出來ナリ○問答記ニ俄羅斯ノ職名ハ高来薩名ハ馬桂隣カ邊事敦正ノ次ヲ以テ来レルナリ云々

四月初十日慶尚監司李根弼ヨリ洋夷騎スル所ノ異様船問情ヲ以テ馳啓ス○東萊府使ヨリノ謄報ニ留館ノ領事官倭近藤進鋤從倭五名ヲ率ヒ本府ニ来抵シ亜米利加國人ノ船ナルヲ告ケ通和ノ書契ヲ呈納セントト云フナリト云々ト

七月二十三日咸鏡監司金炳地ヨリ異様船德源長德ニ來泊セルコトヲ以テ馳啓ス○今月初十日譯學高永喜ノ手本ニ云々船ニハ日本通事一人アリテ意太里亜國ノ軍艦ニシテ内ニ其ノ國族一員アリ今年正月該國遊覽ノ次今月四日永興ニ到リ今日本港ニ移泊スト云フ云々國蹄變幻極メテ測リカタシ即速問情馳報スト云ノ意ナリ

七月二十八日咸鏡監司金炳地ヨリ長德島到泊ノ異様船ハ發船セルコトヲ以テ馳啓ス

八月初五日慶尚左兵使李基赫ヨリ火輪船明情
ヲ以テ馳啓ス
是ノ月初十日咸鏡監司金炳地ヨリ火輪船ノ還帰及
ビ到泊ヲ以テ馳啓ス

明治十四年辛巳
五月十五日斥邪綸音ヲ八道四都ニ下ス○教文ハ
略ス
是ノ月二十二日大邱邪類ノ徒黨ハ各鎮ニ嚴飭シテ
鋤治シ罪人禹秉延ハ左水營ニ押送シテ梟警
シ東萊府使金善根ハ推考セヨト命ス○總理機務衙門ノ啓言
ヲ先セルナリ梁山郡守ノ移文ニ行止殊常ノ漢二名アリ捉致究問シ
タルニ一ハ是レ大邱人ナリ一ハ是レ日本人ナリ云々今春倭館ニ入
リ伊東倭ノ處ニ留宿シ云々朝鮮衣様ニ換着シテ
梁山ニ到以テ被捉ニ至ルト云フト云フト
七月初十日今番ノ斥邪綸音ノ頒下ハ統理衙門ヨリ
行會分給セヨト命ス○口教
ナリ

第三節　修交締約

資料　第十二類第一種總ノ二第一號乃至六一號第二種日省録二第一號乃至二九九號日省録ノ三第一號乃至一九五號第三種第一號乃至六九號參照

(按)日韓両國ノ交際ハ由來スル所極メテ舊シ而シテ両國君主ノ情宜敦陸ナリシコト修交以後ヲ盛ナリトス前節ニ記載スル所ノ清韓間ノ事大貢獻ニ関スル典禮ハ明治二十八年四月ノ日清媾和條約ニ明文ヲ掲ケテ之ヲ廢止セシメ北彊露國ノ南下ニ對スル脅威ハ三十八年九月ノ日露媾和條約ニ明文ヲ掲ケテ之ヲ一掃スルヲ得タリ本節ノ記載ハ明治九年丙子二月日韓修交條約ノ締結ヨリ三十八年十一月韓國ヲ我カ保護

國ト為ス迄ノ三十餘年間ニ亙リ各國締約ノ記事ヲ合録ス其ノ年月ニハ前節記載ノ年月ト重複スルモノアリト雖モ太王ヵ韓國ノ君主トシテ締盟列國トノ使節往來ニ關スルモノニシテ近代國際ノ通義ハ單ニ典禮上ノ交際ニ止マルモノニハ非サルナリ

日韓ノ修交ハ江華條約ニ始マルト雖モ太王ノ召接ハ丙子六月十二日○陰曆日本理事官宮本小一ヵ修政堂ニ進謁シタルヲ以テ最初ト為ス爾後列國使臣ノ進謁ハ事至テ繁ク各種資料ニ散出シテ一部ノ成冊ヲ存スルモノアラサルヲ以テ略々使臣ノ官號氏名并ニ條約締結ノ月日ヲ録シ其ノ他ノ常例ニ屬スルモノハ多ク省略ニ從ヘリ前後締交スル所ノ列國ハ日米英露獨伊佛墺清白丁ノ十一國ニ上リ其ノ條約ニハ批准ノ手續ヲ用ヰタルモノアリ又批准ノ手續ヲ須タスシテ有效ト為リタルモアリ韓露條約ハ三十七年甲辰五月廢棄ヲ宣言シタル後再訂スルニ至ラスシテ國統遂ニ移レリ韓國ノ國制ハ君主專制ノ憲法ニシテ明治三十二年八月十七日ノ奏本ヲ存ス同日詔シテ法規校區所ノ商立セル國制ヲ登聞シ旨ヲ取ラシメ之ヲ頒示シタルモ一ノ文具タルニ過キサリンハ前章ニ録スル所ナリ其ノ第五條ニ陸海軍ノ統率權ヲ規定シ第九條ニ宣戰媾和及ヒ諸般ノ條約ヲ締結シ各有約國ニ使臣ヲ派送駐紮セシメ其ノ使臣ハ公法ニ謂ハユル自遣使臣タルヘキヲ

言ヘルモ太王ハ足跡京畿ヲ出テス又軍旅ヲ親カラセルコトアラスレテ宣置戰媾和及ヒ諸般外交ノ事務ヲ親ラセルニハアラス二十七年六月二十二日○陰曆大鳥公使所奏ノ五條目ニ對シテハ我カ家自カラ舊章規模アリ而シテ其ノ論五條モ亦タ甚タ好シト言ヒ三十八年十一月伊藤大使所奏ノ協約五條ニ對シテモ亦タ好樣ニ協商セヨト言ヘルノミ蓋シ帝王家ノ言行ハ包容廣大ニシテ自カラ儀型ヲ存シ必スシモ臣庶ノ獻替可否スルモノト同シカラサルナリ本節ノ記スル所ハ君主ノ大權事項タルコト疑ナク其ノ親行事蹟ト稱スルモ不可ナキナリ

近代太洋横斷ノ術開クルニ及ヒテ歐亜諸國ノ交通一新シ玉帛梯航日々ニ盛ナリ惟朝鮮ハ東陬ニ僻在シテ國ヲ立テ一綫ノ陸路三百里以テ北京ニ貢獻シ稀ニ我カ對馬藩ト貿易スルノミ此ノ如キモノ二百餘年全ク鎖國ノ狀態ニ在リ境土已ニ褊少民俗亦タ頑陋ニシテ其ノ政令ハ徒ニ煩苛ヲ事トシ民其ノ命ニ堪ヘサルモノアリ立國ノ艱辛ナルコト到底列國ノ間ニ齒スルニ足ラサルモノナリ善イ哉一千八百九十六年○明治二十九年佛人「クーラン」ノ論ニ曰ク其ノ東西兩隣ハ一ハ美術戰爭並ニ社會編制力ニ於テ卓出シ一ハ文獻ノ欝叢實生活ノ奮鬪ニ於テ優越セリ此ノ兩隣ノ間ニ介在セル朝鮮ハ民貧シク俗陋ニ山路嶮峻ニシテ交通開ケス數百年來掠奪征服ヲ被リタル以外ニハ外國トノ交渉ヲ有セス自國ノ

發明力モ國境ノ中ヲ出テス高尚ナル思想モ國内ニ限局シ黨爭四裂以テ一切社會ノ進歩ヲ停止シタルハ現在ノ荒涼寂寞タル狀態ヲ說明スヘク禍福ハ門無シ亦タ其ノ自ラ招ク所ニシテ其ノ天才其ノ智慧モ之ヲ擴充スルニ由ナキ所以ナリト國内ノ實情ハ概ネ此ノ如シ慶應二年丙寅天主教徒ノ虐殺ヨリ延イテ佛國軍艦ノ江華ヲ砲擊シテ其ノ罪ヲ問フアリ明治四年辛未四月米國軍艦ノ德津ヲ砲擊シテ通商ヲ逼ルアリ而シテ鎖國ノ狀態依然タルモノアリテ一モ其ノ要領ヲ得ル能ハス八年乙亥九月江華ノ守兵カ過テ我カ軍艦雲揚ヲ砲擊シルルアリ我ハ問罪ノ使ヲ派シ遂ニ修好條約ヲ締結スルヲ得タルハ實ニ近代朝鮮ノ開國タリシナリ然レトモ其ノ人民ハ頑陋ニシテ四隣ノ情形ニ通セス久シク事大ノ因習ニ拘泥シテ自カラ拔ク能ハス内ニハ朋黨分裂シテ相賊殺シ外ハ露ニ依リ米ニ附キ以テ一時ヲ苟偷シ上下定志アルコトナシ其ノ國家ノ存立ハ常ニ東洋禍亂ノ淵源ヲ為シタルコト實ニ偶然ニハアラサルナリ明治十五年壬午太王ノ生父大院君ハ訓局ノ軍卒ヲ使嗾シ亂ヲ作シテ宮中ニ闖入シ王后閔氏ハ脫シテ忠州ノ地ニ逃カシ以テ免ルヽヲ得タルモ清國ハ屬國ノ内亂ヲ鎮撫スト稱シテ軍艦ヲ派送シ大院君ヲ誘致シテ之ヲ保定ニ抑留シタルハ清國カ朝鮮ノ内治ニ干渉シタルモノニシテ典禮交際ノ論ニハ非ラス十七

年甲申亂兵再ヒ起テ宮中ニ闖入シ太王ハ北廟ニ離次シ尋テ清將袁世凱ノ營舍ニ離次スルコト數日ニシテ還宮シタルハ一ノ事變ニシテ清國駐兵ノ結果ハ日清兩國ニ違言アリ延イテ二十七年甲午日清兵ヲ疆内ニ構フルニ至リ清國ハ一敗シテ賑ハス尋テ北隣露國カ南侵ノ勢ハ抑止スル能ハサルモノアリ二十八年乙未十月八日亂兵入闕シテ王后ハ戕殺セラレ翌年丙申二月十一日太王ハ身ヲ脫シテ露國公使館ニ遁入シテ其ノ庇護ニ依ルニ至リテハ國其ノ國ニアラサルナリ

而シテ宮掖ノ變ハ每ニ王位ヲ覬覦スルモノノ存スルニ因リ王家ハ其ノ安全康寧ヲ保スル能ハス其ノ犯人カ亡命シテ海外ニ遁ルルニ當リ太王ハ屢々捕捉ノ令ヲ發シ往々刺客ヲ放テ之ヲ戕殺シ宰執司憲堂ノ官ヨリ儒生山林ノ上疏スルモノニ至ルマテ國母ノ讐ヲ復スルヲ以テ快ト為ス悖亂極レリ金玉均ヲ上海ニ賊殺シ朴泳孝ヲ東京ニ襲擊スルモノ皆是ナリ而シテ太王ハ誅求苛斂以テ民怨ノ府タルヲ顧ミス三十七年二月議定書ヲ以テ王家ノ安全康寧ヲ保障シ翌年十一月協約ヲ以テ二タヒ之レカ安寧尊嚴ヲ保證シ韓國ヲ以テ我ノ保護國ト為シ統監府ヲ設ケテ以テ國政ヲ監スルニ至ル然ルニ四十年七月太王ハ密使ヲ海牙ノ萬國平和會議ニ派送シテ事發覺シ遂ニ其ノ位ヲ保ツ能ハスシテ遜位ニ至レリ本節ノ記載三十八年ニ迄リ同年十一月日韓協約ノ成立ハ

別ニ一節ヲ成ス

明治八年乙亥（即祚十二年開國四百八十四年西洋紀元一千八百七十五年）

九月二十日○陽曆江華ノ守兵我カ軍艦雲揚ヲ砲擊ス艦長井上良馨

十二月十九日○陽曆理事官廣津弘信ヨリ明年一月中旬○朝鮮ノ本年十二月十五日ヨリ二十日ニ至ル ヲ以テ特命全權辯理大臣ヲ派遣シ査問スヘキコトヲ豫告ス

明治九年丙子（即祚十三年開國四百八十五年西洋紀元一千八百七十六年）

一月十五日○陽曆我カ使節ハ釜山ニ入リ人ヲシテ其ノ由ヲ告ケシメ二月十日○陽曆江華ニ上陸ス

二月初二日○陽曆二月二十六日舊好ヲ重修シ新約ヲ議立ス

四月日修信使禮曹參議金綺秀ヲ特派シテ回謝セシム

六月初一日修信使復命ス

初九日理事官宮本小一ノ船通津府前洋ニ來泊ス

十二日修政堂ニテ日本理事官ヲ召見ス

明治十一年戊寅（即祝十五年開國四百八十七年 西洋紀元一千八百七十八年）

五月十二日大妃（哲宗王ノ妃）ノ訃ヲ告ク

八月十二日（陽曆）外務卿ヨリ弔慰ス

十月二十四日（陽曆）外務卿ヨリ理公使花房義質ヲシテ戊寅六月日ノ致書中ニ上國字樣アリ且ツ擡頭書法ヲ用ヰタルヲ以テ名禮ヲ紊蔑スルモノトシ詰ヲ致シ且ツ其ノ書ヲ却回セレム○禮曹判書ヨリ朝鮮ハ中原ノ屬國ニシテ凡テノ公文ニシテ事ノ上國ニ係ルトキハ上國ト稱シ上國ヲ尊テ擡頭標書スルトモ貴國ニ在リテハ斷シテ一毫ノ嫌礙ナク自主之邦ノ四字ハ貴使カ約條ニ書セシ所ニシテ獘邦ノ自稱セルモノニアラスト回答ス

(按)帝國ノ支那ニ對スル外交ハ明治四年辛未七月二十九日修交條規ヲ定メテ其ノ自主權ヲ公認シタルニ始マリ十五年壬午ノ事變アルニ及ビ支那ハ朝鮮ノ内治ニ干渉シ再ビ十七年甲申ノ事變アルニ及ビ翌年四月天津條約ヲ以テ支那ハ撤兵ヲ約シタルモ毎ニ朝鮮ヲ屬邦ト称シ陰ニ陽ニ其ノ内治ニ干渉シ其ノ東學ノ亂アルニ及ビテハ口ヲ屬邦ノ極難ニ藉リ朝鮮ニ出兵シ又タ大兵ヲ發シテ我カ軍艦ヲ豊島沖ニ要擊シタリ是ニ於テ我カ國ハ宣戰ヲ布告シ遂ニ清國ヲシテ朝鮮國ノ自主ヲ公認セシムルニ至レルモノ實ニ二十七八年戰役ノ顛末ニシテ清國カ貢獻典禮ノ末節ニ拘泥シ朝鮮ヲ屬國視シタルニ因ルト雖モ抑モ朝鮮ノ靡弱振ハスシテ到底列國ノ間ニ伍スルニ足ラサルニ因ルコト是ノ回答ノ文ノ如キモノアルナリ

明治十二年乙卯 即祝十六年開國四百八十八年西洋紀元一千八百七十九年

閏三月十二日東萊府使尹致和ヨリ火輪船ニ問情ヲ以テ馳啓ス○狀啓ニハ本月初三日釜山ノ僉使趙承顯ヨリノ馳通内ニ両帆火輪船一隻黑巖ノ前洋ニ到リテ下碇シ初四日碇ヲ舉ケテ倭館水門外ニ泊セリ譯學劉光杓ノ手本内ニ即往レテ問情シタルニ云々艦長海軍少佐青木住真ノ言内ニ去月二十五日東京ヲ離發シ今日館所ニ到泊スト代理公使花房義質ノ言内ニ政府ノ指揮ニ因リ前到セル守護兵船一隻ト與ニ貴國ニ向往シ全羅道錦江及ヒ忠清京畿ノ海灣測水後ニ議定次ニテノ江華ニ由リ貴京城ニ向フ計料シテ抵到スルノ期ハ今月念間ニ在ル

ニ似タリ云々ト為スト○隨員外務權少書記官近藤真鋤
八等屬三阪邦寧　外務四等屬奥義制五等屬石幡貞

二十一日已例ヲ參酌シテ護軍洪祐昌ヲ伴接官トシテ差下スルコトヲ命ス

四月初一日刑曹參判洪佑昌既ニ伴接ノ任ヲ帶フルニツキ廟謨ニ參聞セサルヘカラストシ議政府堂上トシテ差下スルコトヲ命ス

十五日伴接官洪祐昌ヨリ日本外務大丞一行中隨員四人護衛兵八名公使從者二名館所ニ入來セルコトヲ以テ啓ス

二十四日伴接官ヨリ日本外務大丞花房義質及ヒ隨員十五人護衛兵十五名從者四名今日申時○午後四時館所ニ入來セルコトヲ以テ啓ス

二十七日伴接官ヨリ花房義質カ書契呈納次ニテ禮曹ニ入去セルコトヲ以テ啓ス

五月初七日伴接官ヨリ花房義質カ仁川所留ノ船ニ出去セルコトヲ以テ啓ス

初九日伴接官ヨリ花房義質カ館所ニ還來セルコトヲ以テ啓ス

十五日慶尚監司李根弼ヨリ火輪船ノ問情ヲ以テ馳啓ス○狀啓ニハ四月二十九日未時火輪船一隻黑巖前洋ニ下碇シ當日卯時ニ領泊ヲ舉碇セリ問情シタルニ艦長海軍少佐杉威道ノ言内ニ釜山港ニ守護ノ兵船ナカルヘカラス且ツ公使ノ發船已ニ久シキニ未タ信息ヲ聞カス事實ヲ探スル為メ外務省ノ指揮ニ因リ今月

二十五日東京ヨリ離發シ今日卯時此處ニ到泊セリト云フ云々ト為スト

二十三日議政府ヨリ啓言スラク日本公使ハ設港ノ事ヲ以テ前來ヨリ云々故ニ會座爛商シタル諸議詢同ナリ德源○今元山ヲ以テ許施セント之ヲ允ス

七月十五日伴接官洪祐昌ヨリ日本公使花房義質ハ議政府ノ相接ニ因リ議政府ニ入去シ廟堂ニテ相議ノ後回書契ヲ受ケ隨員護衛兵ヲ從率シテ禮曹ニ進去ス書契ヲ禮曹ニ受ケタル後伴接官禮曹三堂ト公使及ビ隨員五人通辯一人ト仍テ上船茶啖ヲ行フ無事ニ役行ヲ設ケタル後館所ニ還歸セリト啓ス

十七日伴接官ヨリ日本公使花房義質隨員六人從者一人護衛兵十三名ヲ率テ今日巳時離發セルコトヲ以テ啓ス

明治十五年庚辰 即祐十七年開國四百八十九年 西洋紀元一千八百八十年

二月二十三日政アリ金弘集ヲ修信使ト為ス

二十六日禮曹ヨリ修信使ノ起程日時推擇ヲ以テ啓ス○起程ハ來五月二十八日乘船ハ六月二十五日午時

八月二十八日回還セル修信使金弘集ヲ召見ス○復命セルナリ

十一月十六日伴接官ヨリ日本辨理公使花房義質隨員等ヲ從ヘ今日戌時館所ニ入來セルコトヲ啓ス

二十六日庚寅○陽十二月日本辨理公使花房義質ヲ重熙堂ニ召見ス國書ノ進呈ノタメナリ

○國書ニハ曩ニ兩國ノ交誼ヲ敦ウシ當行事

務ヲ商ル為メ代理公使花房義質ヲ簡派
セリ義質ハ貴國ニ往来スルコトヒニ年所アリ
能ク両國ノ好ミヲ賛ス朕之ヲ器重ス乃チ辦
理公使ニ陞任シ貴國京城ニ駐劄シ以テ交渉事
宜ヲ掌辨セシム義質人ト為リ忠篤精敏ニシ
テ黽勉事ニ従ヘリ朕克ク其ノ任ニ堪フルヲ知
ル冀クハ大王幸ニ寵眷ヲ垂レ時ニ謁見ヲ賜ヘ
朕ノ陳述ヲ命シタル所ハ善ク聽納スルコトヲ
為シ以テ其ノ職ヲ盡クサンコトヲ茲ニ大王ノ
多福ヲ祈ルト
是ノ日伴接官ヨリ日本公使ハ政府接見シ禮
曹宴享シタル後館所ニ還歸セルコトヲ以テ
啓ス

十二月二十二日統理機務衙門ノ總理大臣ハ領議政
之ヲ為セト命ス○領議政ハ李最應ナリ○教シテ曰京畿ノ監
司金輔鉉知事閔謙鎬上護軍金炳德尹滋悳
趙寧夏大護軍鄭範朝申正熙行護軍閔泳翊
同敦寧李載兢禮曹參判金弘集ハ並ニ統理
機務衙門堂上トシテ差下ス

明治十四年辛巳（即祝十八年開國四百九十年 西洋紀元一千八百八十一年）

五月十三日伴接官ヨリ日本公使花房義質ハ議政府ト統理機務衙門堂上トニ相接シ禮曹ニテ宴享シタル後館所ニ還歸シタルコトヲ以テ啓ス○翌十四日辰時公使ハ館員四人ヲ率ヰテ離發シ隨員八人ハ仍ホ館所ニ留マル○伴接官ノ啓ナリ○十九日發船

八月初七日信使趙秉鎬從事官李祖淵ヲシテ商辨交渉事宜ヲ以テ國書ニ回答セシム

明治十五年壬午 即祝十九年開國四百九十一年 西洋紀元一千八百八十二年

四月初六日〇陽曆五月二十三日 韓米修交通商條約ヲ締結ス全

權大臣經理統理機務衙門事申櫶全權副官經

理統理機務衙門事金宏集全權大臣水師總

兵薛斐爾

四月十五日日本ノ使節國書ヲ奉呈ス

〇德國公使巴蘭德ハ兵船ニ乘レテ仁川港ニ來泊

ス越テ二日馬道臺丁提督來リ會ス仍テ趙寧

夏金宏集ヲ差レテ全權大副官ト為シ五月

十五日ニ於テ巴蘭德ニ面同シ修好通好條規十

四款ヲ講定シ押ヲ鈐シ憑信トシ條約照會等ノ

各稿ヲ將テ庸テ備サニ轉奏スルコトノ緣由ヲ清

國禮部及ヒ北洋大臣衙門ニ咨報ス

○北洋大臣ヨリ咨スラク查スル二貴國ハ東西洋各國ト通商ス換約スルコト前ニ在リ交渉ノ機宜ニハ必ス須ラク人ヲ得テ導助スヘキナリ既ニ貴國王ヨリ賢明錬達ノ士ヲ代聘センコトヲ商請スルコトヲ經タリ前ノ駐津○天津德國領事官穆麟德ヲ代テ延聘スルコトヽ為シ前往シテ關務ヲ襄助セシム須ラク華員ノ伴往シテ聯絡商辦スルモノアルヘキヲモテ中書馬建常ヲ俟選シ亦タ前往セシム云々即チ以テ引見シ數次贊畫セシメヨ多ト為スト

ノ縁由ヲ咨覆スト

六月九日○陽曆九月二十三日訓局ノ軍卒亂ヲ作シテ宮中ニ闖入シ閔謙鎬等ヲ戒殺シ尋テ日本公使館ヲ襲フテ之ヲ毀チ其ノ兵卒ヲ殺傷ス

八月十日○陽曆清國ハ水師提督丁汝昌ヲシテ軍艦三隻ヲ率キ特派使節馬建忠ト共ニ仁川ニ入港シ二十六日○陽曆大院君ヲ誘フテ南陽灣ヨリ軍艦ニ搭シ直ニ北京ニ送リ保定府ニ柳留セシム且ツ本年六月ノ變ニ國太公○王ノ生父ニシテ即チ大院君ナリ實ニ其ノ事ヲ知ル入朝シテ親シク事情ヲ問ヒ一ニ罪人ヲ得ルノトキヲ俟テ更ニ天討ノ威ヲ申ネン云々ト榜示ス

八月十二日○陽曆海軍少將仁禮景之ハ軍艦三隻ヲ率キテ仁川ニ入港シ十六日○陽曆辨理公使花房義質ハ護衛兵ヲ率キテ入京シ七月十七日

○陽暦八月三十日全權大臣李裕元全權副大臣金宏集ト六條ヲ約ス二十日内ヲ期シ兇徒ヲ捕獲シ渠魁ヲ嚴究シ重ク懲辨スルコト遭害者ノ遺族等ヲ體恤スルコト損害及ビ兵費ノ内ヘ五十萬圓塡補ノコト公使館ノ兵備並ニ謝書ヲ修スルコト云々

明治十六年癸未即祝千年開國四百九十二年西洋紀元一千八百八十三年

○米國公使福德來リテ上年訂スル所ノ條約ノ批准交換ヲ行ヒ仍テ京城ニ駐マリテ辨事スルコトヲ清國禮部及ビ北洋大臣衙門ニ咨會ス

○協辨交涉通商事務閔泳翊ヲ全權辨理大臣ト為シ米國ニ派遣スルコトヲ清國禮部及ビ北洋大臣衙門總理衙門ニ咨報ス

○清國北洋大臣衙門及ビ總理衙門ヨリ咨スラク查スルニ上年朝鮮國ト美國ト訂スル所ノ條約ニ中國光緒某年月日ヲ註明セリ此ノ次ノ補訂專條ニハ未タ中國ノ年月ノ書寫スルヲ經セス原約ノ辨法ト符セサルナリ嗣後ハ何國ト辨理スルニ論ナク交涉ノ文件ニハ仍ホ應

サニ中國ノ年月日ヲ註明シ以テ體明ニ符スヘ
レト云々ト○咨覆スルコト例ノ如クス
十月二十七日○陽曆十一月二十六日韓英修好通商條約ヲ締
結ス特簡全權大臣閔泳穆同巴夏禮○パークスノ
漢字名同日韓獨修好通商條約ノ締結ス特簡
全權大臣閔泳穆同駐劄日本横濱總領事
官撫貝○ザッペ

明治十七年甲申即祝二千一年開國四百九十二年西洋紀元一千八百八十四年
○英國公使巴夏禮ハ其ノ國書ヲ賫シテ京城ニ
来到シ督辨交渉通商事務金炳始ト上年
訂スル所ノ條約ノ批准ヲ互換ス該使臣ハ仍テ
京城ニ駐ス○咨會スルコト例ノ如クス
○德國○独逸總領事曾額德ハ其ノ國書ヲ賫シ
テ京城ニ来到シ督辨交渉通商事務金宏集
ト上年訂スル所ノ條約ノ批准ヲ互換ス該使臣
ハ仍テ京城ニ駐ス○咨會スルコト例ノ如クス
閏五月初四日○陽曆六月二十六日韓伊修好通商條約ヲ締結ス
特簡全權大臣金炳始同盧嘉德○清國禮部
及ヒ北洋大臣衙門總理衙門ニ咨會ス
○俄羅斯○露西亞國全權大臣韋貝来リテ條約ヲ

議立センコトヲ要トム全權大臣金炳始ハ閏五月十五日ニ於テ該使臣ニ面同シ例ノ如ク訂定セルコトノ緣由モテ清國禮部及ヒ北洋大臣衙門總理衙門ニ咨會ス

十月十七日○陽十二月四日夜郵政局ノ○典洞今公平洞開場ノ宴アリ英國總領事アストン米國公使フート獨逸人モルレンドルフ等皆至ル閔泳翊朴泳孝金玉均等亦タ皆在リ獨リ我カ公使○竹添進一郎疾アリテ往カス宴酣ニシテ門内騷然タリ叫テ曰ク火起レリト閔泳翊起テ門ニ至ル人アリ之ヲ刺ス殊セス泳孝玉均等馳セテ王宮ニ至ル既ニシテ火二ケ所ヨリ起リ宮中ニモ亦タ爆彈ヲ投スルモノアリ城内紛擾甚シ太王大ニ驚キ北廟ニ移次ス

王均等太王ニ勸メテ人ヲシテ我カ公使竹添進一郎ニ援兵ヲ請ハシム公使輙スク應セス使者遂ニ太王ノ手書ヲ賫シテ至ルニ及ンテ乃チ兵ヲ率ヰテ入見ス時ニ夜十時ナリ宮中既ニ悉ク開化派ノ占ムル所ナリ洪英植李載元ハ議政タリ朴泳孝金玉均ハ承旨タリ是ノ夜事大派ノ戕殺セラルヽモノ曰ク閔泳穆閔台鎬趙寧夏韓圭稷李祖淵尹泰駿

是ノ月十八日○陽十二月五日公使尚ホ宮中ヲ護ル米國公使英國領事等相踵テ入見ス太王頻リニ公使ノ盡力ヲ謝ス公使ハ米國公使等ト共ニ退カントヲ請フ太王許サス

是ノ月十九日○陽十二月六日清將袁世凱書ヲ公使ニ贈リ

兵ヲ率ヰテ自ラ王宮ニ入ラント欲ス公使書ヲ獲テ未タ開クニ及ハス午後三時清兵進テ王宮ニ迫ル王宮ノ韓兵亦タ之ニ應ス其ノ數數千人我カ兵ヲ射撃シ攻撃頗ル急ナリ我カ兵僅ニ一中隊ノミ力戰能ク拒キ多ク敵ヲ斃ス既ニシテ清兵火ヲ宮闕ニ放ツ焔烟天ニ漲リ砲聲地ヲ震フ太王ハ後苑ニ在リ公使之ニス太王懼ルル事甚シ既ニシテ王大妃ハ清兵ノ捕フル所トナル太王往テ死生ヲ俱ニセント欲ス左右固ク諫ムレトモ聽カス既ニシテ彈丸飛テ太王ノ處ニ至ル公使止ムヲ得ス太王ニ別レ辭シテ宮ヲ出テ我カ公使館ニ還ル是ノ夜遂ニ館ヲ棄テヽ仁川ニ退ク此ノ變ニ清兵韓兵ト相合シテ我カ官民ヲ殺戮ス磯林大尉以下官民ノ害ニ遭フモノ三十餘名公使カ王宮ヲ去リテヨリ後清兵宮ヲ守リ洪英植ハ殺サレ金集代テ領議政タリ開化派ノ徒ハ四方ニ奔竄ス清兵等追跡スルコト甚タ急ナリ

十一月六日〇陽十二月二十二日外務卿井上馨ヲ全權公使ト為シ朝鮮ニ派ス十四日〇陽十二月三十日仁川ニ到着ス前二日〇陽十二月二十八日竹添公使ハ仁川ヨリ京城ニ歸リ直ニ朝鮮政府ニ對シテ談判ヲ開始シ事件調査ノ為メ本國ヨリ派送セラレタル議官井上毅モ亦タ井上公使ニ先チテ京城ニ入ル清國使節吳大徵續昌ハ急ニ派セラレテ已ニ京城ニ在リ袁世凱ト協議シ兵ヲ分テ四門ヲ守ラ

シメ暴徒ヲ逮捕シ人心ヲ鎮撫スルヲ名ト為シ奸ヲ戢ムル者ハ上賞ヲ蒙ル悪ニ黨スル者ハ顯戮ヲ受ク順逆ノ境髮ヲ容レスト榜示シ他ノ國家ニ臨ンテ賞罰ノ權ヲ行ハントス

是ノ月十八日○陽翌年一月三日井上公使ハ京城ニ入リ二十一日太王ニ謁シ二十二日談判ヲ開始セリ朝鮮政府ハ金宏集ヲ以テ全權大臣ト為シ我ト會商ス第一回會見トキ提出シタル委任狀中ニ不幸有逆亂之黨日本公使誤聽其謀進退失據事起匆卒均非逆料云々ノ語アリ我ハ一見シテ之ヲ斥ケ八日更ニ委任狀ヲ改メシメテ商議ヲ開ク我ノ要求スル所頗ル寛大ナリシヲ以テ一日ニシテ議ヲ纏ムルヲ得タリ

是ノ月二十四日○陽翌年一月九日約款五條ニ調印ス特派全權大臣伯爵井上馨同金宏集朝鮮國國書ヲ修メテ日本國ニ對シ謝意ヲ表スルコト遭害人民ノ遺族ヲ恤救シ及ヒ商民貨物ノ毀損掠奪セラレタルモノヲ塡補シテ朝鮮國ヨリ十一萬圓ヲ撥支スルコト磯林大尉ヲ殺害シタル兇徒ヲ査問拿捕シ重キニ從テ刑ヲ正スコト云々ト

(按)條約文ノ日時ニ開國四百九十三年十一月二十日トアルモノハ二十ノ下ニ四ノ一字ヲ補塡スヘキモノナリ然ラスンハ我カ明治十八年一月九日ニ對當セス

明治十八年乙酉 即祝二十二年開國四百九十四年 西洋紀元一千八百八十五年

三月初四日 ○陽曆四月十八日 天津條約成ル支那ハ朝鮮ニ馳禁スル兵ヲ撤シ日本ハ朝鮮ニ在テ使館ヲ護衛スル兵辨ヲ撤ス云々將來朝鮮國ニ變亂重大ナル事件アリテ派兵ヲ要スルトキハ應ニ行文知照スヘシ云々ト

明治十九年丙戌（即祝二十三年開國四百九十五年 西洋紀元一千八百八十六年）

五月初三日（初四日）○陽曆六月韓佛修交通商條約ヲ締結ス

特ニ特簡大臣金晩植德尼（ニー）○デン大法國特簡

欽差出使朝鮮全權大臣戈可當（ルダン）○コゴ○清

國ニ咨會スルト例ノ如クス

明治二十三年庚寅即祝二十七年開國四百九十九年
西洋紀元一千八百九十年

七月督辨交渉通商事務趙秉式ヲ派シ俄羅斯國
公使大臣韋貝ト韓俄陸路通商條約ヲ訂立ス

明治二十五年壬辰（即祐二十九年開國五百一年西洋紀元一千八百九十二年）

五月二十九日○陽六月二十三日 韓墺修交通商條約ヲ締結ス

特派全權大臣權在衡同洛慈特畢格勒本○ロー（ゲルド）

ビーゲレー（ベン）

明治二十七年甲午即祝三十一年開國五百三年西洋紀元一千八百九十四年

六月二十一日○陽曆七月二十三日 合同條約ヲ暫定ス特命全權

公使大鳥圭介外部大臣金允植

八月一日日本帝國ハ清國ニ對シ宣戰ス

明治二十八年乙未即祝三十二年開國五百四年光緒二十一年西洋紀元一千八百九十五年

三月二十三日〇陽曆四月十七日　日清媾和條約成ル清國ハ朝鮮國ノ獨立自由ノ國タルコトヲ確認シ因テ右獨立自由ノ損害スヘキ朝鮮國ヨリ清國ニ對スル貢獻典禮等ヲ廢止ス〇四月十四日〇陽曆五月八日芝罘ニ於テ條約ヲ交換ス

明治三十二年乙亥（光武三年 西洋紀元一千八百九十九年）

九月十一日（陰八月初七日）韓清通商條約ヲ締結ス特命議約大臣朴齊純欽差議約大臣徐壽明ハ十二月十四日（陰十一月十二日）右條約ヲ批准交換ス

明治三十四年辛丑光武五年
西洋紀元一千九百一年
三月二十三日韓白修交通商條約ヲ締結ス特簡全
權大臣朴齊純同方葛〇レオンウイン
カルノ漢字名

明治三十五年壬寅 光武六年 西洋紀元一千九百二年

七月十五日 韓丁修好通商條約ヲ締結ス 特簡全權

大臣俞箕煥同巴禹路厚

明治三十七年甲辰（光武八年 西洋紀元一千九百四年）

二月十日日本帝國ハ露國ニ對シテ宣戰ス

二月二十三日日韓議定書六條ヲ協定ス特命全權公使林權助外務大臣臨時署理陸軍參　李址鎔

其ノ第二條ニ曰ク大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ確實ナル親誼ヲ以テ安全康寧ナラシムル事等三條ニ曰ク第三國ノ侵害ニ依リ若ハ内亂ノ為大韓帝國ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機必要ノ措置ヲ取ルヘシ而シテ大韓帝國政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナラシムル為十分便宜ヲ與フル事大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル為軍略上必要ノ地點ヲ臨機收用スル事

五月十八日日韓露條約ノ廢棄ヲ宣言ス

八月二十二日日韓協約三項ヲ約ス事ハ財政外交ノ顧問並ニ重要ナル外交案件ノ處理ニ關シテハ豫メ日本政府ト協議スルニ在リ一般外交ノ處理ニ關シテ詳言スル所ナシ

第四節　乙巳協約

資料　第五類第一種第一號乃至三〇號第十二類第二種日省録ノ三第一號乃至一九五號參照

(按)明治三十七年甲辰二月七日日露開戰シテ兵ヲ滿洲ノ野ニ交フルヤ韓國ハ領土ノ危險アルヲ免カレス是ニ於テ二月二十六日議定書六條ヲ約シテ我ハ韓國ノ獨立及ヒ領土ノ保全ヲ保證シ其ノ第二條ニ於テ特ニ韓國ノ皇室ヲ安全康寧ナラシムルコトヲ協定シタリ而シテ翌年九月五日日露ノ國交回復シテ露國カ我ニ約スルニ韓國ノ軍事上經濟上ニ干渉セサルコトヲ以テスルニ及ヒ十一月十七日我ハ韓國政府ト協約五條ヲ約定シ其ノ外交權ヲ收メタリ所謂保護政治ナル

モノニシテ再ヒ皇室ノ安寧尊嚴ヲ維持スルコトヲ保證シタリ是レ王家カ韓國ノ君權ヲ讓與シタル後ニ於テ猶ホ其ノ宗祀ヲ奉シテ王公ノ位列ヲ有スルヲ得タル所以ニシテ此ノ百世不渝ノ好誼ハ我カ皇家ノ寶祚無窮ナルト供ニ永ニ繼續スルモノナルヘシ

明治四十年七月太王カ密使ヲ海牙ノ萬國會議ニ派送シタルハ協約侵損ノ行為タルモノニシテ事ノ發覺スルヤ太王ハ皇帝ノ位ヲ退キタリ事ハ總説ノ記載ニ讓ル

明治三十八年乙巳（光武九年即祚四十一年西洋紀元一千九百五年）九月五日日露媾和條約成ル露國政府ハ日本帝國カ韓國ニ於テ政事上軍事上及ヒ經濟上卓絶ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ日本帝國政府カ韓國ニ於テ必要ト認ムル指導保護及ヒ監理ノ措置ヲ執ルニ方リ阻礙又ハ干渉セサルコトヲ約ス

十一月十七日日韓協約五條ノ約ニ調印ス日露媾和
並ニ日英協約ニ因リテ成レルナリ〇日露媾和條
約第二條ニ曰ク露西亜帝國政府ハ日本國カ韓國
ニ於テ政事上軍事上及經濟上ノ卓越ナル利益ヲ
有スルコトヲ承認シ日本帝國政府カ韓國ニ於テ
必要ト認ムル指導保護及監理ノ措置ヲ執ルニ
方リ之ヲ阻礙シ又ハ干渉セサルコトヲ約ス韓國
ニ於ケル露西亜國臣民ハ他ノ外國ノ臣民又ハ人
民ト全然同樣ニ待遇セラルヘク之ヲ換言スレハ
最惠國ノ臣民又ハ人民ト同一ノ地位ニ置カルヘキ
モノト知ルヘシ兩締約國ハ一切誤解ノ原因ヲ避
ケムカ為露韓間ノ國境ニ於テ露西亜國又ハ韓
國ノ領土ノ安全ヲ侵迫スルコトアルヘキ何等ノ軍

事上措置ヲ執ラサルコトニ同意スO日英協約第三條文ハ畧ス

日韓協約ニ曰ク日本國政府及韓國政府ハ両帝國ヲ結合スル利害共通ノ主義ヲ鞏固ナラシメムコトヲ欲シ韓國ノ富強ノ實ヲ認ムル時ニ至ル迄此目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一條日本國政府ハ在東京外務省ニ由リ今後韓國ノ外國ニ對スル關係及事務ヲ監理指揮スヘク日本國ノ外交代表者及領事ハ外國ニ於ケル韓國ノ臣民及利益ヲスヘシ

第二條日本國政府ハ韓國ト他國トノ間ニ現存スル條約ノ實行ヲ全フスルノ任ニ當リ韓國政府ハ今後日本國政府ノ仲介ニ由ラスシテ國際的性質ヲ有スル何等ノ條約若ハ約束ヲナササルコトヲ約ス

第三條日本國政府ハ其代表者トシテ韓國皇帝陛下ノ闕下ニ一名ノ統監(レジデントゼネラル)ヲ置ク統監ハ專ラ外交ニ關スル事項ヲ監理スル為京城ニ駐在シ親シク韓國皇帝陛下ニ内謁スルノ權利ヲ有ス

日本國政府ハ又韓國ノ各開港場及其他日本國政府ノ必要ト認ムル地ニ理事官(レジデント)ヲ置クノ權利ヲ有ス理事官ハ統監指揮ノ下ニ從來在韓國日本領事ニ屬シタル一切ノ職權ヲ執行シ並本協約ノ條款ヲ完全ニ實行スル為必要トスヘキ一切ノ事務ヲ管理スヘシ

第四條日本國ト韓國トノ間ニ現存スル條約及

約束ハ本快約ノ條款ニ抵觸セサル限リ總テ其効力ヲ繼續スルモノトス

第五條 日本國政府ハ韓國皇室ノ安寧ト尊嚴ヲ維持スルコトヲ保證ス

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ本快約ニ記名調印スルモノナリ

明治三十八年十一月十七日 特命全權公使 林權助

光武九年十一月十七日 外部大臣 朴齊純

是ノ日詔シテ曰ク議政府參政大臣韓圭卨ハ宮禁ニ足尺シ舉措失當ナリ當ニ先ツ本官ヲ免スルコトヲ為スヘシト其ノ官ヲ免ス

(按)韓圭卨ノ宮禁ニ足尺シ舉措失當ノ事實ハ十二月十六日五大臣ノ疏中ニ詳ナリ

是ノ日閔泳詰ヲ以テ參政大臣ト為ス

是ノ月十八日法部大臣李夏榮農商工大臣權重顯陳疏シテ自刻ス批ヲ賜フ

是ノ月二十三日原任大臣趙秉世ヲ漱玉軒ニ召見ス

請對ナリ秉世曰ク云々闕内ニ事アリ冒死シテ上來ス言說モテ盡達スル能ハサルモノアリ故ニ謹テ袖劄ヲ具シテ以テ奏セン日使ハ五件ノ事ヲ以テ條約ヲ要請ス而シテ皆國家存亡ノ機ニ關ス故ニ威嚇迫脅ノ中ト雖モ聖意ハ則チ確然不撓ナリ而シテ政府ノ諸臣ハ敢テ自ラ私ニ相可否シ調印ノ舉アルニ至ル古今天下豈ニ許ノ如キ無前ノ變アランヤ天下ハ天下ノ天下ニシテ一人一家ノ私有ニ非ス故ニ國ニ大事アレハ人主ノ尊ト雖モ上ニ獨斷

スルヲ得ス云々即チ詔勅ヲ下シテ該議案ハ即
チ繳還スルコトヲ為セ云々詔勅書下ノ前ハ臣以テ
退去スルコト無ケン未タ處分ヲ蒙ラスンハ則チ臣
寧ロ天階ノ下ニ破首シテ死セン臣ノ義生テ闕外
ニ出ツルニ忍ヒサルナリ伏シテ願クハ亟ニ處分ヲ降
シ以テ五百年宗社ノ基業ヲ存セヨト
太王曰ク惟卿懇眷忠愛安クンソ然ラサルヲ得
ン向日ノ事ハ果シテ猝遽ニ在リ亦タ豈ニ雍容方
便ノ道ナカランヤ夜氣甚寒ナリ實ニ奉慮スル所ナ
リ望ムラクハ卿即為退去シテ以テ朕カ心命ヲ安
セヨ大臣就座セヨト又命シテ退カレム

是ノ月二十四日大醫院卿李根命ヲ漱玉軒ニ召見ス入
診ナリ太王曰ク云々根命曰ク臣ハ懲討ノ事ヲ以テ
已ニ面奏劄陳ヲ為シタリ而シテ五百年ノ疆土三
千里ノ生靈之ヲ此ノ輩ノ手ニ付シテ以テ他人ニ與
フ此レ天下萬古未タ有ラサルノ一大變ナリ草
疏日ニ積ミ輿情沸騰ナリ伏シテ願クハ亟ニ處分ヲ
降シ分明ニ典刑ヲ正シ以テ神人ノ憤ヲ洩シ所謂
調印ノ約疑ハ往復繳還ニ期セント太王曰ク騷
擾中自ラ此ノ如キニ至レリ亦タ豈ニ方便ノ之ヲ為
スノ道ナカランヤト命シテ座ニ就カシム又命シテ
退カレム

是ノ月二十五日農商工部大臣權重顯陳疏シテ自明
ス賜批ス○養成所教官丁明燮等陳疏シテ事

ヲ言フ批ヲ賜フ

是ノ月二十七日草莽臣崔在鶴陳疏シテ事ヲ言フ

ス批ヲ賜フ

是ノ月二十八日詔シテ曰ク言フ所ノ者ハ寔ニ大同ノ公義ニ出ツ連章屢牘何ソ道理ナキヲ患ヘン而シテ闕中ニ仍留スルモノ亦タ既ニ信宿ナリ此レ國朝以来未タ有ラサル所ノ駭舉ナリ屢次申諭シタルモ尚ホ退去セス是レ臣分ニ在リテ寧ソ是ノ如クナルヘケン疏首以下ハ並ニ法部ヲシテ拘拿懲辨セシメヨト陳疏ノ諸臣ヲ拿ス

是ノ日詔シテ朴齊純ヲ以テ議政府叅政大臣ト為ス

是ノ月二十九日前叅政崔益鉉ハ縣道ヨリ陳疏シテ事ヲ言フス批ヲ賜フ

是ノ日法部ヨリ奏スラク詔勅ヲ欽奉シテ疏首以下行々將ニ拿致セントスルノ際該閔泳煥等ハ業既ニ命ヲ平理院ニ待テリトノコトヲ以テス批スルニ事體ヲ存シテ然ルナリ並ニ即為分揀セヨトノコトヲ以テス

是ノ月三十日卒セル陸軍副將閔泳煥ニ隱卒ノ典ヲ施ス○從一品韓圭卨ハ懲戒ヲ特免ス

十二月一日閔泳煥ヲ大勲ニ贈叙ス○卒セル特進官趙秉世ニ隱卒ノ典ヲ施ス

是ノ月二日趙秉世ヲ大勲ノ位ニ贈叙ス○從一品李容植ヨリ疏陳シテ領敦寧趙秉世ノ遺疏ヲ繳進ス批ヲ賜フ

是ノ月四日卒セル學部主事李相哲ニ隱卒ノ典ヲ施

ス○卒セル上等兵金奉學ニ隱卒ノ典ヲ施ス

是ノ月七日草莽臣田愚ヨリ陳疏シテ事ヲ言フス

批ヲ賜フ

是ノ月十六日議政大臣署理學部大臣李完用參政大臣朴齊純内部大臣李址鎔農商工部大臣權重顯軍部大臣李根澤等五人ヨリ陳疏シテ自明ス批ヲ賜フ

疏ノ略ニ曰ク締約ノ顛末ヲ言ヘハ則チ日本大使伊藤博文ノ来京セルヤ兒童走卒モ皆其ノ必ス大問題アルヲ知レリ果シテ十一月十五日再次ノ陛見ノ後ニ於テ非常事案ヲ提出セリ陛下ハ即チ裁断セスシテ之ヲ政府ニ委セリ

翌十六日參政大臣韓圭卨度支部大臣閔泳綺法部大臣李夏榮及臣址鎔重顯完用根澤ハ大使ノ函請ニ因リテ往テ該寓館ニ會セリ而シテ經理院卿沈相薫モ亦タ座ニ在リ朴齊純駐使林權助ノ函請ニ因リテ獨リ該駐館ニ往キ具サニ昨日提出ノ件ヲ以テ反覆問荅セリ

臣等ハ畢境之ニ示スニ斷シテ許スヘカラサルノ意ヲ以テシ侵夜罷歸シ召ヲ承ケテ進對シ問荅ノ辭ヲ詳奏シ仍テ奏シテ曰ク明日又當ニ日館ニ往會スヘシ若シ其ノ求ムル所カ今日ノ談ヲ繼續セハ則チ臣等亦タ當ニ今日ノ荅フル所ノ如クニシテ之ヲ却クヘキノミト遂ニ退出セリ

翌十七日下午臣等八人ハ齊シク日館ニ會シタルニ果シテ該事件ヲ以テ爭論スルコト一ニア

ラス而シテ重顯ハ則チ以為ラク此ノ事タルヤ
大使ノ天陛ニ奏稟シ及ヒ公使ノ外部ニ照會ス
ルアリト雖モ然レトモ吾儕ハ則チ尚ホ未タ外部
ヨリノ政府ニ提議セルモノニ接セサレハ今直チニ議
決ヲ行ハス且ツ樞院ノ新規ハ已ニ頒セリ必ス廣ク
物議ヲ收メテ始テ決ヲ取ルヘキナリト
日使厲聲シテ曰ク貴國ハ是レ專制政治ナリ何ソ
乃チ立憲ノ規ニ模倣シテ大衆ニ收議センヤ吾ハ大
皇帝ノ君權無限ナルヲ知ル當ニ一言ニシテ親裁ス
ヘシ必スシモ許多ノ握過法ヲ用ヰサルナリ我已ニ
宮内大臣ニ電通シテ直チニ陛見ヲ請ヘリ諸大
臣モ偕ニ宮中ニ進ンテ可ナリト
臣等ハ萬端力拒シタルモ終始從ハス故ニ已ムヲ得
ス期ニ先タチ来リテ政府ノ内直所ニ待テリ日
使モ館員ヲ率ヰテ踵後シテ来リ休憩所ニ待
テリ
少焉ニシテ臣等入對シ各經ル所ヲ陳ス時ニ于テ
ヤ宸襟煩惱シ向後ノ措處ヲ以テ屢詢問ニ勤メ
臣等ハ不可許等ノ語モテ仰荅セルノミ聖教
若カク曰ク然リト雖モ憾情アラシムヘカラス姑ク
之ヲ後ウシテ可ナリト
是ニ於テ完用奏シテ曰ク此ノ事ハ國體ニ關スル
アリ凡ソ陛下ノ廷ニ北面スル者ハ孰レカ敢テ許ス
ヘシト曰ハンヤ弟タ今大使ノ来聘セルハ專ラ是
レカ為メナリ此ノ案ノ發落ハ迫テ眉睫ニ在リテ
君臣ノ間ニテノ問對ニ但タ不可ノ二字ヲ以テ一言

之ヲ蔽ヘリ事體ヲ以テ之ヲ論セハ當ニ得サルニ非サルモ是レ亦タ形式上ニテ做去ルヲ免レ得サルモノナリ臣等ハ個人ノ下ヨリ防塞スルハ果レテ容易ノ事ニ係ル然ルニ今日使ハ固ク進見ヲ請フ若シ聖心廓斷シテ貳スルコト無クンハ則チ誠ニ是レ萬幸ナルモ若シ或ハ寛弘ノ量ヲ以テ已ムヲ得スシテ容許ニ至ル如クンハ則チ之ヲ如何センヤ此等ノ處ハ豫メ先ツ講究セサル得サルナリト是ノ時陛下ハ下教スル所ナク諸大臣モ亦タ含默シテ言ナシ

又奏シテ曰ク豫メ先ツ講究トハ他ニ非ス若シ已ムヲ得スシテ容許ニ至ル如クンハ則チ該約款中ニ就テ亦タ以テ增削改正スヘキモノアリ大關係ノ事項ニ非サルハナシ最モ宜シク趁早商量シ決シテ塲ニ臨テ苟且ニスヘカラサルナリ

聖教若カク曰ク伊藤モ亦タ言ヘリ今此ノ約款ハ若シ句語ヲ添改セント欲セハ則チ當ニ協商ノ道アルヘシ而シテ若シ全然拒絶セント欲セハ則チ隣詛恐クハ保スヘカラスト此ヲ以テ之ヲ推セハ條款ノ内ノ句語ノ變通ハ其ノ望アルニ似タリ學大ノ言ハ甚タ當レリト

重顯奏シテ曰ク今此ノ完用ノ所奏ハ必スシモ之ヲ許シテ後已マント曰フニ非サルナリ要スルニ一ノ設問ノ辭ヲ依シテ餘地ヲ準備セントスルニ過キサルノミナリ

聖教若カク曰ク是レ皆議事ノ規ナリ拘碍スル

所ナキナリ
是ノ於テ諸大臣ノ所奏ハ皆臣重顯ノ所奏ト畧
相彷彿タリ
聖教若カク曰ク然ラハ則チ該約ノ草稿ハ何レ
ノ處ニ在リヤ就中何者カ改ムヘキカト
李夏榮ハ懷中ヨリ日使カ授クル所ノ約草ヲ
出シテ筵中ニ進ム
完用又奏シテ曰ク臣カ愚見ヲ以テスルニ該約
ノ第三條統監ノ下ニ外交ノ二字ヲ明言セサル
ハ是レ後日無窮ノ慮ニシテ且ツ外交權ノ索還
ハ我國ノ實力ノ有無早晩ニ在ルカ為メナリ則
チ今強テ年限ヲ定ムヘカラス然レトモ亦タ當ニ
糢糊ニ過コシ去ルヘカラサルナリト

聖教若カク曰ク然リ朕モ亦タ改ムヘシトスル處ア
リ乃チ題頭中ノ全然自行ノ四個字ハ宜ク抹去ス
ヘキナリ
重顯奏シテ曰ク臣ハ外部ニ在リテ日本皇帝親書
ノ副本ニ毫モ皇室ノ安寧尊嚴ニ損スルナシト曰
フアルヲ見ルヲ得タリ今此ノ約款ハ大ニ國體ニ
關スルモ而カモ曾テ一句ノ此ニ及フモノナシ臣以為
ラク已ムヲ得スシテ若シ添改スルニ至ラハ則チ此レ
亦タ當ニ別ニ一條ヲ作ルヘキナリ
聖教若カク曰ク果シテ然ルナリ農大ノ言ハ誠ニ
好シト
是ニ於テ諸大臣中或ハ聖教ヲ以テ至當ト為スモ
ノアリ或ハ完用ノ議ニ贊成スルモノアリ或ハ重顯

ノ議ニ賛成スルモノアリ而シテ筵奏将ニ終ラントス
ルトキ臣等八人ハ一齊ニ奏シテ曰ク以上ノ所奏寔
ニ講究豫備スンニ過キサルノミ臣等ハ退テ日使ニ
對シテ當ニ之ヲ却クヘカラサルヲ以テスヘキナリト
聖教若カク曰ク然リト雖モ俄者已ニ朕カ志ヲ諭セ
リ好様ニ措處シテ可ナリト
韓圭卨及齊純ノ両人ハ奏シテ曰ク臣等一ハ是レ首
席一ハ是レ主任ナリ敢テ聖教ヲ奉尊セサランヤト
臣等八人ハ一齊ニ退出シ圭卨及ヒ齊純ハ則チ命
ヲ承ケテ還入シ秘密ニ敕ヲ奉クルモノアリ而シテ
須臾ニシテ復タ出テ、倶ニ休憩所ニ會セリ
日使ハ御前會議ハ何クニカ以テ歸決セシヤト問

圭卨答テ曰ク我皇上ハ協商妥辦ノ意ヲ以テ教
アリ而シテ我等八人ハ皆不可ナリトノ意ヲ以テ
覆奏シタリト
公使曰ク貴國ハ是レ專制ノ國ナリ皇上陛下
ノ大權ヲ以テ協商妥辦ノ教アラハ則チ吾此ノ約
ノ順成セルヲ知ル而シテ諸大臣ハ一ニ君命ニ逆フ
ヲ以テ主トスハ何ソヤ此等ノ大臣ハ決シテ之ヲ
廟堂ノ上ニ置ク(カラス)而シテ參政ト外大トハ
尤モ宜シク速免スヘキナリト
圭卨ハ身ヲ起シテ曰ク公使ヨリ既ニ此ノ言ヲ出セ
リ吾ハ晏然參席スヘカラサルナリト諸大臣ハ挽シ
解シテ曰ク公使ノ一言ヲ以テ參政避席セハ則チ
其ノ事體ニ在リテ萬々未穩ナリト圭卨ハ仍テ

復タ座ニ就ケリ頃クアリテ伊藤ハ長谷川軍司令官ト與ニシ憲兵司令官及ヒ軍司令部副官之ニ從フ日使ハ大使ニ對シテ前後ノ事狀ヲ詳說ス大使ハ陛見ヲ要請スルコト數次ニシテ止マス

載克ハ聖旨ヲ回傳シテ曰ク朕已ニ各大臣ニ協商妥辨スルコトヲ許セリ且ツ朕ハ方ニ咽喉ヲ患フ接見スヘカラス須ク好樣ニ協商スヘキナリト

大使仍テ參政ニ開議セント請ヒ先ツ參政ニ問フテ曰ク各大臣ハ但タ御前會議ノ景況ヲ述テ可ナリ我願クハ一聞セン參政ハ何ノ見アリシヤト

圭禹曰ク我ハ但タ否ノ字ヲ以テ上奏セシナリト

大使曰ク何故ニ否ト言フヤ說明ナカルヘカラスト

參政曰ク說明スヘキナシ而シテ只是レ不可ナルノミト

次ニ外大ノ意見ヲ問フ

齊純答テ曰ク此ハ命令ニ非サルナリ乃チ是レ交涉ナレハ則チ可否ナカルヘカラス而シテ我ハ現ニ外交ノ任ヲ帶フ外交移去セハ豈ニ敢テ可ナリト曰ハンヤト

大使曰ク既ニ協商妥辨ノ聖敕アリ則チ豈ニ命令ニ非スヤ外部大臣ハ則チ可ノ邊ナリト

次ニ泳綺ニ問フ

答テ曰ク我ハ則チ否ナリト

問テ曰ク絶對否ナルカト

曰ク然ルナリト

曰ク然ラハ則チ度支部大臣ハ否ノ邊ナリト

次ニ夏榮ニ問フ

答テ曰ク現今字内ノ大勢東洋ノ形便及ヒ大使ノ此次ノ来意ハ知ラサルニハ非サルナリ我國ハ外交ニ善ナル能ハサルカ故ニ貴國ヨリ此ノ干求アリ然ルニ既ニ昨年成ス所ノ議定書協定書アリ今何ソ必スシモ更ニ外交ノ權ヲ移去セント欲スルヤ我カ國體ニ在テハ大ニ關係アリ承諾スヘカラサルナリト

大使曰ク然リト雖モ既ニ大勢形便ヲ知ラハ則チ是レ亦タ可ノ邊タルナリト

答テ曰ク我ハ則チ俄ニ筵中ニ於テ奏達スル所アリ是ノ如ク是ノ如キノミト而シテ終ニ可ナリハ言ハスト

大使曰ク改ム可キ處ハ之ヲ改メハ則チ已マン是モ亦タ可ノ邊ナリト

次ニ重顯ニ問フ

答テ曰ク我ハ則チ筵對ノ時ニ畧々學大ト同意ナリキ又一端別議ノモノアリキ乃チ皇室ノ安寧尊嚴ノ句語ナリ然リ而シテ可否二字ノ間ニハ忠逆ノ辨アリ故ニ參政收議ノ場ニテハ但タ否ノ字ヲ以テ斷セレナリト

大使曰ク皇室ノ尊嚴安寧等ノ字ハ果シテ當ニ添フヘキノ句語ニ係ル是レ亦タ可ノ邊ナリト

次ニ根澤ニ問フ

答テ曰ク我モ亦タ筵中ニテ學大ト同意ナ
リキ而カモ收議ノ場ニハ則チ忠逆ノ分ヲ以テ
言ヲ為シタルコト一ニ農大ノ意ノ如キナリト
大使曰ク然ラハ則チ是モ亦タ可ノ邉ナリト
次ニ址鎔ニ問フ
答テ曰ク我モ亦タ筵中ニ於テ學大ト同意ナ
リキト
大使曰ク是モ亦タ可ノ邉ナリト仍テ載克ヲ
要シテ轉奏シテ曰ク各大臣ニ收議シタルニ則
チ其ノ言論スル所一ニアラサルモ而カモ其ノ實
際ヲ究ムレハ則チ否ノ字ヲ以テ之ヲ斷ス
ヘカラス就中純ハラ否字ヲ言フモノハ惟參政
及ヒ度大ノ二人ノミ乞フラクハ聖旨ヲ主務大

臣ニ降シテ即速調印セヨト
圭卨ハ椅子ニ在坐シテ面ヲ掩ヒ呼矣ノ狀ヲ作ス
大使之ヲ止メテ曰ク安クンソ泣クヲ用テスルヲ為
シヤト良久ウシテ載克ハ聖敕ヲ回傳シテ曰ク既
ニ協商ニ係レハ則チ支煩ヲ必トセサルナリト又
敕ヲ夏榮ニ傳テ曰ク約款中增刪ノ處ハ法大
須ラク大使公使ト交渉歸正シテ可ナルヘシト
各大臣中惟タ圭卨齊純ノミ含嘿シテ言ナシ
址鎔重顯完用根澤及ヒ泳綺夏榮ハ俱ニ字
句增刪ノ場ニ辯論スル所アリ而シテ是ノ時圭
卨ハ避身ヲ為サントスルニ及ハスシ
至密ノ地ニ躍入ス外人覺ル所トナリ旋チ復タ
還入セリ其ノ時彼我兩邉ノ紛議稍定マリ大

使ハ躬自ラ執筆シ臣ノ所言ニ依リテ約稿ヲ改
定シ仍テ之ヲシテ乙覧ニ進呈シ並ニ洞燭ヲ蒙
セシム且ツ本國富強ノ後ハ此ノ約定ハ當ニ無
効ニ歸スヘク此ノ意ヲ以テ別ニ句語ヲ添ヘサル
ヘカラストノ事ヲ以テ更ニ聖敕ヲ傳ヘタルニ大
使ハ又自ラ執筆添記シ更ニ乙覧ヲ受テ竟
ニ調印スルニ至レリ
當場ノ事實ハ此ニ止マルノミ則チ臣等職政
府ニ居リ國體ノ損失ヲ罔念シ死ヲ以テ力爭
セス揆ルニ身分ヲ以テセハ豈ニ敢テ自解スル所ア
ランヤ然リ而シテ彈劾ノ人ハ該約ノ裡許ヲ問
ハス當夜ノ事狀ヲ知ラス輒スク臣等五人ヲ称
シテ賣國賊ト曰ヒ誤國賊ト曰フ是レ亦タ大
誤タルヲ免レサルナリ若シ該約ヲ以テ罪ヲ政府
ニ歸セハ則チ八個人ハ當ニ俱ニ其ノ責ヲ有スヘク
何ソ必スシモ五個人ノミ專ラ之ヲ擔ハンヤ韓圭
卨ヲ以テ之ヲ言ヘハ身首席ニ居ル苟モ砥柱ノ
儀望補天ノ手段アラハ則チ自家一人ト雖モ挺
身獨當シテ終夜堅執シ百般沮戲センコト術
ナキヲ患ヘス而シテ筵對ノ時ニハ上裁ヲ專請シ
外使問荅ノ席ニハ協商妥辦ノ四個字ヲ以テ盛
ニ聖旨ナリト述ヘ以テ口ヲ專制ニ藉テ而シテ諸
大臣ノ千言萬語モ同シク無力ノ地ニ歸スルコト
ヲ致シ空言否ト稱シ泣カント欲シ逃ケント欲セ
シム釣名ノ計ニ非サルハ無シ而シテ其ノ大議ノ已
ニ決スルニ及ヒ約稿ヲ扯碎シ印信ヲ叱退スル能ハ

ス則チ臣等五個人ト初ヨリ異同ノ言フヘキナシ
且ツ　使罷歸ノ後ニ於テ政府ニ退座シテ成
規ニ遵ハス獨自ニ奏ヲ草シテ罪ヲ臣等ニ誘シ
虛實相蒙ラシム其ノ本心ヲ究ムルニ直タ自テ免
罪ヲ圖ルニ過キス試ニ韓圭卨ハ所失ヲ論セハ
當ニ臣等五人ノ下ニ居ルヘカラス其ノ可否ヲ言
フノ大臣ニシテ始メ否ヲ言フト雖モ終リハ乃チ
力ヲ改正ノ事ニ盡セリ則チ亦タ臣等五個人ト同
一苦心ニシテ別ニ輕重ノ區別ナシ何ニ緣テ以テ
動モスレハ五人ヲ舉テ之ニ加フルニ無實ノ罪名ヲ
以テシ臣等ヲシテ覆載ノ間ニ容措スル所ナカラ
シムルヤ縱ヒ臣等五個人ノ身命ハ自ラ恤フニ遑
アラストスルモ而カモ堂々タル帝國ノ許多ノ民衆ニ

レテ一人ノ悟解分析スル者ナキハ是レ豈ニ寒心ノ
處ニ非サランヤ且ツ彈劾ノ章ニハ必ス須ラク證
據確實ニシテ方ニ登徹スヘキナリ彼等果シテ
執證スル所ノ者アリヤ人ヲ死罪ニ搆フルハ自ラ反律
アリ寔ニ祖宗ノ舊典ナリ凡ソ上項ノ事由ハ陛下
ノ深燭スル所ナリ故ニ曲サニ寛待ヲ加ヘテ罪ヲ加
フルニ忍セサル力臣等辭免スル所アレハ則チ之ヲ
勉メシムルニ辭スル勿レトイフヲ以テン自引スル
所アレハ則チ之ヲ諭スニ引スルコト勿レトイフヲ
以テセラル此レ誠ニ臣等ノ涓埃圖報ノ秋タルナ
リ伏シテ願ハクハ陛下國體ヲ深軫シ亟ニ嚴令ヲ
下シ以テ臣等ノ實犯ナキコトヲ明カニセハ是レ豈
ニ獨リ臣等五個人ノ幸ノミナランヤト

批シテ以ヘラク國ノ為メニ殫竭シ乃チ王事ニ心セリ凡百臣隣夫レ孰レカ然ラサラン其ノ或ハ時措ノ已ムコトヲ獲ルニ非サル有ルニ因リテ而シテ物議ノ責ヲ當事者ニ歸スルモノ亦タ鮮ヲ為ササルヘカラサラン目下岌業ノ形ハ惟同寅戮力ニ在リ庶幾クハ危ヲ轉シテ安ニ回サン卿等其レ各猛ク勉勵ヲ加ヘ亟ニ閑濟ノ策ヲ圖レト

(按)日韓協約締結當日ノ光景ハ大略此ノ一書ニ具セリ君臣互ニ其ノ罪ヲ推諉シ一モ宇内ノ大勢東洋ノ形便ニツキ計較籌圖スル所ナク百般沮戲ノ術ナキヲ患ヘスト云フカ如キニ至テハ心術ノ卑陋ナルコト亦甚シ其ノ約條中ニ安寧尊嚴等ノ白語ヲ添得タル如キハ天皇親翰中ニ已ニ存スル所ノモノ何ソ約條ニ載スルヲ必トセン然ルニ其ノ君臣尚ホ疑テ決スル能ハス一句語ヲ冗添シテ自ラ得タリト為ス如キハ亦タ哀レムヘキナリ

第五節　陛見召接

資料　第十二類第四種第一號乃至三九號參照

(按)明治三十七八年ノ戰役ハ帝國興廢ノ繫ル所ニシテ我カ邦ニ在テハ胡元ノ来襲以後未タ曾テ有ラサル所ナリ累戰克ク捷チ三十八年九月五日媾和ノ約成ルニ及ヒ我ハ露國ノ有セル滿洲ノ長春以南旅順口ニ至ルマテノ鐵道權ノ讓與ヲ得テ清韓ノ北疆地方ヲ固ウシ且ツ露國ヲシテ我カ韓國ニ對シ指導保護監理ノ措置ヲ執ルニ干渉セサルコトヲ認メシメタルヲ以テ十一月十七日帝國政府ハ韓國政府ト協約シ韓國ノ外交ハ我カ外務省ニ由リテ之ヲ行フモノトシ統監府及理事廳ヲ設ケテ韓國保護ノ任ニ

當レリ同年侯爵伊藤博文ヲ以テ統監ニ
任シ翌年二月一日ヨリ統監府及理事廳ノ事
務ヲ開始シタリ而シテ前記ノ協約ハ韓國
帝室ノ安寧尊嚴ヲ保障シタルヲ以テ警
務顧問ヲ聘用シ同年七月七日宮禁令ヲ發
シ從來雜輩挾雜ノ徒カ宮中ニ出入シテ陰
謀煽亂奸細壅蔽ノ因ヲナシタルモノヲ芟除シ
以テ宮中ヲ肅清シ數百年ノ弊習ヲ一洗スル
ニ努メタリ所謂宮中肅清是ナリ而シテ太王ハ
躬皇帝ノ尊位ニ據リ中外ノ具瞻スル所ト為ル
ヲ得タルハ古來半島ノ帝王家ニ在テハ未タ曾
テ其ノ比ヲ見サルナリ當時中外人ノ進見ス
ルモノハ統監府ヲ經由シテ宮内府ニ通牒スルノ
例ナルヲ以テ陛見ノ公文具サニ存ス今三十九年
○光武十年三月ヨリ翌年○光武十一年七月ニ至ルマテノ重
要ナルモノヲ摘録ス贈進ノ事實モ亦附見ス

明治三十九年丙午光武十年

二月一日統監府ヲ開廳ス統監侯爵伊藤博文

三月九日午後三時半侯爵伊藤博文ヲ漱玉軒ニ召接

ス帶同諸員海軍中將井上良智陸軍少將村田

惇通信管理局長池田十三郎書記官鍋島桂次

郎技師中原貞三郎海軍大佐宮岡直記書記官

俵孫一秘書官古谷久綱技師中村彦技師小山

善通譯官新庄順貞書記官荻田悅造通譯官

本多駒次郎伯爵宗重望正四位鍋島直映從四

位勲三等添田壽一

六月二十八日天皇陛下ヨリ茶器一具ヲ贈進セラル

九月九日午後四時統監侯爵伊藤博文ヲ召接ス

是ノ月十三日午前十時漱玉軒ニテ英國支那海艦

隊司令長官海軍中將エーダブリュームーア以下
諸員ヲ接見ス
十月十一日午後三時半侯爵伊藤博文ヲ召接ス
帶同諸員日本赤十字社副社長貴族院議
員錦雞間祗候男爵小澤武雄日本赤十字社
理事貴族院議員子爵松平乘承日本赤十字社
内局主事岩崎駒太郎日本赤十字社第二部二課長
陸軍二等主計縫谷元治日本赤十字社協贊員石川
千尋日本陸軍歩兵第五十四聯隊長歩兵大佐安
東貞一郎清國總領事馬廷亮清國總領事館
繙譯官陳秉焜
是ノ月三十日午後三時半統監侯爵伊藤博文ヲ召
接ス胤子勇ヲ帶同ス

十一月四日午後四時獨逸艦隊司令官海軍少將ブロ
イシンヲ招接ス
是ノ月八日本派本願寺大谷尊寶ヨリ古典聖德
太子十七憲法御文一軸三部妙典一通帶地一
卷綴額地一枚ヲ進獻ス
是ノ月十二日午後三時半統監侯爵伊藤博文ヲ
召接ス
是ノ月十九日午後三時半統監侯爵伊藤博文ヲ
召接ス帶同諸員本派本願寺韓國開教總
監大谷尊寶同贊事大内慧明同録事依
光俊照
是ノ月二十一日午後三時伊國軍艦艦長ノエリス
男爵及ヒ同艦乘組海軍士官五名ヲ接見ス

十二月九日午後三時半統監代理長谷川好道ヲ
召接ス
是ノ月三十日午後三時半臨時統監代理駐劄軍司
令官男爵長谷川好道ヲ召接ス
是ノ月　日真宗大谷派本願寺管長伯爵大谷
光瑩ヨリ京城別院慶落式ニ臨儀ヲ願ヒ御
筆大韓阿彌陀本願寺ノ賜額ノ陳謝スル表
ヲ上ツル之ヲ嘉納ス

明治四十年丁未（光武十一年 即隆熙元年）
一月二十二日正午特使宮内大臣子爵田中光顯進
宮ス統監代理長谷川好道亦タ進參ス
是ノ月三十日午後三時特使宮内大臣子爵田中光
顯及ヒ男爵長谷川好道ヲ召接ス
三月十三日午後三時半統監代理男爵長谷川好道
ヲ召接ス
是ノ月二十一日午後九時半統監侯爵伊藤博文ヲ召
接ス
是ノ月三十日午後三時半統監伊藤博文ヲ召接ス
同時ニ統監府書記官倉知鉄吉及ヒ米國人
ジョージトランブルッドヲ召接ス
五月二十一日機密第六號函ヲ以テ統監侯爵伊藤博

文ヨリ參内ノ上親シク奏聞ノ為メ二十二日午後三時半内謁見被仰付タキコトヲ奏稟シ翌二十二日午後四時半宮内府大臣李載克ヨリ旨ヲ傳ヘテ接見ス

六月二十八日午後四時統監侯爵伊藤博文及帯同ノ日本國駐清公使林權助ヲ召接

七月二日統監侯爵伊藤博文ヨリ帝國練習艦隊司令官海軍中將富岡定恭以下同艦隊乘組將校ノ謁見ヲ請ヒ宮内府大臣李載克ヨリ奏稟シテ三日午後四時帯同進宮セヨトノ旨ヲ傳フ

(按)陛見公文ニ發送ハ七月二日シテ其ノ接受ヲ七月五日トシ宮内府大臣傳言ノ按文ト符合セサルハ接受日子ノ記入ニ誤アルニ過キス蓋シ二日夜深更統監ハ海牙密使事件ノ電報ニ接シタルモ豫定ノ進謁日ニ富岡中將以下ヲ帯同シテ進謁シ退出ノ際一封ノ電報譯文ヲ禮式課長高義敬ニ交付シ我ヲ敵視スルモノアラハ我能ク之カ敵タラント告ケ他ニ一語ヲ贅セスシテ退出シタルハ蓋シ此ノ時ニ在リ

是ノ月十八日午後四時伊藤博文ヲ召接ス

是ノ月十九日位ヲ皇太子ニ傳フ

是ノ月二十日宮内府大臣署理李允用ヨリ敕教ヲ奉承シ皇太子陛下ノ代理受賀後ニ進宮アリタシト通知シ午後四時統監侯爵伊藤博文ハ統監府文武官奏任以上員ト各國總領事官ヲ帶同シ相率キテ皇太子ニ重明殿ニ進謁シタリ○重出

(按)陛下ヲ以テ皇太子ヲ稱セス又受禪後ニ皇太子ヲ以テ稱セサルハ例ナリ然ルニ當時此ノ矛盾ノ語ヲ用サタルハ太王ノ遜位カ其ノ心ニ怒然タルモノアリテ宮中猶ホ疑懼ヲ抱キタル事實ヲ徵スヘキモノナリ今改メス

附録

日本公補任録

明治十三年七月十七日公使館ヲ朝鮮京城ニ置ク

花房義質（岡山縣士族）十年九月十日代理公使ヲ以テ派遣十三年四月十七日辨理公使ニ任シ駐劄ス十五年九月二十八日歸朝同十一月六日外務省三等出仕ニ補ス

竹添進一郎（熊本縣士族）十五年十一月六日辨理公使ヲ以テ駐劄十八年六月三十日罷ム

近藤真鋤（愛媛縣士族）二十年八月六日代理公使ヲ以テ駐劄二十三年十一月一日卒ス

河北俊弼（山口縣士族）二十三年十二月十七日代理公使ヲ以テ駐劄二十四年三月十日辨理公使ニ任ス

同日任地ニ於テ卒ス

梶山鋭介○山口縣士族 二十四年三月二十三日 辯理公使ヲ以テ駐劄 二十五年十一月十六日罷ム

大石正巳○高知縣士族 二十五年十二月十六日 辯理公使ヲ以テ駐劄 二十六年七月十五日罷ム

大鳥圭介○静岡縣士族 二十六年七月十五日 特命全權公使ヲ以テ清國ヨリ兼勤 二十七年十一月十日 樞密顧問官ニ任ス

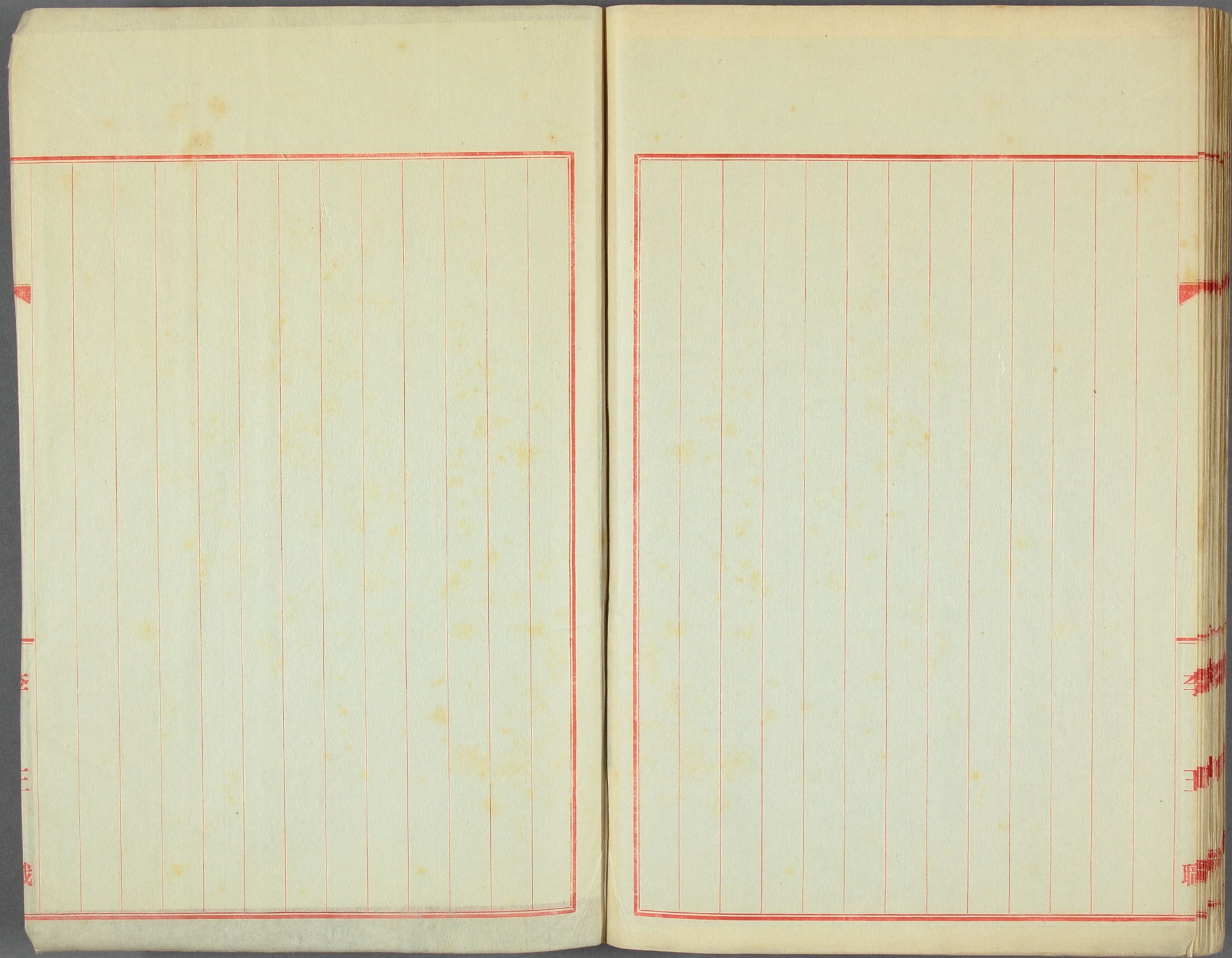
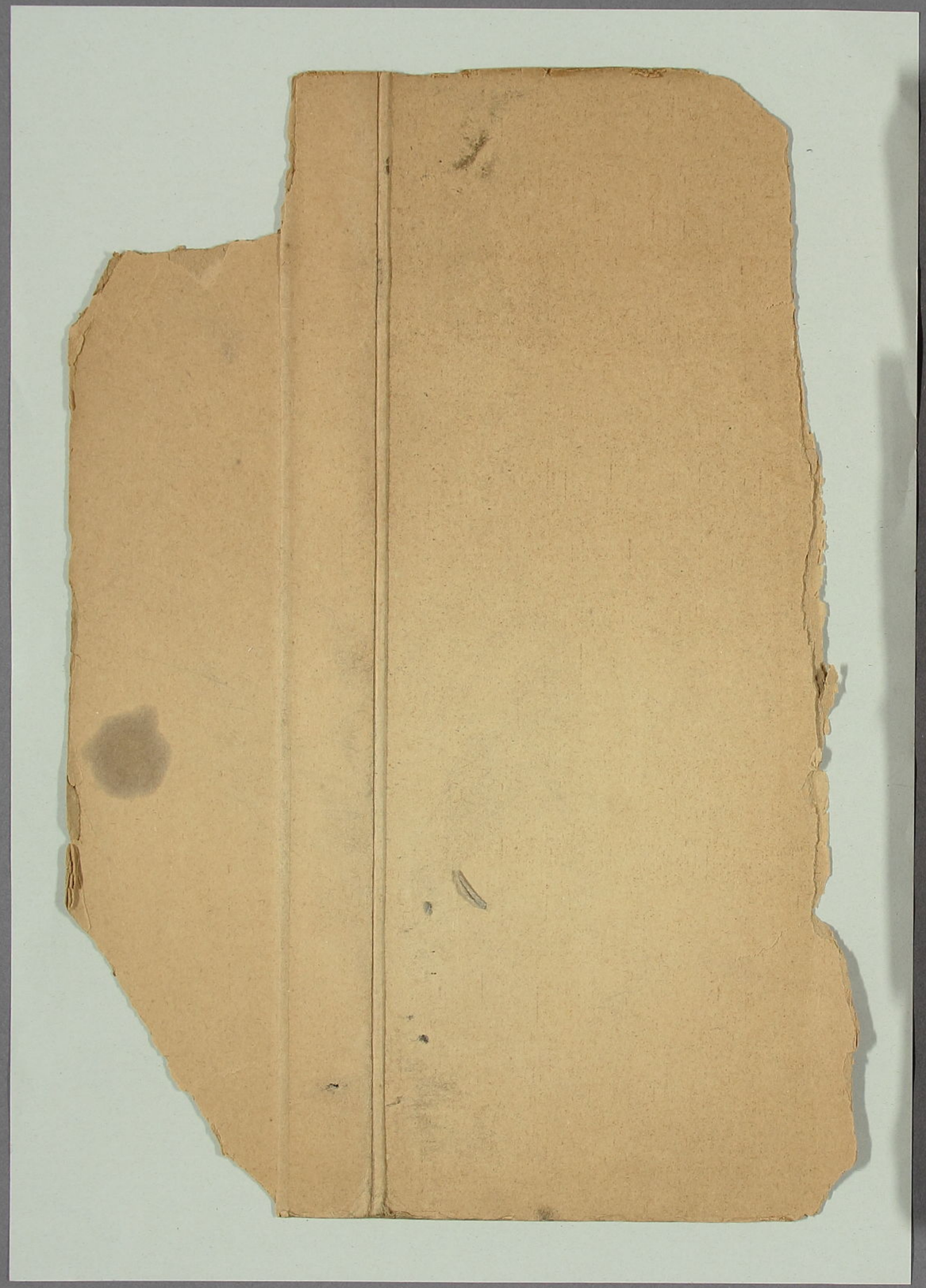
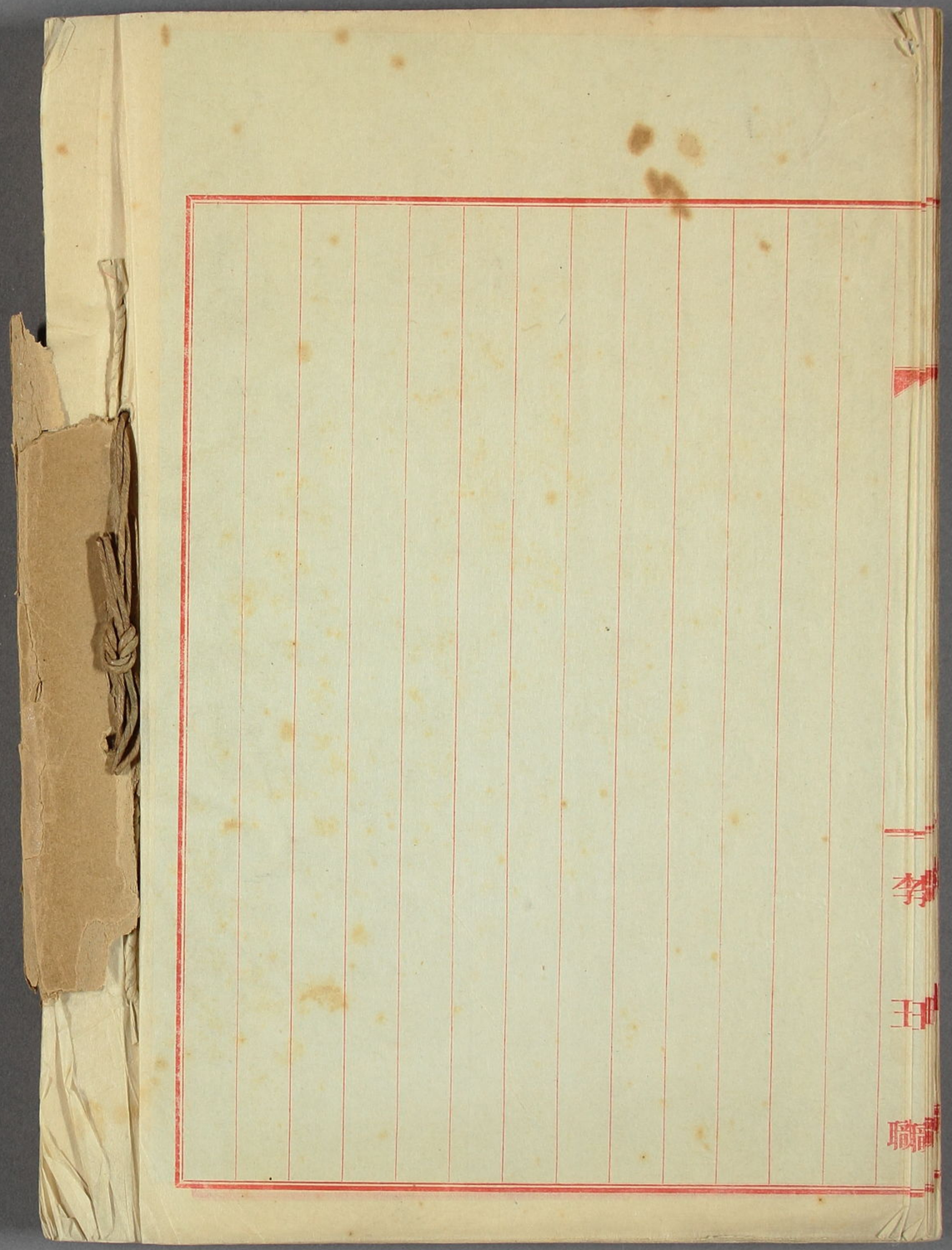
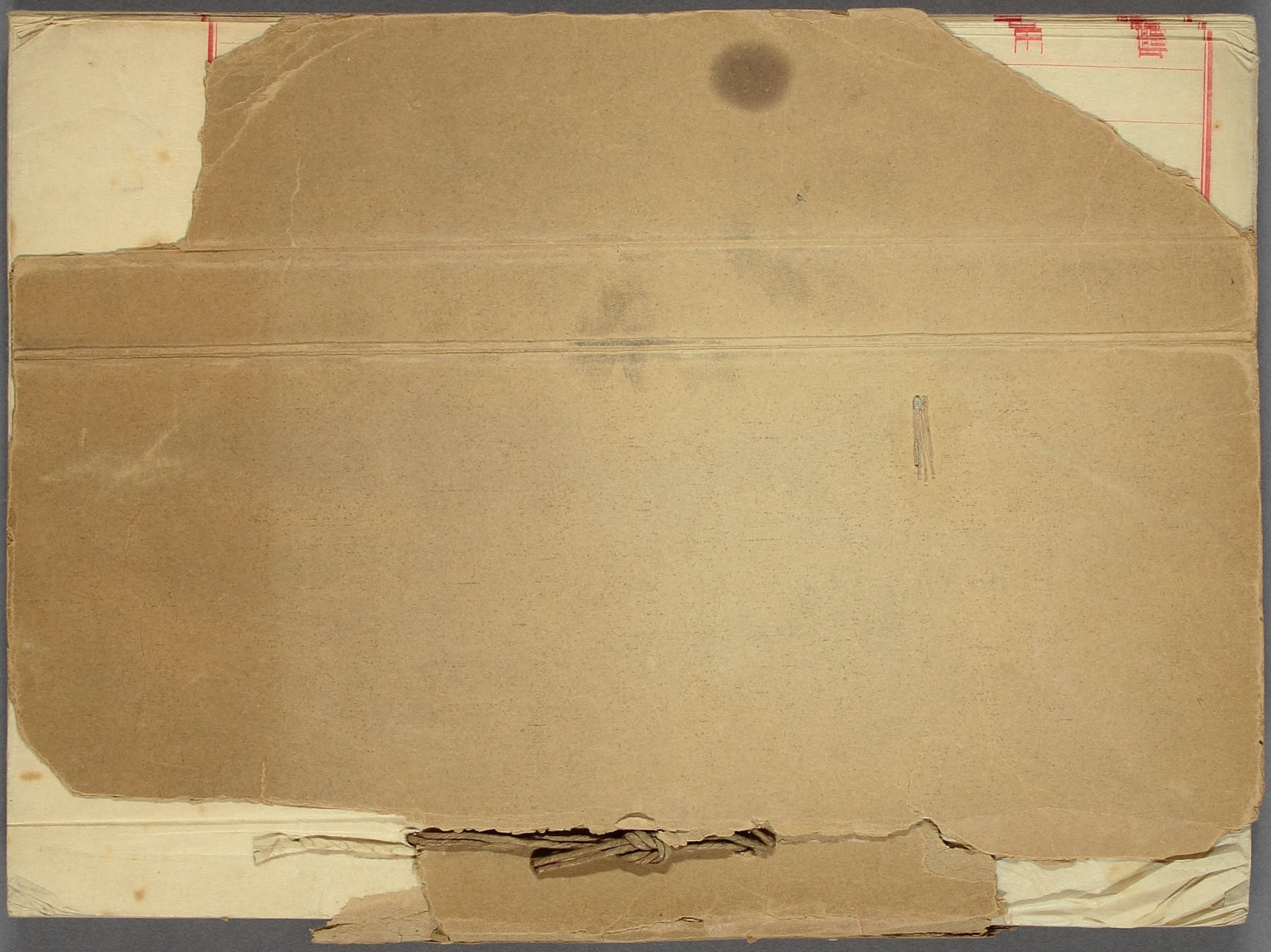
井上馨○山口縣士族 二十七年一月十四日 特命全權公使ヲ以テ駐劄 二十八年十月二十一日 待命

三浦梧樓○山口縣士族 二十八年八月十七日 特命全權公使ヲ以テ駐劄 二十八年十月二十四日罷ム

小村壽太郎○飫肥士族 二十八年十月十七日 辯理公使ヲ駐劄 二十九年四月八日 特命全權公使ニ任ス 二十九年六月十一日 外務次官ニ任ス

原敬○巖手縣士族 二十九年六月十一日 特命全權公使ヲ以テ駐劄 三十年二月二十三日罷ム

加藤増雄○桑名士族 三十年二月二十三日 辯理公使ヲ以テ駐劄 三十一年六月十三日 特命全權公使ニ任ス 三十二年六月一日 待命

林權助○福島縣 三十二年六月一日 特命全權公使ヲ以テ駐劄

明治三十九年一月三十一日 公使館ヲ閉鎖シ二月一日 統監府ヲ開廳ス